



魂のゆくえ

鈴木徳彦

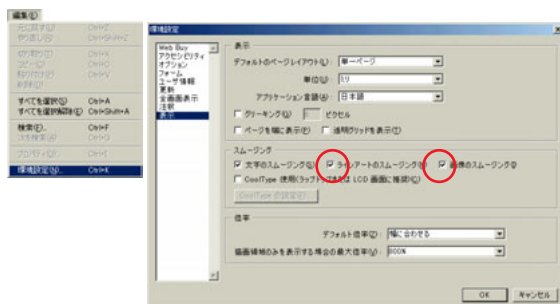
『Boon-gate』のPDF作品を ご覧いただく前に…

操作について

- 作品の多くは「もくじ」のページで、進みたいページの項目を押せば、そのページまでジャンプし、また、ジャンプしたページのタイトルを押せば、目次のページに戻るように設定しております。
- 直前に開いていたページに戻るには、画面上の「◀」ボタンで、直前に開いていたページに戻ります。

設定について

- 『Boon-gate』の作品は「Acrobat Reader 5.0」でご覧になることをお勧めします。「編集」-「環境設定」-「表示」-「スムージング」内の「ラインアートのスムージング」と「画像のスムージング」の項目にチェックが入っていない場合はチェックを入れてください（下図）。図表などがきれいに表示されるようになります。



http://www.bungeisha.com/PDF_is/05-top1.html でPDF作品についての説明を致しております。ご参照ください。



魂のゆくえ

鈴木徳彦

目次

はじめに

7

第一章 人の位

19

1 宗教家と弟子

20

2 直訴

25

3 二人の老婆との再会

35

第二章 魂のゆくえ

53

1 我が子の魂

54

2 “ここ”と“そこ”と“あそこ”

79

3 前世

97

4 我が魂は我が魂に非ず

112

第三章 時

135

1 全てが時の中に存在する

136

2 組み替えと入れ替え

157

3	同時進行	181
---	------	-----

4	心魂	201
---	----	-----

第四章	道	217
-----	---	-----

1	誕生	218
---	----	-----

2	御結びの縁	240
---	-------	-----

3	罪事	264
---	----	-----

4	自分を許すことが御霊祀りと供養	283
---	-----------------	-----

第五章	導き	307
-----	----	-----

1	我が子を不幸にしたいならば	308
---	---------------	-----

2	導きに感謝	320
---	-------	-----

魂の図式		331
------	--	-----

あとがき		343
------	--	-----

おわりに		348
------	--	-----

はじめに

あなたの判断で良いと思う項目があれば□の中に○を書き入れてみてください。

親子の契り、夫婦の契り、兄弟姉妹の契り、親戚の契り、三軒両隣の契りの、心のあり方を変えること、選ぶこと、分かることを知るための必要項目です。

□長男夫婦が父や母を墓参りに連れて行かないから、娘夫婦が連れて行ってあげれば、親孝行になるから良いと思う。

□親として見た場合、どんな子供も平等だから、嫁いだ娘やその子供のために、保険や貯金をしてあげるとは、喜ばれるから当然だと思う。

□子供達は全て平等に、親孝行をさせることが、親としての役目だと思う。

□兄弟姉妹は、平等に親孝行をすべきだと思う。

□男でも女でも生まれた順番が、順序だと思う。

□従兄弟は年がいった順が順序だと思う。

□長男がいても当てにならないから、娘にも養子を取らせても良いと思う。

□子供達として、親が生きている最中は親孝行をし、親が亡くなったなら、墓参りが当然だと思う。

□家は誰が継いでも良いと思う。

□近くに住んでいる人が、親孝行すればよいと思う。

□酒飲みで暴力を振るう夫なら、離婚した方が幸せになれると思う。

□暴力を振るう父親は、子供の教育のために良くないから、離婚した方がよいと思う。

□嫁いだ娘が親の愚痴を聞いてあげることが親孝行だと思う。

□親と長男夫婦の折り合いが悪いから、弟夫婦や娘夫婦が、親の愚痴を聞いてあげたり、食事や旅行に連れて行ってあげることが親孝行だと思う。

□仲が悪く喧嘩が絶えない夫婦なら、離婚した方がお互いの幸せのためだと思う。

□息子より娘に跡を継がせたり継いだ方がよいと思う。

□息子を養子に出して、娘に養子を取った方がうまくいくと思う。

- 出来の悪い長男夫婦より、出来の良い娘や弟夫婦に跡を継がせた方がよいと思う。
- いじめっ子は当然、罰せられるべきである。
- 非行に走った子供の親が可愛そうだと思う。
- 水子を祀らないと、あとに残った子供達に不幸が起きると思う。
- 水子の崇りがあると思う。
- 水子を祀らないと崇りがあると思う。
- 地縛霊や色情の因縁の崇りがあると思う。
- 幼くなくなった子供を、真剣に供養しないと他の子供達が苦しめられる。
- 御霊祀りや先祖供養を、真剣にしないと崇りや因縁が起き、苦しめられると思う。
- 不幸の元は御霊祀りや先祖供養や墓参りを、真剣にしないからだと思う。
- 三代前や五代前の崇りや因縁があると思う。
- 母に口答える嫁との喧嘩は、嫁の方が悪いと思う。
- 娘と姑との喧嘩は、姑の方が悪いと思う。
- 娘と嫁の喧嘩は嫁が悪いと思う。
- 娘と嫁ぎ先の小姑との喧嘩は、小姑が悪いと思う。

□先祖供養をしないと、先祖が浮かばれないと思う。

□先祖や墓が絶えないように、誰でも良いから家を継げばよいと思う。

□実家が遠いから、親の写真やお位牌を、祀って拜めば幸せになれると思う。

□亡くなった兄弟の写真やお位牌を、祀ってあげれば浮かばれると思う。

□長男が亡くなれば、他の兄弟姉妹が跡を継げばよいと思う。

□跡を継いだ長男が亡くなれば、嫁に出て行ってもらい、他の兄弟姉妹が継いだ方が良く
と思う。

□兄が亡くなったので、弟が兄嫁と結婚して家を継いであげれば、兄が浮かばれると思う。

□長男夫婦がいても、娘にも養子を取っても良いと思う。

□長男夫婦が出ていってしまったので、娘に養子を取らせて跡を継がせれば良いと思う。

□婿養子の場合、養子娘が土地や財産の家督権利を、継ぐことが当然だと思う。

□実家の仏壇や御霊屋は継いだ人にまかせて、他の兄弟姉妹は墓参りだけでも良いと思う。

□親孝行は誰でも良いから、できる人がやれば良いと思う。

□子供達が全員親孝行をしないと、自分の子供に親孝行をしてもらえないと思う。

□幸せになれますようにと拜めば、幸せになれると思う。

□不幸になりませんようにと拝めば、幸せになれると思う。

□仏壇や御霊屋は開けたままの方が、先祖が喜ぶから閉めない方がよいと思う。

□家族が起きた時に仏壇や御霊屋を開け、寝るときに閉める方がよいと思う。

□崇りや因縁があると思う。

□崇りや因縁は先祖供養を真剣にすれば断ち切れると思う。

□悪いと言われる方位に、盛り塩を置けば良くなると思う。

□自分で定期的な、屋敷の四隅に塩を撒けば、因縁が断ち切れてくると思う。

□法律で決まっているように、財産は平等に兄弟で分ける方がよいと思う。

□誰でも良いから実家を継ぎ、御霊祀りや先祖供養を、真剣にしてくれる人が、財産を多めにもらえばよいと思う。

□姉妹は仲良く行き来するために近くに住んだり、お互いの鍵を持ち合った方が便利だから良いと思う。

□兄弟姉妹が経営する仕事に、他人を使うより兄弟姉妹や甥姪を使ってあげれば、お互いの助けになるから良いと思う。

□同居している息子より、嫁いだ娘に預貯金通帳を預けた方が、安心できるから良いと思

う。

□ 婿に内緒で娘の貯金通帳を、預かってあげても良いと思う。

□ 親の仕事は兄弟姉妹の内、誰でも継げる人が継げば良いと思う。

□ 夫婦は平等だから両方の先祖を、祀れば幸せになれると思う。

□ 両方の親に孝行すれば、幸せになれると思う。

□ 兄弟のところに子供が出来ないなら、絶えないように弟や妹や甥姪が、養子養女の縁組みをしてあげればよいと思う。

□ 嫁や婿は他人だと思う。

□ 姉妹の配偶者が気に入らなければ、姉妹だけで行き来をしていけばよいと思う。

□ 兄弟の嫁が気に入らなければ、付き合わなければよいと思う。

□ 離婚した両親のどちらかでも良いから、引き取ってあげることが親孝行になると思う。

□ 嫁と折り合いが悪い親を、引き取ってあげることが親孝行だと思う。

□ 離婚した兄弟姉妹の子供を可愛そうだから、引き取ってあげることが良いと思う。

□ 兄弟の離婚した相手とは付き合わない方が、自分の子供のために良いと思う。

□ 離婚した子供を、引き取って自立できるまで、世話をしてあげることが、親として当然

だと思う。

□離婚する兄弟姉妹や甥姪の、保証人になってあげても良いと思う。

□弟が幼いので結婚するまで、娘夫婦が同居してあげた方が、親のためによいと思う。

□嫁いだ娘の部屋が狭く、家具を置く所がないなら、預かってあげるのは娘のため親として当然だと思う。

□嫁いだ娘の子供のオモチャや、着替えのベビードレスを置いてあげれば、持ってくる手間が省けて良いと思う。

□親が生きている最中は親孝行、親が亡くなったなら墓参りは、子供として当然な事だと思う。

□子供達を仲良く同じ屋敷内や近くに住まわせることが親の役目だと思う。

□兄弟姉妹が一緒に頑張って親の仕事を手伝えれば良いと思う。

□親や親戚や兄弟姉妹の位牌や写真を祀れば幸せになれると思う。

□親戚の墓が近ければ墓参りや花を替えてあげれば喜ばれ、幸せになれると思う。

□嫁いだ娘でも実家の鍵を持っていたり、娘夫婦の家の鍵を持つと便利でよいと思う。

□学歴がないと幸せにならないと思う

- 勉強の出来ない友達とは、付き合い合えない方が良いと思う。
- 悪い友達とは付き合い合えない方がよいと思う。
- 子供に勉強しなさい、と言い続けないと勉強しないと思う。
- すぐ隣の人と付き合いたくないなら、付き合いなくても良いと思う。
- 子供のイジメや恐喝や非行問題は、学校側の責任だと思う。
- 親が不幸な人生を送ったと思っている。
- 自分の過去の人生を振り返って不幸だと思っている。
- 現在より過去が良かったと思っている。
- こんな人と結婚しなければ良かったと思っている。
- こんな子を産まなければ良かったと思っている。
- こんなはずではなかったと後悔している。
- 性悪説のように、人間は生まれながらにして、悪の心を持っていると思う。
- 地獄があると思う。悪いことをすれば地獄に堕ちると思う。

どうですか？ ○の数がいくつありましたか？ ○の数が多ければ多いほど、気づいてもらいたいことがあります。

人は育つ環境や習慣によって、勘違いな常識を受け継いでしまっているのです。その常識を、また子供に受け継がせ、その子供が受け継ぎ、代々同じ人生を背負い、家系ができています。

この『魂のゆくえ』の本は、一つでも○の数が少なくなり、一人でも多くの人達が気づき、一人でも多くの人達が悟りを開き、全てを許し、全てを愛することを、目的に書いたつもりです。

この本の内容は、神様の世界では、一つの魂で結ばれていますが、人間界では、その一つの魂が、二つに分かれ、その二つの魂が、ことごとあそこに分かれ、陰陽和合に分かれ、何十億人が共存共栄する現代社会になりました。

しかし、何十億人もの人達がありますが、実際には魂はたったの二つだけなのです。あなたが他人だと思っている人は、実は他人ではなく、あなたにとって、何かを気づき、何かを悟るために、無くてはならない人なのです。父親と母親、夫と妻、兄と弟、姉と妹、兄と妹、姉と弟、父親と娘、母親と息子、祖父と孫、祖母と孫、叔父と姪、伯母と甥、従兄

弟同士と様々な組み合わせがあります。その組み合わせも、あなたにとって、何かを気づくために、人間界で再会しているのです。この組み合わせは、前世と現世と来世、ここそことあそこ、過去と現在と未来を結ぶために、無くてはならないのです。

前世では夫婦であったが、現世では兄弟姉妹になったり、来世でまた夫婦になったり、前世で親子であったが、現世では嫁と姑や叔父と甥になったり、来世では夫婦になったり、配偶者の親になったりして、お互いが入れ替えると、組み替えを繰り返し、様々な人間模様を織りなしています。

何故このように、入れ替えと組み替えを、繰り返さなければならないのか？

それは前世と現世と来世の中で、お互いがお互いの立場と順序を悟り、全てを許し、全てを愛することを、神様と約束し、人間界に戻ってきたのです。

あなたが一番嫌いな人が、前世のあなたの姿と人生だと、気づいてもらうために出会い、全てを許し、全てを愛するために、神様の世界から、あなたは人間界に、舞い降りてきたのです。

人間界に舞い降りるとき、丁度良い親をみずから選び、誕生してきます。その親はあなたが悟りを開くために丁度良いからと思ったからです。また親も我が子が誕生するまで

に、夫婦の契り、親子の契り、兄弟の契り、親戚の契り、三軒両隣の契りなどを結び待ち受けます。

だが、十月十日を待たずに水子になったり、無事に産まれても、身体障害者として産まれたり、花粉症やゼンソクやアトピーなどを背負って産まれたりするのは、さまざまな契りを結んだ人々のお陰であり、その人々に感謝すること、立場と順序を気づいてもらうことを、目的に書きました。

この『魂のゆくえ』の本は、あなたに気づいてもらうために、登場する人物は架空の人物ですが、何かを気づいてくれると思います。

第一章 人の位

1 宗教家と弟子

ある国に自他共に認める、偉い宗教家がいた。その偉い宗教家は、何千人も入る広い講堂で説教をしている。毎日入りきれない信者が全国から集まり、熱心に聞き入っている。

宗教家の講話は、神様に手を合わす心を説き、慈悲を思い、情けをかけ、哀れみ深く人をいたわり、御霊祀りと先祖供養を説き、天国と地獄や罪と罰を教え、崇りと因縁の因果をたたき込み、道徳と親孝行を説き広めていたから、信者達は心から信じ、感銘し感謝していた。だが宗教家に仕える送迎バスの運転手は、講話の最中は暇を持て余し、博打を打ったり女遊びをしたり、酒を飲んで暇つぶしをして、無駄な時を過ごしていた。

その偉い宗教家と、飲んだくれで乱暴な運転をする弟子が、同時に亡くなり天に召され、気がついた時は、見知らぬ老人の前で、神妙に座っていたが、お互いが隣の気配に気がつき、顔を見合わせ驚いた。

「何だ！ お前だったのか！ お前は生前は飲んだくれで、他人に迷惑ばかりかけていたからな！ それにしても、まだ酒くさいぞ！」

「ヒィック！ なあんだ！ ご主人様だったんですか？ それにしてもご主人様が何故、急に亡くなられたのだろう。もっと不幸な信者を救って欲しかったのになあ！」

と不思議な顔をして、生前仕えた師を眺めていた。

「私も同じ事を考えていた。こんなに早く亡くなるとは、夢にも思っていなかった。生前は何も悪い事をした覚えがなかったのに、もっとやる事があったのにな！」

宗教家は何故だか、分からない様子である。確かに宗教家としては立派に生きてきた。信者が見ても、素晴らしい人生だったことは事実である。だが夢ではなく現実である。

「お前達に生前の行いに見合った家を授けよう」

突然、老人の声が出た。ビックリした二人は、お互いの顔を見合わせていたが、威厳と尊厳をただよわせた老人が、神様だと分かるのに、時間はかからなかった。

神様は二人の魂の使者から、生前の行いの通信簿を受け取り、審査し始めた。その間、二人は神妙な気持ちで、審判が下されるのを待っていた。家には様々な大きさがあり、生前の心のあり方や生き方や、人間性を見抜かれて、決められることになっていると、使者

から耳打ちされたので宗教家は、ニヤニヤしながら回想し始めた。

「私は若い頃から、宗教の道に入り修行をし、有りとあらゆる行を克服し、諸先輩にも逆らわず、教義や道徳と慈悲と情けを説法し、天国と地獄の因果を説き、優しい心で親孝行と御霊祀りや先祖供養をしないと、崇りと因縁が起き、真剣に手を合わせなければ、神様の罰が当たると説いてきたから、最高位の家を与えられるであろう」

顔がほころび、優越感を隠し切れない様子である。一方、隣で神妙に座っている運転手は、ニヤニヤ思い出し笑いしているご主人様を横目で見ながら、生前の人生を振り返っていた。

「わしは若い頃から親に逆らい困らせ、好き勝手なことをしてきたからなあ。先生と出会ってからも、講義の最中は講話も聞かず、女遊びはするし博打を打ったり、酒を飲んで暴れるし、女房には苦勞をかけ、子供達にも出来の悪い父親だったなあ。信者達にも乱暴な運転をして怖がせたから、たぶん地獄へ落とされるのは確実だろうなあ……」

宗教家とは反対に運転手は、生前の行いをつくづく反省していた。しばらくして、二人の通信簿を見終わった神様は、始めに宗教家を一步前に近づけて言った。

「お前の生前の行いを審査させて頂いた。お前に丁度よい家を与えよう」

宗教家は優越感を隠し切れず、ニコニコしながら

「ありがとうございます」

「お前にはあの家がよかろう！」

神様の使者に案内された家は、自分が想像したより小さかった。だが1DKながらも一人で住むには十分な広さで、庭には小鳥がさえずり、春夏秋冬の花々が同時に咲き誇り、雲海の上から眺める景色は、心が洗われるような壮大な、大自然の恵みが澄み渡り、家は小さいながらも、素晴らしい風景を宗教家は享受している。

ふと、我に返った宗教家は、生前の癖が出てしまい、弟子の鑑定を自分なりに、自信たっぷりで占い始めた。

「私がこのくらの家だから、あいつは悪行ばかり重ねてきたから、さぞかしボロボロなあばら家か、地獄行きだろうなあ」

と指折り数え、独り言を言いながらも、間違いないという確信を持って、満足そうに弟子の審判に、耳を傾けていた。その時、神様の使者が飲んだくれに向かって、大きな声でなった。

「おい！ その飲んだくれ！ お前の番だ！」

「へえ！」

まだ酒臭い飲んだくれは首をすくめて、ビクビクしながら小声で返事をした。神様は意地悪くおどすように荒い口調で伝えた。

「お前の生前の行いには、さぞかし奥さんや子供達が、嘆き悲しみ泣いていただろうな！お前が死んでからは、家族全員がホットしているだろうな！　なあ飲んだくれよ！」

飲んだくれは何も言えない。何を言われても返答を返す余地はなく、身をすくめて恐縮し、ただ反省するばかりである。そんな仕草を眺めながら、今度は優しく言った。

「お前にはあの家がふさわしいから、あそこに住みなさい！」

と言われて、指でさされた家を見て、ビククリ仰天し腰を抜かした飲んだくれは、開いた口が締まらない。

2 直訴

腰を抜かしたのは飲んだくれだけではなかった。宗教家もビツクリ仰天、腰を抜かした。それもそのはずで、与えられた家は、宗教家の隣の屋敷で何倍もあり、何家族が住めそうな大きな御殿であつたからである。宗教家はあ然と腰を抜かしたまま声も出ず、

「……………」

飲んだくれも半信半疑で、

「……………」

ビツクリ仰天し腰を抜かしたが、我に返つた宗教家は、今度は怒りがこみあげてしようがない。だから神様に向かい直訴した。

「何か間違つてはいないのか？ 生前の通信簿を見直してくれないか？ 私のと弟子の通信簿が、入れ替わつてないか調べ直してくれないか？」

だが、審判を終えた神様は満足したように、ニコニコ笑っているだけである。宗教家は納得がいかない。

「何故……………だろうか？」

不合理な審判に不服である。今までの人生は何だったのか？ 宗教家としての人生が、何だったのか？ 自分自身に問いかけても、何もやましいことはないであろうに。そんな宗教家の心を見抜いた神様は、心の中に光りを注ぎ込むように、論し始めた。

「確かにお前は素晴らしい人生だった。人間界としては素晴らしい講話をした。お前の講話を聞いた信者達は、先祖を真剣に御霊祀りや供養し、祈り感謝することを覚えた。だが、お前自身は神を無視したばかりではなく、自分の徳を伸ばすことだけを、常に考えていた。お前は信者達に対して、自分の徳をさらけ出し、お前のお陰だと思わせ、感謝する事をたたき込んだ。お前は神の名を利用して、名誉と栄華を求め、権力と地位を欲しいままに独占し、この場に来ても反省するでもなく、弟子の生き方を批判していた」

「……………」

思い当たる節があるから、宗教家は何も言えず、ただ黙って反省するばかりである。

「反対にお前に仕えた飲んだくれは反省していた」

「……………」

「お前の弟子は、博打を打ったり、女遊びをしたり、酒を飲んでは乱暴な運転をするが、神を求めさせた。神に対して真剣に、祈らせる行為をさせていたのだ」

宗教家には意味が分からない。弟子はただの飲んだくれではないのか？ 自分が神様を求め祈らせる行為を、教えたのではないのか？

「お前が説いた講話を、信者達に身をもって体験させたのだ」

それでも宗教家は分からない、という態度をとったので、

「お前の教えを聞いた信者達は、飲んだくれのバスに乗って、送ってもらおうだろう。だが乗った途端に、飲酒運転や乱暴な運転をするから、信者達は何と言っただろうか？ 『神様どうか無事に着けますように！ 神様どうかお助けください！』と手を合わせ、神に祈ってきた。神に救いを求めさせたのだ。お前は祈ることを信者達に教えたが、弟子は祈ることを実践させたのだ。アッハハハハハ」

何となく分かるような気がするが、納得はできない。人間は意味は分かるが、理解できない。理解はできるが、納得がいかない。納得はできるが、実行できないという、段階があるからである。

「神様！ それでは何をやってもよいと、言われるのですか？ 私は幼い頃から、正直に生きなさい！ 人のためになることをしなさい！ 嘘をついてはいけません！ 人のいやがることをしてはいけません！ 勉強をしなさい！ 学問を身につけなさい！ 親孝行をしなさい！ 先祖供養を真剣にしなさい！ 先祖のお陰でお前がいるのだと、親から言われ続けてきました。私は一生懸命に学問を身につけ、親の忠告を守り、最高位まで高めてきたのです。だから私と同様に、弟子達にも真剣に教えてきた。だが、この飲んだくれは、私の説教を無視し逆らってきた。私に反発するだけだった。何故、私がこんなみじめな思いを、しなければならぬのか」

確かに宗教家は精一杯生きてきた。誰が見ても真面目に生きてきた。人間界では信者達が宗教家を偲んで、毎日泣き崩れているのが、目に見えるからなおさらである。

それに引き替え、飲んだくれの妻や子供達はアツケラカンで、亡くなってからの方が明るく、幸せに暮らしているのが、手に取るように分かるから、

「私は信者達に慕われていた。私がいなくなつて、途方に暮れている信者達を見ると辛い。私がいかに大切な存在だったか、いかに必要な人間だったか」

「お前の言うことも分かる。だが、お前は外に自分を現しすぎ、外の位を求めすぎてしま

ったのだ。栄光や権力、地位や名誉、トロフィや賞状など、表面だけの徳を求め、誠の徳を求めていなかったのだ」

「神様！ 成功を求めてはいけないのか？ 人間界では幸せを求め、成功を求めて頑張っている。成功して裕福な人生を送ることが、生きる目的ではないのか？ 成功しなかった人は、敗北人生を送り、成功者に服従し、みじめな人生を送っている。成功者は社会に貢献し、多額の寄付を援助し、困った人たちを救っている。困った人たちに寄付をするために、成功を求めることが、何故いけないのか？ 困った人達を救うことは、成功者の義務であり、名誉ではないのか？ 敗北人生を送っている人の方が、自分に負けたのではないのか？」

ビックリ仰天した飲んだくれも、酔いがさめたらしく、神様と自分が仕えたご主人様のやりとりを、一部始終聞いていたが、腑に落ちず訴えかけた。

「わしもご主人様の意見に賛成だ。わしみたいな人間界では、ろくでもない者が、御殿を与えられ、ご主人様みたいな立派な人が、みじめな家を与えられることが、納得できない。わしは怠けて、自分に都合の良い言い訳をして、いい加減な人生を送ってきた。ご主人様は誰にも平等に優しく接してきた。各方面にも貢献し、多大な寄付をし、どれだけの人達

から感謝されたか、わしが一番知っているつもりだ。わしは素直になれなかった……。偏屈になっていたのだ」

飲んだくれは、生前仕えたご主人様の肩を持ち、涙ながらに訴えた。だが神様は、

「人間の徳とは何か？ 確かに宗教家として、人間界では素晴らしい徳があった。だがこの世界では、そんな徳は、ただの副産物に過ぎない。何十人、何百人、何万人の信者を救うことが徳というなら、それは外に向かった偽りの徳なのだ」

「偽りの徳……………」

二人は口をそろえて聞き直した。

「そうだ！ 偽りの徳だ！ 何万人の困った人達を救ったために、泣いている人間もいることを、理解していない証拠だ。灯台下暗しだと言うことだ」

「どんなに素晴らしく、どんなに慈悲深い人でも、全ての人達を救うことは出来ない。だから落ちこぼれの人達が、出来てもしょうがないのではないのか？ 灯台下暗しが出来ても、仕方がないではないか？」

「お前の言っていることも事実だ。だが内に向かった徳を、捨てていることも事実なのだ。お前は自分の徳を、誰のためにしているのかを分かっていない。お前の徳は、お前の徳で

はないのだ。だから誰に返すかと言うことを、理解していなかったのだ」

「私の徳は、私の徳ではないのか？ 私が自分自身の努力で、勝ち得た徳なのだから私の物だ！ 誰に返すか返さないかは関係ない、私の徳は私の徳なのだ。私に感化された人達が、私と同じように努力している。だから私は成功の手本を、作ってあげたのだ。誰でも努力次第で、成功することが出来ると言うことを、実証してきたのだ。だから成功したければ、私のマネをすれば良いではないのか？」

神様は宗教家を見つめながら、

「お前の言っていることは陽徳であり、陽徳は怨みの元となり、人間界ではその徳の積み重ねで、怨みを買うこともある。徳を築いた人には、不本意なことに見えるが、実際にその徳によって、つぶれる人間が出来るのだ。これが犯罪を犯したり、巻き込まれたり、不幸の原因になっていることも、知らなければいけない」

「……………」

宗教家は納得できない。怨む方が悪いことであって成功者が、何故、逆怨みを受けなければならぬのか、分からない様子である。

「お前は自分の徳によって、みずからを葬ったのだ。みずからの手で奈落の底に、向かつ

て歩いていたのだ。お前の徳は我が子にあり、お前の徳は我が孫にある。お前は我が子孫に返すことを忘れていたのだ。内に帰すことを捨てて、外に徳を見世物にして、得意になつていただけだった。外に徳を現すことは、内に徳を持って帰れないのだ」

「……………」

宗教家は分かるような、分からないような……………。訳が分からず悩んでいる。

「お前はまだ理解できないであろう。何故、自分に仕えた飲んだくれが、御殿をもらったのかを。下を見てみる！ 飲んだくれの家族が、幸せそうに暮らしているのが、お前にも見えるであろう」

「よくよく見えるよ。飲んだくれが生きている最中は、あんなに幸せそうに、見えなかったがなあ！」

飲んだくれの家は狭いながらも、いきいきと輝いていて、家族団らんにも暮らしている様子、手に取るように分かる。ふと我に返った宗教家は、自分の家族が心配になった。今の今まで、信者に心を奪われていたが、自分の家族も同じように、家族団らんにも暮らしているのだろうか？ 見たいような見たくないような、心境になり不安がつつた。自分がいなくなつて、途方に迷つて暮らしているのではないのか？ 羅針盤がなくなり、暗礁に

乗り上げてはいないだろうか、色々な不安が心をよぎった。

「お前の不安は何なのだ。お前と弟子の違いは何なのだ。お前の弟子には不安など何もなく、アツケラカンにしている。だがお前は急に不安になった。この違いがお前が求めた人間界の位なのだ。お前は現実を見なければいけない。現実から目をそむけてはいけない。お前の誠の位を見るが良い！」

神様は宗教家に、下界の家族を見させた。恐る恐る見下ろした途端に驚いた。

「何と言うことだ！ 家族や親戚が血肉の争いをしていてではないか。何故………」

「お前が残した陽徳が、家族の溝を作り、お互いの心に傷あとを、刻み込んでいるのだ。家族や親戚が、怨みを持たなければ、収まりがつかないことを、お前自身が選んだのだ」

「何故………」

「お前のような宗教家だけではない。陽徳で怨みを子供達に残してきた財界人や、政治家や教育者、土地の名士や有名人が、この世界に来て、苦しみもがき嘆き悲しんでいる。生きている子供や子孫に、有りとあらゆる信号や、警告を送り込んだが、子供や子孫には通じない。だから今でも苦しんでいる。親の陽徳を子供が受け継ぎ孫が現し、諸々の不幸を背負って生きているのを、マザマザと見せつけられている。何故だか分かるか？」

宗教家はそんなことを信じたくない。自分の責任ではないと言い張る。全て自分の取った行動に、間違いがないと言い張る。跡に残った子供達が、供養の祈りを真剣にしないから悪いと言い張る。家族や親族が血肉の争いをする事は、生きている人間が、清らかな心で慈悲と情けで、接しないから悪いと言い張る。

神様は宗教家に何を言っても、反省する気がないと分かると、次の手段を考えた。

「よし！」

と言ったか否や、使者を近くに引き寄せ耳打ちした。使者はコックリうなずき、その場を離れた。神様は宗教家に言った。

「お前に会わせたい人物がいる。お前のよく知っている人物達だ。お前の心に何かを悟らせる者達だ」

3 二人の老婆との再会

しばらくしてから使者が、二人の老婆を連れて戻ってきた。宗教家は二人の老婆を見て、懐かしそうに喜んで言った。

「おお！ 善婆と悪婆ではないか。久しぶりだなあ！ 元氣だったか！ とは言っても、ここは死んだ者が住んでいる処だからなあ！ 生前中お前達には世話になった。善婆も悪婆も相も変わらず元氣で何よりだ」

宗教家は訳の分からないことを言って、懐かしんでいた。

「この二人は、お前がよく知っている人物だと言うことは、分かっているから呼んだのだ。何故だか分かるか？」

宗教家は何故だか分からないようだが、二人の老婆達は信者であったから、宗教家の生前の徳を、話してくれるだろうと思っていたが、善婆は生前とは違った。

「私は生前中は大変お世話になりました。色々な悩みを聞いていただき、御加護を頂きまして、先生には感謝していましたが、ここの世界に参りましてから心が変わり、今は生前の行いと思いが、間違っていたと気づき、心が痛んでいます」

宗教家は訳が分からない。善婆は素晴らしい人生だった。信者仲間からは慕われ尊敬され、よく気がつき多大な貢献をしていたからである。そして誰に会っても「感謝！感謝！」と手を合わせ、仲間達を導いていたからである。それなのに何故……。生前の行いが間違っていたのか……。宗教家には分からない。

「私は外に向かって徳を求めていたことに、気づいたのですが………」

「外だの内だのと言うが、そんなことは関係ないじゃないのか。その人の人生は、その人の人生ではないのか。人の一生は自分の徳を求めて、悟りを開くことではないのか。『人の振りみて我が振り直す』と言われるように、自分自身を正すことが、人生の目的ではないのか。善婆は徳があつたから仲間慕われ、誰にも平等に優しく接してきたから、尊敬されていたことは、私が一番よく知っている。娘三人もよく知っているが、それはそれ出来の良い娘達で、信者仲間のあこがれの的であり、鑑であつた。そんなことより悪婆の方が、修行しなければならないのではないのか」

あくまでも自分の生きた人生を、否定されなくなかった。飲んだくれの弟子以外は、誰も味方はいないのか？　これは現実ではなく、夢でも見ているのではないのかと思います、悪婆の生前の行いと、自分が説いた講義を並べ上げ、悪行と善行を切々と訴えた。

「ここにいる悪婆もよく知っているが、こいつの性格は、頑固で意地っ張りで、人の悪口は平気で言うし、人の物を盗んでは困らせるし、信者仲間や自分の子供達からも、嫌われていたから、何度も悪婆に説教したが〈馬の耳に念仏〉とはよく言ったものだ。説教すればするほど、無視し反発し逆らって、手には負えなかった。人間として生まれたからには、徳を磨かなければいけない。兄弟姉妹は仲良く助け合い、親孝行をして親の恩に報い、年寄りには優しく、周囲の人には思いやり深く接し、友はお互いに信じ合い、先祖があつての人生だから、御霊祀りや供養を真剣にしなければ、崇りと因縁が断ち切れず、水子の崇りや色情の因縁に苦しめられたり、幼く亡くなってしまうたり大変に病弱の子が産まれたり、無事に五体満足に生まれても、内臓に欠陥があったり、アトピーやゼンソク、花粉症で病院を走り回ったり、登校拒否、家出、非行、イジメ問題が起きたり、兄弟喧嘩、家庭内暴力、夫婦喧嘩、ノイローゼ、霊障、不倫、離婚、自殺、結婚の縁が無かったり、子供が出来なかったり、突然死、不治の病や、諸々の病をわずらったり、交通事故死、殺人

に巻き込まれたり、倒産に追い込まれたり、遺産相続争いを起こしたりして、色々な不幸に遭遇する。全ては先祖が浮かばれないから、起きる現象であり、生きている人間が行を積み悟りを開き、先祖のお陰と思ひ御霊祀りや供養を欠かさず、神様と仏様を崇拜し、御心に叶う祈りをしなければ、祟りや因縁は断ち切れない。だが善婆は私の説教をよく実践したが、悪婆は上の空で平気で嘘をついたり、周りの人達を困らせ、勝手な行動をとつても、平然とした顔をしていた」

無言で今までの話を聞いていた悪婆は、目を潤ませ寂しそうな目をして語った。

「私は生前の行いに恥じています。先生の言われることは確かです。何も申し上げることはありません」

その一言を聞いた宗教家は、偽善者が告訴に勝訴したように、得意な顔をして、

「そうだろう！ 私の講話を素直に聞いていれば、このようなみじめな思いをしないで済んだものを、お前も私の生前の行いを認めたようだから、まあ！ 良い」

神様は一部始終の話を聞いていたが、ここらが潮時と思ひ、二人の老婆に告げた。

「もう良い！ お前達の真の姿を、見せて上げなさい！ 真の姿を見れば、少しは納得できるだろうからな」

二人の老婆は口をそろえて、

「はい！」

と言った途端に化した。その瞬間に宗教家と飲んだくれの、悲鳴に近い叫びが聞こえた。

「うわあー！」

宗教家と飲んだくれは、あっけにとられたまま、開いた口が締まらない。二人の悲鳴は雲上高く、一面に響き渡ったが、機転の早い飲んだくれは、すぐさま気を取り戻し、

「わしらの悲鳴が、下界の雷か稲妻か竜巻か？ はたまた地震か台風かハリケーンか？」

と訳の分からないことを言っただかと思うと、突然！

「悪婆の姿が黄金の輝きになりやあがった。こりゃあ！ おったまげた。おい善婆！ お前はまだ変身しないのか？」

飲んだくれは善婆に早く変身するように、せき立てたが、

「はい！ 私は生前、外に徳を求めすぎてしまったために、今だに苦しんでいます。この世界に来てから、色々な人達と再会しました。私の両親や親戚は元より、先祖の方々の再会が出来ましたことは、大変喜んでいます。しかし反面には、もがき苦しむことが、私たちに課せられていることも知ったのです。子孫に何とおわびしたらよいのか」

宗教家には何がなんだか分からない。善婆を見れば生前の姿はなく、その両親や親戚らしい人達も、いかにもみすぼらしく、乞食と間違えそうな、雰囲気がただよっていた。だが悪婆は違う。見ようとすると、目が開けていられないので、飲んだくれに向かって、「おい飲んだくれ！ お前はよく目が開けておれるな。私には悪婆がまぶし過ぎて、見えないから教えてくれないか」

「先生にはお見えにならないのですか？ わしにはハッキリと見えるがなあ！ 悪婆の後ろには七色の黄金の光が輝き、観音様の姿に見える。これが後光と言うものなのかなあ！」

飲んだくれには悪婆の姿が、ハッキリと見えるが、宗教家にはまぶし過ぎてよく見えない。何故だろうか………………。神様は宗教家を温かく見守りながら、

「これが老婆達の真の姿なのだ。お前には善婆は見えるが、悪婆の姿はまぶしくて見えないであろう。悪婆の輝きは『後光』ではなく『悟光』なのだ」

宗教家には納得できない。悪婆が善婆になり、善婆が悪婆になっている。信じられない様子である。

人として生まれ、清く正しく生きて行くことが、人間の本来の姿ではないのか？ もし

悪いことを犯した人達がいたなら、法の裁きを受けさせ、罪を償わせ改心させ、社会復帰をさせてやらなければいけないのではないのか？

宗教は犯罪を犯す前に、道徳を説き慈悲と情けと優しさを説き、親孝行を教え導き、御霊祀りや先祖供養を、真剣にすることを教義としてきたから、今日まで教えの明かりが消えず、また信者達も幸せに生きてきたのではないのか？

もし宗教の教えが無く、自分勝手な人間ばかりになれば、秩序がなくなり、悪人や無法者がはびこり、社会全体がくずれ、とうの昔に人間界は滅びていただろうに、

だから親の教えを守り、父親を尊敬し父親と同じ道に進み、宗教の教義を学び、真剣に教え導いてきたから、何ひとつやましいことは、ないはずの宗教家である。

だが神様は、偽りの徳だと言われ、外に向かった徳だと言われる。何故……。信者達には慕われていたが、自分の家族や親戚に、血肉の争いを起こさせた事については、信じられずに悩んでいる宗教家に、

「お前だけが悩んでいたのではない。人間が有史以来、お前と同じように、解き明かすことができず、悩み苦しみ抜いてきた。だがこのままでは、これから何千年たっても、同じ事を繰り返してしまうことも事実だ。人間界では悟れなかったことを、ここの世界に来て

人間は誠の徳を悟り、人間界の靈魂の掟を悟り、陰陽和合を悟り、表裏一体を悟り、何とか子供や子孫を悟りの道へと導こうとするが、お前のような宗教家が過った教えを説き、神や仏を無視した教えを説くから、ここの世界に來た者達が、我が子や子孫と通信が出來ず、悲しんでいるのだ」

宗教家には理解できない。神様や仏様を無視したとは思いたくない。幼い頃から誠心誠意つくし、人一倍に信仰心篤く奉仕したと思っている。だから納得がいかない。

「私は神様を敬い、仏様を尊び、神様を真剣に守護してきた。信者達にも同じ事を言い続けてきたから、私の教えを忠実に守ってきた者達は、幸せになれたのだ。私の教えを無視した者達は、いまだに不幸のどん底で、もがき苦しんでいるのが現実だ」

「お前の教えを忠実に守っていた人間だけが、幸せになれたのか？」

「そうだ！」

自信たっぷりに答え、宗教家が信者を救ってきたことを誇った。だが善婆は、

「私も信じられなかったのですから、無理ありません。先生の教えは間違っていました。と言うよりは、選んでなかったと言った方が、良いかもしれません。選択の自由ですから、間違いではなく、選ぶか選ばないかだけだったのです」

「選ぶとは何のことだ！ 宗派を選ぶか選ばないか、と言うことなのか？」

「そうではありません。自分が誰を選ぶかの問題なのです」

「誰を選ぶより自分の人生は、自分自身が決めるのではないのか？」

「私は人間界では善婆でしたが、人間界において私が選択の自由は、悪婆と言う人間を、選ぶことだったのです」

「何故、お前が悪婆を選ばなければいけないのか？」

「私と悪婆さんは分け霊同士だったからです。私と悪婆さんは、同じ魂同士だったので
す」

「そんなバカなことがあるか、お前は善婆に間違いない。善婆と悪婆が同じ魂などあるはずがない。人間はいつかは亡くなる。だから虎は死して皮を残すと言われるように、人は死して名を残すために、子孫に善行の功績を残し、末代まで尊敬され、永遠に祀られるために、徳を積むように生まれてくるのだ。人は生まれた時から躰られ、教育を受け道徳を学び学問を身につけ、社会の秩序と国の法を守ったから、人間社会が発展してきたのだ。宗教は先祖の徳を末代まで、子々孫々するために貢献してきたのだ。私は善婆が亡くなった時には、お前の功績をたたえ、お前の子供達や親戚に、生前の業績をほめたたえ、賞状

善婆さんの人間界での選択の自由は、悪婆さんを選ぶことでした。
善婆さんと悪婆さんは、分け霊同士であり同じ魂同士です。



同じ魂は○。違う魂は□。

を手渡してあげたのだ。だから善婆と悪婆は、あくまでも同じ魂だなんてあり得ない。ましてや、性格が真反対ではないか。性格が真反対同士が、同じ魂だなんてあり得るわけがない」

宗教家は何がなんだか分からない。分け霊だとか同じ魂だとか言われても、初めて聞く言葉だったからである。本人の魂は本人の魂ではないのか。魂だけではない。幸せも健康も病氣も成功も敗北も、全てが本人の心がけ次第ではないのか。本人が生まれてから死ぬまでの間に、どれだけ親孝行や、御霊祀りと先祖供養をし、学問や道徳を学び、社会に貢献することを目的に、生きて行くのではないのか。

人の一生は、自分自身を知ることではないのか？

人の一生は、人生とは何かを見つけることではないのか？

人の一生は、自分自身の精神力を高めることではないのか？

人の一生は、自分自身を鍛え上げていくことではないのか？

人の一生は、魂を神聖化することではないのか？

人の一生は、目標と期限を明確に定めて、邁進することではないのか？

宗教家には夢と希望があり、毎日思い続けてきた。自分にもきびしく、人にもきびしく、

毎日が修行の日々であった。先哲は性善説と性悪説を論じてきた。宗教家は性悪説に近い考え方があり、人は生まれながらにして、悪の心を持ち合わせ、教育、道徳、躰によつてどうにでも感化される。だから正しい道に導かなければ、悪に染まってしまう。水は上から下に向かって流れるように、人も快樂な方に流されていった方が、人生楽しいだろう。しかし、世の中が乱れてしまう。だから法律や憲法が必要であり、道徳と慈悲が必要となり、宗教の道で敬い尊び崇拜することを、実践させて導かなければ、地球が破滅してしまう。宗教家には使命感があったのに。

「お前は選ぶことを教えなかった。と言うよりお前自身が、選んでなかったと言った方が早いだろう。お前だけではない。この世界に来て、何千年も苦しんでいる者達がいる。その者達はお前同様に、哲学を教えていた者や、宗教の道で大成した者や、事業家や教育者として、貢献した者も大勢ふくまれている。だが、いまだにもがき苦しみ悲しんでいる」

「何を選ぶと言うんだ」

「お前の魂と一番身近な人間を選ぶことだ。お前は自分の魂の分け霊を、選んでなかったと言うことだ。お前にとって一番大切な人であり、お前の魂が、一番会いたがっていた人

だ」

「私が今でも会いたい人は、先に亡くなった私の両親だ。私を陰日向なく、きびしく優しく導いてくれた両親だ。私が宗教の道に入り、苦行を克服できたのは、両親のお陰なのだ。私には兄がいるが、その兄は父親と意見が合わず、一度は継いだが反発して、宗教家の道を捨てて出ていった。父親が亡くなったときも、葬儀には顔を見せたが、あとは一度も来ない。母親が亡くなったときには、顔も出さない。兄嫁も結婚式に会ったきり、一度も再会していない。だから私は生前、世話になった両親に会いたい」

神様は宗教家の望みを叶えるために、魂の使者に目くばせした。神様の世界ではどんなことでも、思い通りになる。人間界では時間というときによって、過去と現在と未来に、分けられているが、神様の世界にはときはない。宗教家の思いが叶った。

「ウワァー……。何と言うことだ。私の両親が……。現れた……」

宗教家の目の前に両親が現れた。一時も忘れることがなかった、父と母が現れたのだ。だがしかし、生前のあざやかさがなく、みすばらしい姿で現れた。

「その姿はどうしたのですか？ 生前の素晴らしい姿は、どうされたのですか？ 私の家に祀られている、品位品格を誇った遺影の姿は、どうしたのですか？」

宗教家には何がなんだか分からない。善婆にしても両親にしても、生前の姿と打って變わって、みすばらしい姿になってしまっている。神の世界では全てが、反対になってしまふのか？

父親が亡くなった時は、宗教の世界だけではなく、全世界の人達が手を合わせて、生前の徳を忍んでいた。誰にも優しく誰にもきびしく、思いやり深く導いていた。その父が見るもみじめな姿になっている。善婆の言う「外に徳を求め過ぎた」ことや、選んでなかったことが結果として、人間界とここの世界の食い違いなのか？ 父親から生前では考えられない意外な言葉を聞いた。

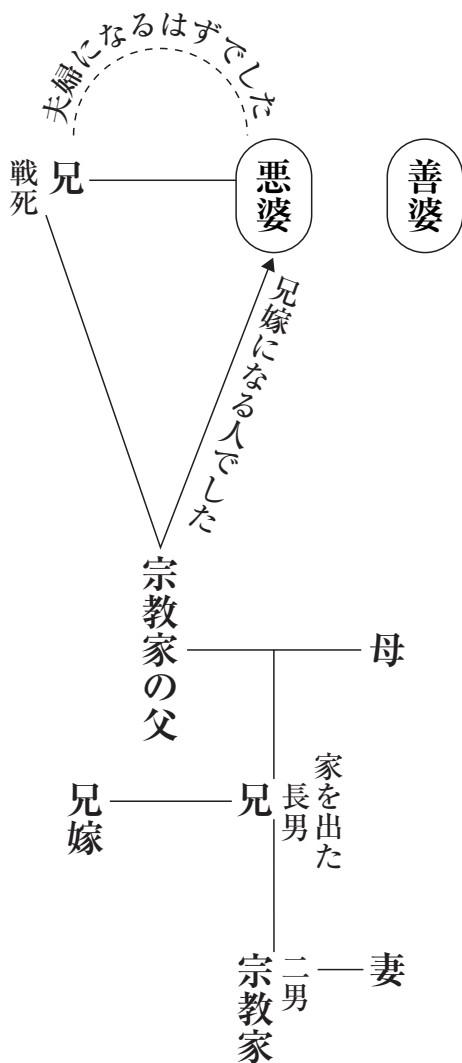
「私とお前が説教し続けた悪婆は、実は私の兄嫁になるはずの人だったのだ。兄が戦死したから、別の人の処へ嫁いだが、兄が生きていれば、私の兄嫁だったのだ」

「そんなバカなことがあってたまるか。私の伯母になる人だったなんて信じたくない。もし伯母だったなら、付き合いたくもないし、縁を切っていただろうなあ！」

「私も同じ気持ちだった。だがここの世界に来て、神様に靈魂の掟を教えられて、途中までは理解できたが、真意と神意が分からず、手遅れだった」

「その靈魂の掟とは、何なのですか？」

宗教家の父と宗教家が共に説教していた悪婆は、父の兄嫁になる人でした。父の兄が戦死したので別の処に嫁ぎました。



父親は息子に理解して欲しいという願いを込めて、

「ここでは全てが一つなのだが、人間界では二つに分かれている。それが陰陽和合であり、表裏一体となって、共存共栄しているのだ。魂も全てが一つなのだが、人間が悟りを開くために、二つの魂に分けて、自分本来の姿を体験して、確認する事を目的にしている」

「魂は一つで人間界では、二つの魂？ 地球上には何十億人が生きている。だから何十億人の魂が、あるじゃないですか？ それがたったの、二つなのですか？」

父親は優しく、

「そうだ！ たったの二つなのだ」

宗教家には訳が分からない。夢でも見ているのかと思えてならない。輪廻転生という言葉は、聞いたことがある。人は生まれ変わってくるという。仮にもそれが事実としても、伯父は戦死した。伯父は戦争に徴集されて、戦地で亡くなった。お国のためという意志が強く、勇敢な戦死だったと戦友が話していたと、父から聞いたことがある。その伯父は正義感が強く、曲がったことが嫌いで、年上でも間違っていたなら、絶対に相手を許すことは、しなかったという。それなのに、その伯父の結婚相手が、よりによって悪婆だなんて、信じられない。これは何かの間違いだろう。もしそうだとしても、政略結婚をさせら

れて、いやいや納得しただろう。伯父のことだから、きっとそうに違いない。それにしても二つだけと言うことが、理解できない。とブツブツ勝手なことを、言っている宗教家のことを放っておいて、神様は宗教家に、魂の原理を教えるために、魂の使者にまかせることにした。

第二章

魂のゆくえ

1 我が子の魂

魂の使者が宗教家に近づいて来た。魂の使者もれっきとした神様であり、担当が違うだけで、魂を司る神である。その魂の神は、

「神は地球に全てを造られた。その全ては人間が体験するに、必要な物である。不必要な物は何ひとつ無い。ただ体験して確認して確信して、確心し確神するにふさわしい、全てを造られた。これは人間が、みずから悟るために造られた、神の計らいである。だから神は、人間達を見守るだけであり、無言であり無聞である。だが人間は、全てを選ばなかったのだ」

「全てとは何か？」

「全てとは全てなのだ。例えば好きと嫌いではなく、善と悪ではなく、美しいと醜いではなく、大と小ではなく、気に入ると気に入らないではなく、全てを選ぶことなのだ」

「全てを選ばなくても、成功した人間や、幸せになった人間も大勢いる」

「だが反対に、不幸な人間も多いことも事実だ。何故、何千年たっても、不幸な人間が後を絶たないのか？ 人間が進化すればするほど、事件が多く発生して、犯罪が後を絶たないのは、何故だか分かるか？」

「全ての人間が幸せになるためには、先祖を敬い尊ぶことではないのか？ そして親孝行をして、兄弟仲良くすることではないのか？」

「それが選んでない証拠なのだ。お前の父親も悪婆を選んでなかったから、いまだに苦しんでいるという事実を、どう理解するのか？」

「父親と母親が、いまだに苦しんでいるのは、私の兄夫婦が、供養をしないからではないのか？ 両親が亡くなっても墓参りも来ない。法事のさたをしても返事も来ない。そんな薄情な兄夫婦がいるから、成仏が出来ないのも当然だ」

「では聞くが、お前にも娘がいたな。その娘が、なぜ五歳で急に亡くなったのだ」

宗教家の目に涙があふれ出た。昔を思い出しているのだろう。結婚して間もなく、一番始めに産まれた女の子で、目の中に入れても痛くないほど、可愛がっていたからである。

しかし、流行の病で手のほどこしようになく、亡くなってしまったからである。

「それは妻の兄夫婦が、親を捨てて出ていったからだ。あんな薄情な兄夫婦はいない。妻の母親は病気がちで、苦しんでいたの、妻は毎日行つて、母親の世話をしていたから、娘の病に気がつかなかったのだ。だから悪婆には関係ない」

「お前の可愛い娘は、その悪婆の魂の、分け霊でもか？　同じ魂でもか？」

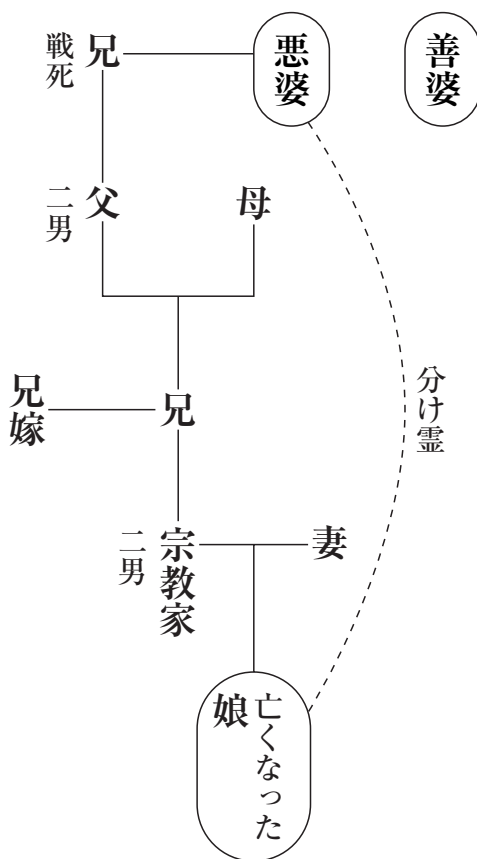
「そんなことは信じられない。悪婆は他人であつて、私の身内ではない。それに分け霊だということも、信じたくない。そんなことがあるはずない」

「魂は全てが一つであり、人間界ではたったの、二つだけだ。その二つが四つになり、四つが八つになっただけなのだ。何千人、何万人、何億人の人間がいようが、全ては二つから始まり、全ては一つに戻ってくるのだ。全ての始まりは、一つが二つになり、二つが一つになっているだけなのだ。人間は“ここ”と“そこ”と“あそこ”に分けたことから、人類の自滅に向かい始めてしまったのだ。全ては“ここ”であり『この世界』を捨てたことから、破滅に進み始めたのだ」

宗教家には分らない。“ここ”だの“あそこ”だのと言われても、何がなんだか分からない、という態度をとつたので時の神は、

「魂は一つだけでは、自分という存在が分らない。だから自分の存在を知るために、二

五才で亡くなった宗教家の娘さんは、悪婆さんの分け霊であり同魂同士です。



つに分けた。自分の存在が、何であるかを確かめたために、みずから分けたのだ。魂がみずからの存在に気づくために、都合がよいからだ。魂は人間が自分という存在に、気づくための手段を取ったのだ」

「人の振り見て、我が振りを直すためか？」

「ああそうだ！ そのために相手が必要だから、二つが四つになったただけだ。だが人間は好きと嫌い、気に入ると気に入らないで、判断してしまったから“ここ”の存在を、忘れてしまったのだ」

「訳が分からなくなってしまった。“ここ”とは何なのだ」

「全てだ。すべてが“ここ”だけであり、すべてが自分なのだ」

「全てが自分……………」

「それでは悪婆が、私自身だと言われるのか？」

「ああそうだ！ 悪婆はお前であり、お前が悪婆なのだ」

「そんなことはへりくつだ。私は私であり、悪婆は悪婆だ」

宗教家は頭がおかしくなってしまった。自分と悪婆が、同じだなんて信じられない。悪婆は周りの人達から嫌われていたが、私は誰からも好かれていた。それでも同じだという

のか？ 分からない。魂の神は分かりやすくするために、別の方法をとった。

「人間は全てを知っている。だから自分の存在を体験するために、相手を選んでいる。その一つの方法が、男と女が結ばれる契りなのだ。その契りは、先祖と先祖の契りであり、先祖と先祖は縁結びの役目を果たし、それが人間界の結婚になり、魂が結ばれる結魂となつて、子供が授かったりするのだ」

「その方が分かりやすい。要するに結婚することによって、先祖同士が結ばれるから、両方の先祖を敬えば、幸せになると言うことだろう」

「先祖同士が結ばれているから、子供達が結魂という結婚式を挙げるのだ。先祖は子孫を幸せにしたいから、魂の里帰り同士が結ばれるのだ」

「魂の里帰りとは何だ！」

「子孫のための悟りの里帰りなのだ」

「先祖が子孫を幸せにしたいなら、もっとまともな魂の里帰りを送ってくれば、全世界が幸せに暮らせるものを、先祖もいい加減だなあ！」

「お前みたいな人間がいるから、全てにおいて丁度いい魂を送っているのだ」

「大きなお世話だ」

「まあ！ そんなにふくれっつらになるな。お前が“ここ”を理解すれば、今の意味が分かる。だから辛抱して悟りを開け！ お前の子孫のためだからな！」

「それじゃあ、辛抱して聞いて上げようではないか」

これではどっちが神様だか人間だか分からない。そんな人間でも、神様は怒る気配もなく話し始めた。

「一つの魂が、男と女の二つに分かれた。この二つが、父親と母親となり、子供が授かったでしょう。父親は自分の存在を、より一層素晴らしい体験をするために、自分の魂を女の子に、分け霊した。母親も同じように、自分の魂を男の子に、分け霊した。これは人間が自分という存在を確かめたいために、みずから求めた体験で、それが長女と長男なのだ」

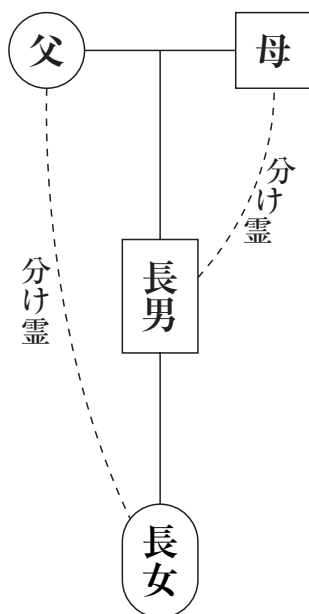
「それでは亡くなった娘は、私の魂の分け霊だった、と言われるのか？」

「ああそうだ！ 男は女に化し、女は男に化し、自分の体験を確認したかったのだ」

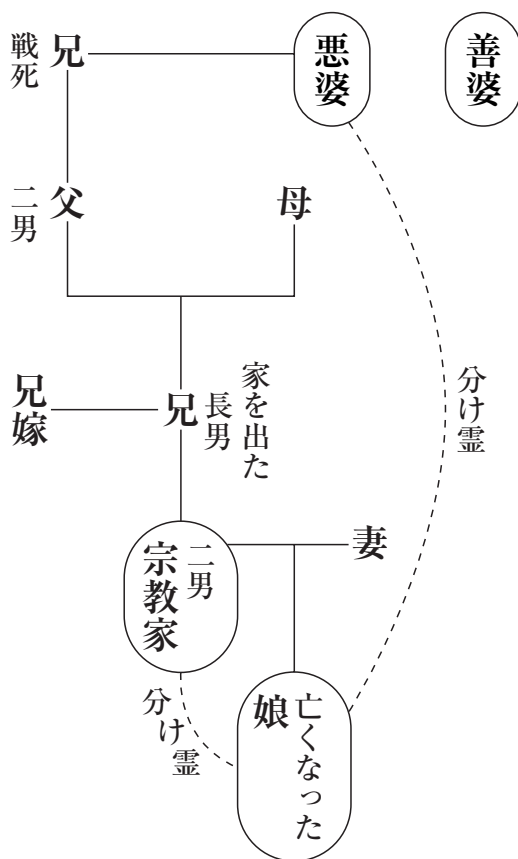
「体験したいなら、男が男になる方が、もっと確実に成長する体験が、出来るのではないのか？ 同じ体験をすれば、人間がもっと進化していくのではないか？」

「お前の言っていることは、的を射ている。だが自分という存在を、確実に知るための体

男女が結ばれ、父と母になり、子供が授かりました。長男は母親の魂の分け霊、長女は父親の魂の分け霊です。



五才で亡くなった宗教家の娘さんは、長女ですから父親の魂の分け霊。



験なのだ。ほかの言い方をすれば、自分自身を憎まないための行為だ」

「何故、自分が自分を憎まなければならないのか？ 誰でも自分ほど可愛い者は、いはいはずではないのか？」

「では何故、人間が幸せになれないのか？ 何故、自分を幸せに出来ないのか？」

「宗教家として、私はそれを自分の使命として、考えていたのだ」

「お前だけではない。地球全体が同じ悩みをかかえている。それを解明するには、全てを思い出すことだけだ」

「全てを思い出す？ 何も習ったことがない事を、思い出すと言うことか？ そんなことは無理なことだ」

「無理なことではない。人間は全てのことを知っている。魂は全ての体験を求めている」

「言っている意味が分からない。教えてくれるか」

「人間は全てのことを知っていて、体験したがついている。だから長男の後に二男が授かったり、長女の後に二女が授かるのだ。二男と二女は先に生まれず、後に生まれるのだ」

「そんなことは、分かりきったことではないか。二男と二女が先に生まれれば、地球が三角になってしまう。誰でも知っていることだ」

「誰でも知っているから体験するために、みずから選んだのだ。父親は同じ魂を二男に授かり、母親は同じ魂を二女に授かり、確信するのだ」

「何故、自分と同じ魂が先に授からず、また先に授かった魂の性別が、反対になるのだ」

「体験するためだ、と言っても理解できないだろう。体験は自分を、確心し確神するためだ。だがこれも理解できないだろう。人間は自分という本来の心を、思い出すために、男が女に化し、女は男に化し、自分と同じ魂の二男や二女が授かるためには、夫は妻と同じ魂の長男を授かり、妻は主人と同じ魂の長女を授かり、夫婦はお互いに、相手の人格や品位や尊厳を守り、夫婦の誠の心のあり方を、確かめたいのだ」

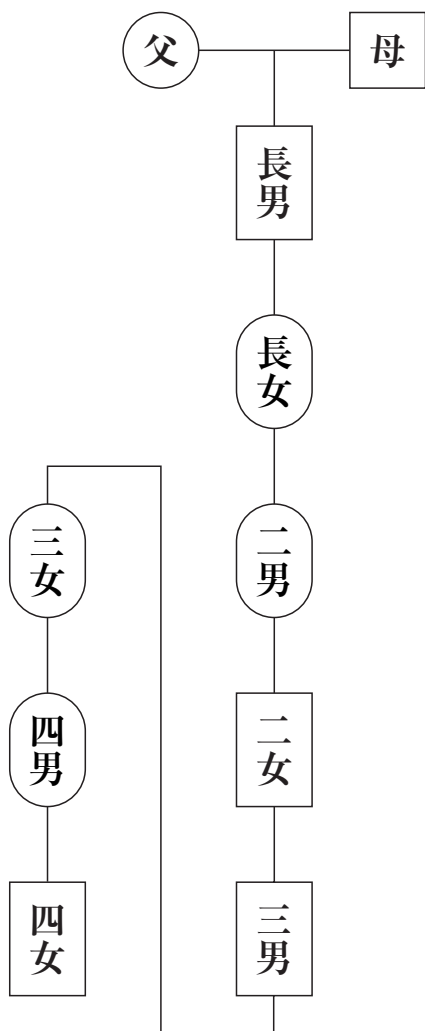
「そんなことをするより、愛と慈悲と優しさを、教えさえすれば良いではないのか」

「人間は全てを知っていると云ったはずだ。ただ思い出すだけで良い事を、みずから選んだのだ。思い出すために、父親の魂を長女と三女と五女、二男と四男と六男に分け霊し、母親の魂を長男と三男と五男、二女と四女と六女に分け霊し、親としての心のあり方を、確信したいからだ。だがこれだけでは確心する事ができないから、嫁と婿を迎えて、確神したいからなのだ。だが人間は体験して、確認し確信まではできたが、確心から確神までいかなかった。これが不幸の始まりになったのだ。人間は確心から確神を無視して、法律

父と母の魂が子供に分け霊される図式。

父の魂が長女、三女と二男、四男に分け霊されます。

母の魂が長男、三男と二女、四女に分け霊されます。



と憲法を制定し、規則と教義を優先することにより、人間本来の心を、思い出すことをやめて、医学や宗教の繁栄を選んだのだ。大自然の摂理の中で生きるより、道徳と規則の中で、生きる事を求めてしまったのだ」

「人間本来の心を思い出す事を、やめたことによつて、医学や宗教が伸びたのか？」

「そうだ！　ここ」とそこ」とあそこ」に、分けてしまったためだ」

「その問題になると意味が分からなくなる」

「自分と身内と他人に、分けると同じように、自分の家と隣の家とよその家、我が国と隣国と他国というように、差別する事を選んだためだ」

「その言い方なら分かる。私も同じ意見だ。だから先祖のお陰であり、先祖があつての子孫繁栄であり、親を敬い尊ぶことを徹底教育すれば、そんなことは簡単ではないのか？」

それをおこたつたために、病氣になり病院に走る。医学は病氣の原因を解明し、日進月歩を繰り返して発展した。元はと言えば、全てが御霊祀りや先祖供養と、親孝行と愛と慈悲と優しさを、徹底的に教育すれば、争いがなくなり、病氣もなくなり、住みやすい群ができ、社会が出来ると言うことだ。そうだろう。簡単なことだ！」

「お前の言っていることは、人間の心を束縛した管理社会であり、無理矢理に一方的に押

しつける教育となる。それは大人や親のエゴで、純粋な子供達を押さえつけ、おどしているのと同じだ。だから犯罪が多くなったのだ」

「私が言っていることが、間違っているというのか？」

「間違いも正しいもない。全て人間が選んだ結果なのだ」

「誰もそうは思わないだろう。特に不幸になっている人間ほど、自分が選んだ結果だなんて、思いたくないだろうね！」

「みずからが選んだ結果なのだが、みずからが選んでない結果でもある」

「私は少し変になってきた。神様の言われる意味が分からない。選んだ結果だと言ったり、選んでない結果だと言ったり、どっちが本当なのだ」

「全てが事実であり、全てが結果だと言っているだけだ」

「何がなんだか、さっぱり分からない」

「それでは少し元に戻ろう。人間は本来の心を知っていると言ったはずだ。そして確神するため、嫁と婿を迎えると言ったと思う」

「確かに聞いた」

「父親は自分の本来の心を、思い出すために嫁を選び、母親は自分の本来の心を、思い出

すために婿を選んだのだ。これが長男の嫁と長女婿なのだ」

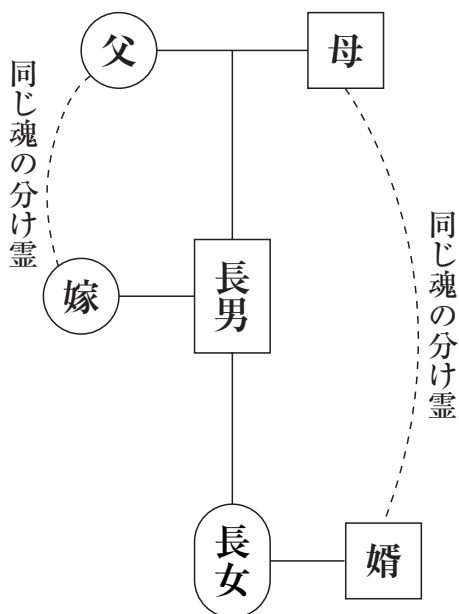
「まだ意味が分からない」

「父親は自分と同じ魂の分け霊の長男嫁を選び、母親は自分と同じ魂の分け霊の長女婿を選んで、自分が生きた人生を、確信したいからだ」

「誰がそんなことを思う。誰がそんなことを信じるだろう。嫁や婿は赤の他人ではないか。赤の他人を選ぶのに、自分の心を思い出すためだなんて信じられない。信じる方がおかしいのではないのか」

「だから、みずからが選んだ結果であり、みずからが選んでない結果だと言ったのだ。『ここ』と『そこ』と『あそこ』に、分けて選んだが『ここ』を、選んでなかった結果なのだ。全てが『ここ』であり、全てが一つであり、人間界ではたったの二つに、分かれただけである。全ては一つの魂で成り立ち、人間界ではたったの二つの魂で、成り立っているだけだ。一つの魂が自分という魂の存在を、確認し確信するために、そして思い出すために、相手が必要だったのだ。これは陰陽和合や、表裏一体のように、一つの魂が、自分という魂の存在を確認するために、相手が必要だったのだ。それが父親の魂が自分を知るために、長女と三女、長男嫁と三男嫁に分けて、確信したかったのだ。母親の魂が自分を

父は自分の本来の心を思い出すために長男嫁を分け霊として選び、母は自分本来の心を思い出すために、長女婿を分け霊として選びます。



知るために、長男と三男、長女婿と三女婿の魂に分けて、確心しなかったのだ。それと同時に、夫婦がお互いに憎しみや怨みを持たず、人間界の神聖化のために、自分達を二男嫁と四男嫁、二女婿と四女婿の魂に分けたのだ。父親の魂は長女と三女、二男と四男、長男嫁と三男嫁、二女婿と四女婿に分け霊し、母親の魂は長男と三男、二女と四女、長女婿と三女婿、二男嫁と四男嫁に分け霊し、人間本来の心のあり方を、思い出す確神のために、みずから選んだのだ」

「この魂の原理は本当なのか？」

「そうだ！」

「何故、今の今まで誰も知らなかったのだ」

「誰でも知っていたが、宗教家が勝手に、消滅してしまったのだ」

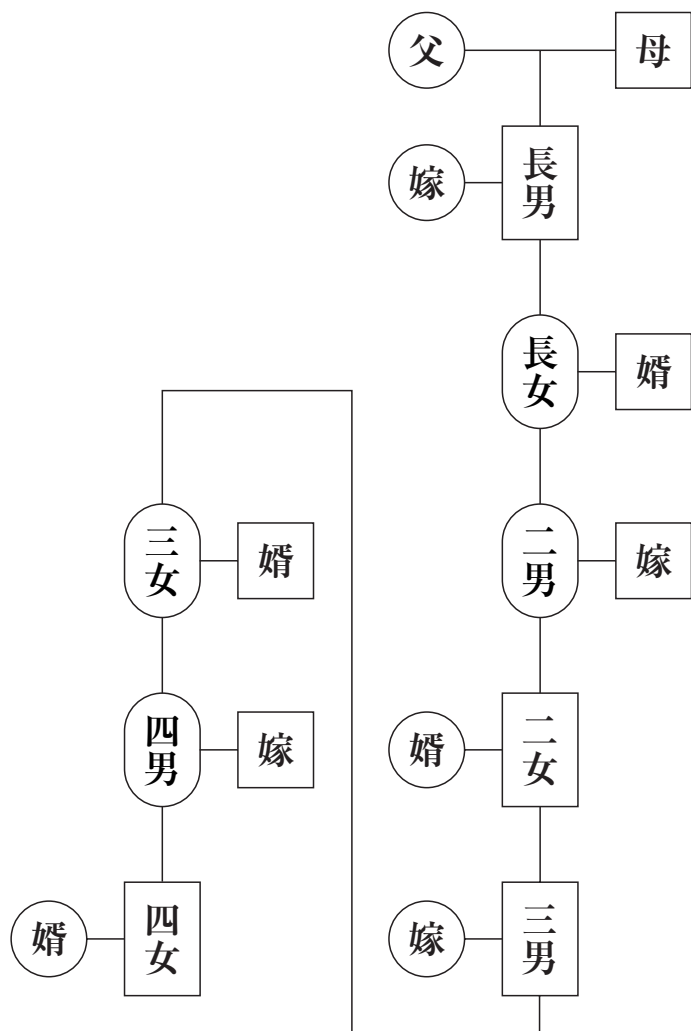
「何故だ！」

「宗教家が生きるためだ！」

「何故、生きるためにした手段だ？ 私には信じられん」

「人間がみずからを思い出すことより、誰かのお陰だと言わせるためだ。親のお陰だとか、先祖のお陰だとか、宗教家のお陰だと言った方が、都合が良いからだろうな！ 全てを誰

父と母と子供達とその配偶者の図式



かのお陰にする方が、感謝させるに都合が良いからだろうな」

「誰かのお陰と言わせる行為は、悪いことなのか？」

「良いと悪いはない」

「良いとか悪いはない？」

「ああそうだ！ 善と悪もない。善と悪に見えるのは、ここの世界を無視し“そこ”と“あそこ”に分けたために、偏見した見方なのだ。別の言い方をすれば『好きと嫌い』、『氣に入ると氣に入らない』に分けたただけだ。もっと別の言い方をすれば『親孝行者と親不孝者』も親の勝手で分け、“ここ”が“そこ”と“あそこ”を比較するに、対象物を求めただけだ」

「だが実際には、犯罪が現実に行き来していることも、事実ではないか？」

「犯罪に見えるが犯罪ではない。全てが一つに帰れば、犯罪に見えなくなる」

「一つに帰る？」

「ああそうだ！ お前が実家を出ていった兄と兄嫁を、認めればよいことだ」

今まで素直に、靈魂の掟を聞いていた宗教家が、突然血相を変えた。人間は自分と身内と他人を分けて、物事を判断している。宗教家も同じであって、自分に置き換えると、過

去の思い出が、よみがえってしまふのである。

「あんな薄情な兄夫婦はいない。親を無視し親を捨てて、出ていった兄夫婦を、私は許すことは出来ない。兄嫁は親の葬式にも、顔を出さなかったのだから、たとえ私が許しても、親戚一同が許さんだろう。それだけの事を兄夫婦がしていったのだ。もし父親が生きていれば、同じ気持ちだろう」

興奮のあまり本人も亡くなっているが、父親も亡くなっていることを、宗教家は忘れている様である。そんな息子を、目に一杯の涙を浮かべながら、

「私が選んでなかったばかりに、お前の娘を殺してしまった」

宗教家には意味が分からない。娘が亡くなったのは、妻の兄夫婦が親を捨てて、勝手に出て行ったからだと思っている。妻は病弱な母親の看病で、娘の病に気がつかなかったからだと思っている。全ては妻の兄夫婦が、悪いと思いつけている。だから父親は、

「この世界が、全てを変えるであろう。この世界が、全てを分からせるであろう。この世界が、全てを選ぶであろう」

父親には子供を叱ることも、攻めることも出来ない。この世界は、親が子供を説教することは出来ない。親が子供を説教すれば、みずからが悟ることが出来なくなる。親自身

が子供から学ぶことによって、悟りを開くところだからである。この世界は「我が子は我が親なり、我が親は我が子なり」である。神様は可愛い女の子を呼んだ。その女の子は、「お父ちゃん！ わたしよ！」

宗教家は娘と再会できた。ありし日のままの姿を見た途端に、大粒な涙を流しながら泣きくずれた。

「お父ちゃん、私は誰もうらんでないよ。私はお父ちゃんの子供として、生まれて良かったと思ってるのよ。だから泣かないで！ 私はずっと、お父ちゃんを見守っていたのよ。私がこの世界に、お父ちゃんより先に来たのは、“選ぶこと！” “変えること！” “分かった！” “ということを、思い出させるためのよ。”私の周りには、たくさんのお友達が、いっぱいいるのよ。このお友達もみんな、お父ちゃんやお母ちゃんの悟りを開くの、一度いいと思ったから選んだのよ」

見れば色々な国の子供達が集まってきた。あどけない純粋な子供達ばかりであった。どの子も疑うことを持たない目をした、子供達であった。

「この子供達は、不治の病や交通事故死や、殺人や突然死によって人間界を離れ、この世界に来了。どんなに苦しみぬいて亡くなった子供でも、誰ひとりとして、憎しみや怨み

はなく、全てが一つになって暮らしている。この子達は人間界の犠牲ではなく、人間界を神聖化するために選ばれたのだ」

「どんな殺されかたをされた子供でも、憎しみや怨はないのか？」

宗教家には分からない。父親は自分が孫娘を殺したと言っている。しかし娘は私が悟りを開くために丁度いいからだと言う。神様は犠牲ではなく、人間界の神聖化のために、選ばれたと言われた。何故………………。

「人間はみずから体験することを選んでいる。人間はみずから確認することを選んでいる。人間はみずから確信することを選んでいる。人間はみずから変えることを選んでいる。人間はみずから分かることを選んでいる。これが人間の本来の生き方なのだ」

「親が子供を亡くすことを、選んだと言われるのか？」

「ああ！ そうだ！ 親ばかりではなく、人間が選んだのだ」

「私には意味が分からない。何故、可愛い子供を幼く亡くさなければならぬのか？」

「親の心のあり方を変えるためだ。親の心のあり方を選ぶためだ。分かんと言っていることを、親自身みずからが悟るためだ」

「そんなむごいことをしなくても、もっと他の方法で、悟ることが出来るはずだ」

「全てが丁度いい！　全てが完璧だ！　全てが神聖だ！」

「神様はそんなに薄情なのか？　それでは神も仏もないじゃないか？」

「人間が選んだ事に口出しはしない。人間の威厳と尊厳を無視はしない。人間の生き方に説教はしない。ただ全てを許すことだ。これがこの世界の愛なのだ」

「何も口出しせず説教もせず、全てを許すことが、ここの世界の愛？」

「そうだ！」

「どんなに凶悪な人間でもか？」

「そうだ！」

「何故だか分からない……………」

宗教家には訳が分からない。神様の世界には、優しさも慈悲もなく、天国も地獄もないのか？　宗教家は自分が信じられなくなった。今までの生き方は何だったのか？

「お前が信じられないのも当然だ。だが選ぶことだけだ。人間界が選ぶことを忘れたから、全てを許すことができず、全てを愛することができなくなったのだ」

「全てを許し全てを愛さなければいけないのか？」

「こうしなければいけないということはない。それは義務であり、それは悟りではなく、

押しつけになってしまふ。ただ選ぶことだけだ。全てが自由であり、全てを許すことだ」

「私には分からない。神様の言われる意味が、理解できない」

「では、お前は兄嫁をどう思つて、今まで過ごしてきたのだ」

「あんな薄情な人間は兄嫁ではない」

「何故そう思うのか？」

「兄もそうだが兄嫁も、親を親と思わなかった。人は親に忠義を示し、親を尊敬しなければいけない。親に孝行をすれば、その恩返しで子供達が、親孝行をしてくれる。それを繰り返すことによって、素晴らしい国になる」

「お前が水は上から下に流れるように、人も快樂な人生の生き方に流されれば、世の中が乱れると言つたが、親が子供に孝行することの方が、水の流れは、とどこおることなく、流れるではないか。『親が子供に孝行が親孝行であり』この方が、理に叶つてないか。そして、何度でも同じ事を言うが『しなければいけない』と言うことは何もない。全てが自由だ。全てが完璧だ。全てが素直だ。これが本来の人間の姿だ」

「私には理解できない」

「人間の魂は、全てが一つだと言つた。全ては“ここ”から始まつた。“そこ”と“あそ

こゝに分けてから『しなければいけない』と言う義務を作った」

2 “い”と“そ”と“あそ”

「この世界では全てが一つだが、人間界では二つになったと言った。その二つが夫婦になり、父親は長女と三女、二男と四男に分け霊し、母親は長男と三男、二女と四女に分け霊した。これは自分という存在を知るためだ。それだけでは完璧ではないから、父親は同じ魂の長男嫁と三男嫁を迎えた。母親も同じく、長女婿と三女婿を迎えた。父親は自分と同じ魂の二男と四男に妻と同じ魂の嫁を迎えた。母親は自分と同じ魂の二女と四女に、主人と同じ魂の婿を迎えた」

「そのことは確かに聞いた。だが、“い”と“そ”が分からない」

「お前と父親は、同じ魂だと言うことは分かるな」

「それは何となく分かる」

「ではお前と兄嫁とも同じ魂だ、ということも分かるはずだ。お前の可愛い娘も兄嫁と、

同じ魂だ」

「私が悪婆と同じ魂で、娘とも同じであり、あの薄情な兄嫁とも同じ魂だとすれば、悪婆と兄嫁が同じ魂になる。私と亡くなった娘と悪婆と兄嫁が同じ魂か」

「ああそうだ！　それが“ここ”になるのだ」

「それでは聞くが、善婆と悪婆が同じ魂だというのが本当なのか？　本当なら善婆と私と父親と娘も、同じ魂になるはずだ」

「ああ！　そうだ」

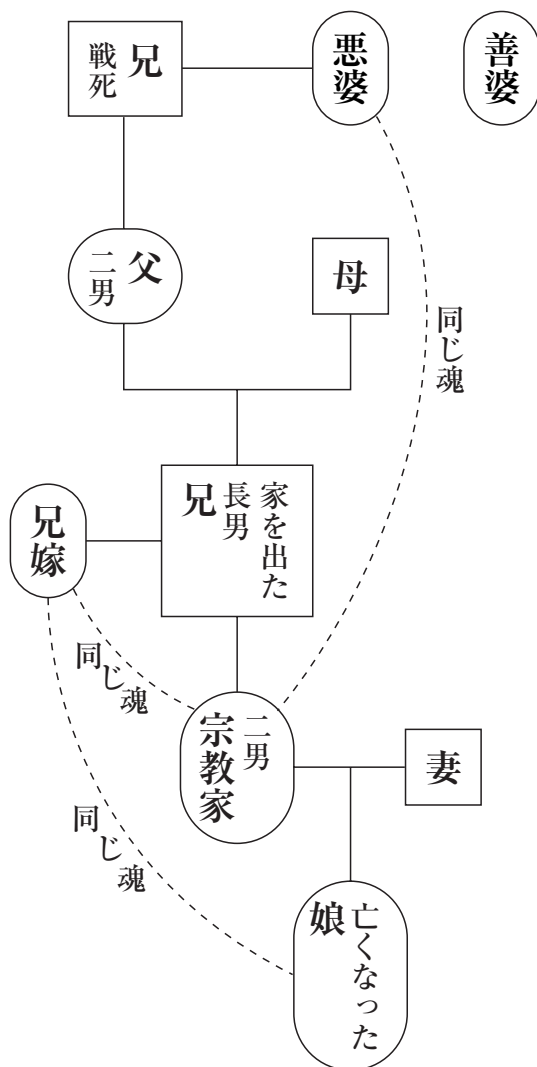
「それなら分かる。私達親子と善婆は好かれていたからな。だが、どうしても納得がいかないのは、世間で好かれた人間と、嫌われた人間が同じ魂だということが」

「お前達人間界では不幸が、後を絶たないことは知っているな。だが実際には不幸な人間はいないのだ」

「またまた、おかしい事を言う。どうも魂の神の言われる事についていけない。人間界に不幸がないとするなら、現実不幸がないはずだ。だが不幸な人間が多い。私の頭がパニックになりそうだ」

「人間は全てが体験だ。全てを自分が選んでいる」

五才で亡くなった宗教家の娘と、家を出た兄嫁と、悪婆が同じ魂になります。そしてP 65の処の図式の父と母と子供達の図式をあてはめます。



「不幸な人間は自分で不幸を、選んでいると言われるのか？」

「ああ！ 自分で体験することを選んでいる」

「私の息子達も同じか？」

「どんな人間も、みずからが選んだ結果なのだ」

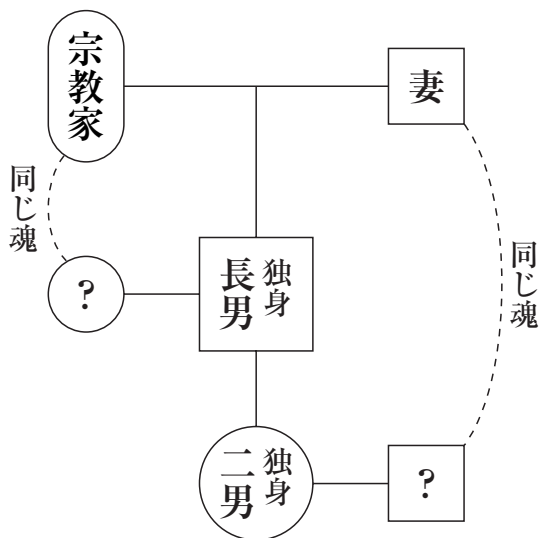
「私の息子達二人が、三十歳過ぎても結婚をする気がないのも、息子達が選んでいるというのなら、現実には息子達や親戚が、血肉の争いをしているのも、息子達や親戚の責任ではないのか？」

「確かにそうだな。だが、お前が選んでなかったからだ。お前が悪婆と兄嫁を選んでいれば、全てが一つになることが出来た。人間界では『ここ』と『そこ』と『あそこ』に分けているが、それは『氣に入ると氣に入らない』『好きと嫌い』『親孝行と親不孝行』と言うモノサシで計ったから『善と悪』になっただけなのだ。そのために『陰陽和合』『表裏一体』『清濁あわせ吞む』と言う言葉を創らなければならなかったのだ。人間界の『愛』も同じことなのだ。『愛』と言う言葉を創るには、対象物があつたからだ」

「その対象物とは何だ」

「その対象物は『選んでないことを選んだ』ことだ」

宗教家の二人の息子は、三十才過ぎても独身。
その配偶者は、



「またまた分からなくなっちゃった。『愛』の対象物が『選んでないことを選んだ』と言われるが他にはないのか？」

「ない！あるとするなら全てである」

「それでは『愛』の説明にはならない。『愛』とは『優しさ』であり『慈悲深さ』であり『いつくしむ心』『暖かい感情』『大切な人』を、思いやる心ではないのか？」

「それは『愛』ではなく『全て』でもない。全てを許すことが『愛』であって、お前の言っている『愛』は、全てを許していない『偽りの愛』だ」

「偽りの愛？」

「ああそうだ。お前の可愛い娘が言った事を、思い出すがよい」

「……………『選ぶこと！』『変えること！』『分かった！』と言うことを、思い出させるためと言った。それと愛がどこで一緒なのか？」

「例えばお前は成功を求めた。栄誉と栄華を求め、権力と地位を、欲しいままに独占したから、実現したことは認める。それはお前が選んだからではないか」

「ああそうだ。私は目標を設定し、無限の潜在能力を認識し、常に高める努力をした。私は行動指針を持ち、自分を信じ、信念と情熱と期限を毎日欠かさず、明確に思い続けたか

ら、成功したのだ」

宗教家は自信を持っていた。やる気と元氣と勇氣と根氣を持ち、誰にも負けない信念と情熱を心に描き、毎日血のにじむ思いで、努力したから成功したと、自他共に認めているから説得力がある。

「それはお前が、みずから成功を選んだからだ。それと同じ原理を応用すれば良かったが、人間界で成功した者達の中には、全てを選んではなかったから、この世界に来て、もがき苦しんでいるのだ。選ぶと言うことは、ここもそこもあそこも、全てを選ぶことである。だがお前も同様に親不孝者を、嫌いと氣に入らないで判断していた」

「親不孝者を好きになれ、と言われるのか？」

「ああそうだ！ 例えばお前がレストランで、何か注文するとしたなら、何と言うだろう」

「そうだな！ 私は肉類が好きだったから、ステーキを注文するだろう。それも血がしたたる方がいいだろうな！」

「それでは別の注文の仕方を考えてみよう。お前は何か嫌いな食べ物があるか？」

「ある！ 酢の物類が嫌いだ。見ただけでも寒氣がする。だが兄は好んでよく食べていた

思い出がある。兄は酒好きで、ここにいる弟子と瓜二つで、食べ物の好みも全て同じだ」

「お前の兄とここに居る飲んだくれの弟子は、同じ魂同士だからな」

「やっぱりな！」

「そのことは後で分かる。今は選ぶことを理解することが先だ。お前が酢の物を嫌いだということは分かった。ではレストランでステーキが食べたいのに『酢の物は嫌いだ！』と注文をしたとするなら、ステーキが出てくるかな！」

「出てこないに決まっているではないか」

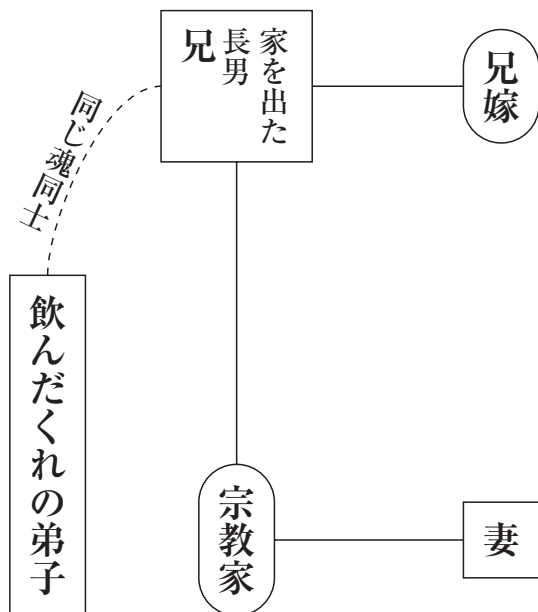
「だが人間は往々にして、履き違えた選び方をしている。人生も同じことなのだ。嫌いと気に入らないという選び方は、病気は嫌だ！ 不幸は嫌だ！ 貧乏は嫌だ！ あの人は嫌いだ！ と同じ事であって、過去の思い出や経験や体験を、繰り返しているに過ぎない」

「それはいけないことなのか？」

「良いとか悪いの区別ではなく、全ての体験は素晴らしいと思えばよい。好きな物があることは、嫌いな物のお陰だと気づけばよい。好きは嫌いのお陰であり、気に入ることは気に入らないことの、お陰が『お陰様！』なのだ」

「嫌いな物のお陰で、好きな物があると言われるが、私に悪婆や兄嫁のお陰で、親孝行が

宗教家の兄とこの世界にいつしよに來た飲んだくれと同じ魂です。



できたと思えと言うのか？」

「その通りだ。父親はお前に、選ぶことを教えなかった結果が、娘の死なのだ」

「選ぶことを教えてもらわなかっただけで、娘が亡くなったのか？」

「ああそうだ！ 選ぶことを選んでなかったからだ。例えば、お前が妻に『あの悪婆と兄嫁は嫌いだから付き合うな！』と言ったとする。妻はどうするだろうなあ！」

「私の言うことは素直に守ってきたから、多分付き合わないだろうな。付き合えば主人である私を、裏切ることになるから、別の人間と付き合うだろうなあ！」

「では別の方法を考えよう。もし、お前が『酢の物は嫌いだから作るな！』と言った場合も同じように、妻は酢の物を作らないだろう。そして、別の物を用意して食事の準備をするだろう」

「ああ！ その通りだ。私の好きな食べ物を作って待ってたよ」

「では、お前の妻が買いい物に行く前に『今日は焼き肉が食べたい！』と、お前が選択したならどうだろう？ やはり酢の物の材料を選択せずに、焼き肉に見合った食材を買って来るだろう」

「その話と、ことごとくあそこと、関係ないじゃないのか？」

宗教家には、神様の言われる意味が分からない。自分が何を好きで何が嫌いかは、関係ないと思っている。誰でも好き嫌いは、多少でもあるはずだから、大きなお世話だと思っている。

「お前は関係ないと思っているが、全てが同じ道理に向かっている。お前が喫茶店で注文を『ヨーグルトは嫌いだ!』とウエーターに言ったとしても、他の物は出てこないだろう。何度同じ注文の仕方をして、好きな食べ物運ばれてこないだろう。ここであるお前が、その妻に好き嫌いを言えば、お前の嫌いな物はいつさい選ばず、気に入る物を食材として選ぶだろう。それはお前に従順な素直だからである。しかし、あそこの第三者であるウエーターは、お前の選んだ通りに実行する。だから何もテーブルには、運ばれてこないだろう。これはありのままの素直だからである。嫌いだという選択は、好きな食べ物も近づけない。お前が兄嫁と悪婆を嫌って、慈悲と親孝行を説く、これは嫌いだと言って、自分の好みを押しつける強制となり、悪婆と兄嫁は気に入らないと言って、善婆の親孝行を説くことは、気に入らないと言って、気に入る人を近づける権力となり、自分の徳をさらけ出し、弟子の悪口を言うことは、自分の地位を維持するために、他人を非難する陥れとなり、ここがあそこを嫌って、そこを近づければ偽りとなる。優しいとは、嘆き悲しみ悩む

憂いの人と書き、偽りとは人の為にと書き、償いとは、人が賞を取ると書く。お前は親孝行を嵩にして、親孝行を利用しているに過ぎない。また自分の地位と権力を嵩にして、妻を操っているに過ぎない。お前は妻に選んでないことを、知られたくないために、脅迫をしているに過ぎない。自分の言い訳を、他人に押しつけているに過ぎない。お前は自分である「ここ」を、みずから捨てているだけなのだ。「そこ」と「あそこ」の問題の前に、みずからこの人間として、選んでなかったのだ。それを悟らせようとしたのが、幼く亡くなったお前の可愛い娘だ」

宗教家にも何となく意味は分かるが、納得ができない。何故、自分だけが……。人間は誰でも、自分の過ちを素直に認めたくない。宗教家も普通の人間と同じで、自分だけが不幸になるのは、おかしいと思っている。だから、

「それでは私が兄嫁と悪婆を、選んでなかったために、娘が身をもって『選ぶ』こと教えたと言われるが、親を捨てた兄夫婦には、何も起きないのか？」

「お前は兄夫婦と、縁を切っていたから、何も知らないだろうが、兄は初めの妻との間に、一人男の子が授かったが、生まれて間もなく亡くなり、それが原因で亀裂が生じ離婚し、今の妻と再婚し、女の子を授かったが、その子もすぐに亡くなった。その後生まれた息

子も、離婚して再婚している。現在は糖尿病を患い、細々と老夫婦二人で暮らしている」

「兄が離婚していたとは知らなかった。教えてくれれば良かったのに」

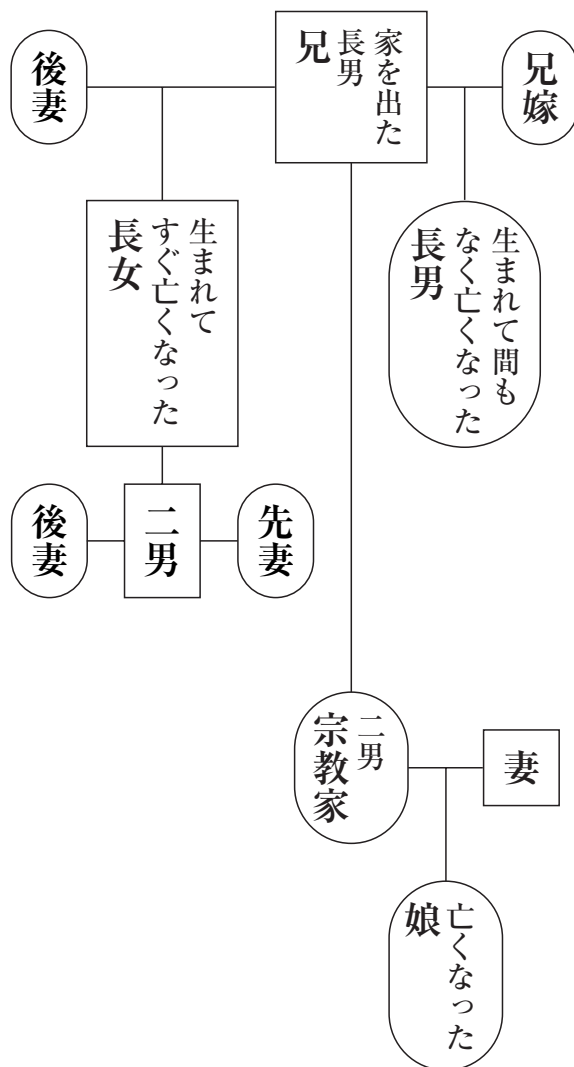
「知らせたが、お前が無視したのだ」

「そんなはずはない。知っていれば覚えていたはずだ。いっさい記憶にない」

宗教家は兄との幼い日々を、回想していた。幼い頃の兄は優しく、兄弟仲良く遊んだものだ。だが父は兄に早く一人前になって欲しく、人一倍きびしかったようだった。兄は幼い頃は何を言われても逆らわず、じっと耐えていたが、ある日突然、父親に反抗するようになってから、父親に対して、憎しみを現すようになった。宗教の道を継いだが、父親と意見が合わず、常に喧嘩が絶えなかったことは、今でもよく覚えている。その頃から毎晩酒を呑むようになって、暴れるようになり、手が付けられない状態だった。だが兄が離婚し同じように、子供が亡くなっていることや、今現在、糖尿病を患っていることも、知らなかった。初めて兄も苦労していることを知った。

「お前は人間界に、陰陽和合と表裏一体が、常に同時に起きている事を、みずから体験していたが、気づかずにいた。ことそこそこあそこは、全て自分の心の中にあり、全てが我が身に帰ることに、気がつかなかった。ここもそこもあそこも、全てが自分であること、

家を出た兄は、初めの妻との間に一人男の子が授かりましたが、生まれて間もなく亡くなり離婚し、再婚相手との間に生まれた女の子も、すぐに亡くなり二男は再婚しています。



そして、全てを許し全てに感謝することを選んでなかった。ここはそこのお陰であり、そこはあそこのお陰であり、あそこはそこのお陰であり、ここはあそこのお陰であり、ここは全てのお陰であり、そして、それを見させてもらえ、気づいた自分自身のお陰であり、全てを許し全てを愛する自分に感謝すれば、兄夫婦が離婚したことに、気づいたはずだ」

「それが世間一般で言う『虫の知らせ』と言うやつか？」

「ああそうだ！ 人間界では『虫の知らせ』と思っているが、ここでは全てが偶然の一致ではなく、必然的な一致を約束されている」

「全てに必然的な一致が、約束されている？」

「人間は大自然の中で平等に生きる事と、精一杯生きる事を、約束して生まれた。そして、人間はこの世界から離れ、人間界に戻り全てを体験し、全てを許し全てを愛することを、誓って生まれた。だが人間は平等の約束も、全てを許し全てを愛することも、守らず嘆き苦しんでいる」

「平等に約束されているなら、憲法と法律を制定し、法則や道德の教えを、守ることを強化すれば、平等の幸せが保たれるだろう。規則を違反したものは罰則を与え、社会復帰に温かい心を、差しのべてあげれば良いことだ。宗教はそのために貢献してきたから、素晴

らしい教えである」

「それはここの世界の約束ではなく、人間が勝手に造り出し、束縛し強制しているから、無理が生じている。強制には自由と安心がない。人間は自由と安心を求めるために、決まり事を造り、保護されているに過ぎない。この心の根底には『不自由だから！』『不安だから！』がある。人間の約束は『何時・何処で・誰と・何を・どうした！』と、お互いが約束を守り合うことで成立し、お互いが日時と場所の設定をしなければ、不安だからである。人間がここの世界で約束したことは、自由であり、ありのままの姿であり、ある日突然であり、想うがままと以心伝心であり、永久と永遠である。しかし人間は、気づく前に決まり事に安心を保証され、ここの世界の約束を忘れてしまった。ここの世界の約束は『漠然！』『気まま！』『偶然！』と思いこんでいるから『唯の虫の知らせ』にしか、感じられなくなってしまったのだ」

「では憲法も法律や道徳の教えも、必要ないと言われるのか？」

「必要が有るか無いかの問題ではなく、全てを思い出せばよいことだ。人間は全てを知っていると言ったはずだ」

「ああ！確かに聞いた。だが私には分らない。思い出そうとしても、何も思い出すこ

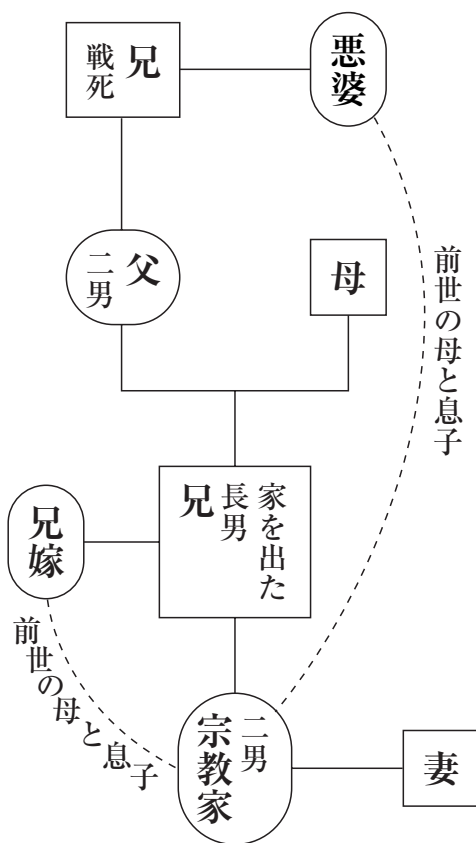
とができない。何故だ！」

「では教えてあげよう。お前が嫌っている兄嫁と悪婆は、前世の母である」

「突然、何を言われるのか！ 気が狂っているとしたか思えん。正気の沙汰ではない！ 何も血のつながりがなく、赤の他人が、私の母親だなんて、信じる方がおかしい」

宗教家は信じられない言葉を耳にしたので、今まで聞いていたことまで、信じられなくなってきている。この世界は、人間界をもて遊んでいるに違いない。自分を陥れるばかりでなく、人間界までも陥れ、地球を乗っ取る宇宙人か、悪魔の世界ではないかと思えてならない。このままでは美しき地球が、宇宙人か悪魔に占領され、植民地に化すのではないかと、不安がつのった。何とかここから脱出して、地球を救おうと思い、これ以上変な言葉に、惑わされないようにしようと、心の中で誓い『私は素晴らしい宗教家！』と何度も強く念じた。

宗教家が嫌っている兄嫁と悪婆は、宗教家にとって前世の母です。



3 前世

「お前が信じられないのも無理はない。だが事実である。人間は光り輝くこの世界から離れ、人間界に戻って全てを体験し、全てを確心し確神することを約束した。だが確心と確神する約束を、果たす事ができず、もがき苦しんでいる。何故だか分かるか？」

「そんなこと知る訳がない」

宗教家は宇宙人か悪魔か知らないが、もう絶対に惑わされないと確信した。父親や幼く亡くなった娘は、きっと宇宙人か悪魔が、変身しているに違いない。悪婆も善婆もそうに違いない。だが良く化したもんだと感心している。

神様はあきれ返っていたが、神様もくじけていられない。何がなんでも人間界に、悟光を注がなければ、人間界が滅びてしまうからである。

「少し話を変えよう。たとえば話だが、何も言わずに聞いてくれなにか？ ある処に二人の

オッサンが、炭焼きの仕事をしていた。夕方になり仕事が終わわり、お互いが顔を見合わせ、一人のオッサンが『今日は久しぶりに、一杯飲みに行こうか?』と相手を誘った。二人のオッサンの顔は、一人は炭で顔が汚れているが、もう一人は汚れていないとしよう。二人が同意したので、一人のオッサンが『すぐ顔を洗ってくるから、チョット待っててくれ!』と言い洗面所に向かった。ではどちらが顔を洗に行ったのだろうか?」

「そんなことは簡単な質問だ。汚い方が洗うに、決まっているではないか」

「もう一度聞く。お互い顔を見合わせた場合、汚れている方と汚れていない方とでは、どちらが洗うか?」

「ああそうか! 汚れていない方が、洗いに行くのではないか?」

「ああそうだ! この場合でも人間は往々にして、履き違えた考え方をしてしまうが、お前が前にも言ったように『人の振り見て我が振りを直す』には、相手があつてのことだ。きれいになれることは、汚れている人間のお陰なのだから、その相手がいなければ、我が身を正すことが出来ない。そうではないか?」

「ああ! その通りだな」

「では相反する者のお陰ではないのか?」

「その通りだが、気づいた自分のお陰でないのか？　自分を正すことが、人生の目的ではないのか？」

「お前の言うことも事実だが、人間の目的は正すことだけではない。前世の自分の誠の人生を確信し、前世の自分を許し、前世の自分を愛することだ。そして、前世の父親と母親に再会し、前世の配偶者と出会い、前世の子供と孫と再会し、確認し、確信し、確心し、確神することだ。前世の自分を許し感謝すれば、人間界に誠の愛がよみがえり、全てが一つになり、素晴らしい人間界に返ることが出来る」

「誠か？」

宗教家はまだ半信半疑だが、相反する物のお陰が、何となく分かってきた。この世界が、悪魔が宇宙人の世界ではないような気になってきたが、まだ前世のことは、何も信じられない。だが聞いてみようと思い始めた。

「私の前世の人生は、どのような人生だったのか、聞きたくなった。教えてくれないか？」

「お前が一番嫌いな人間の、人生だと思えばよい。さけて通りたい人間や、近づきたくない人間だ。それを確認するために、何度でも生まれ変わってくるのだが、確神する事がで

きない。だからお前の前世が近づき、教えてくれていたが、それでも気がつかなかった」

「それが悪婆と兄嫁だったと言われるのか？」

「その通りだ！」

「そのように思えば、誰も憎しみが起きなくなってくるだろうな。要するに自分の前世を憎めば、現世の自分が不幸になると言うことか？」

「ああ！　ずいぶん理解できてきたな。だが不幸などない事も、分かってくるだろう」

「しかし、まだ納得できないが良いか？」

宗教家は素直になってきた。今まで逆らってきたが、聞く耳を持ち始めたようだ。だが、まだ半信半疑な事が多すぎる。確かに人間は自分の一番嫌いな性格が、前世の自分の性格だと思えば、許すことが出来るであろうと、宗教家は思った。

「父親は自分本来の心を思い出すために長男嫁を選び、母親も自分の本来の心を思い出すために、長女婿を選んだ、と言ったことを覚えているか？」

「ああ確かに聞いた！　父親は自分の存在を体験するために、同じ魂の長女が授かり、母親は自分の存在を体験するために、長男が授かったことも聞いた」

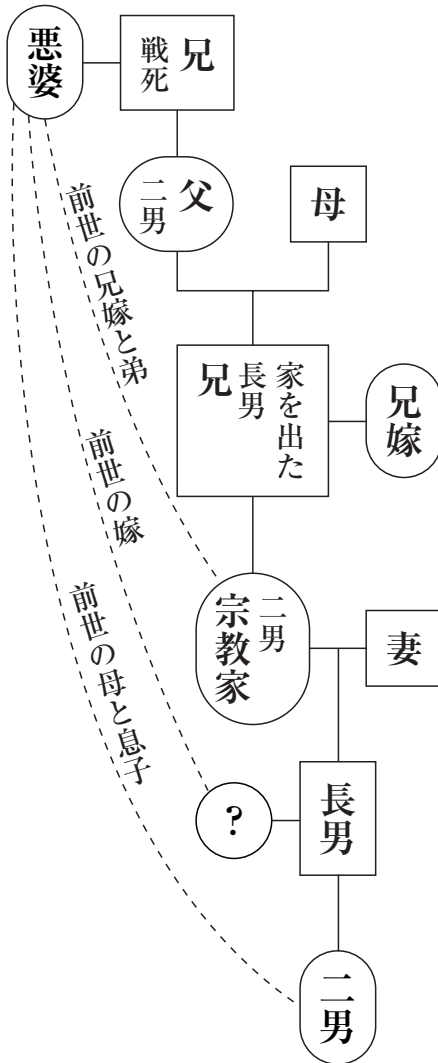
「人間はみずから悟るために、生まれ変わっている。全てを許し全てを愛するために、生

まれ変わっている。これは『我が魂は我が魂にあらず』であり、誰でも自分の魂は、自分の魂ではなく、全てが分け霊であり、全てが同魂であり、自分の魂は、ことごとくあそこにある。全てが分身となつて、共存共栄している。だから全てが、一つから二つになつただけだと、気づくことだけなのだ。だから父親は、自分という存在を確認するために、長女と三女、長男嫁と三男嫁に分け、二男と四男、二女婿と四女婿に分けた。母親も自分の存在を確認するために、長男と三男、長女婿と三女婿に分け、二女と四女、二男嫁と四男嫁に分けた。これは一つから二つになり、存在をよりいっそう確信する、みずからの体験なのだ。父親は自分が前世では女だったことを、長女によって確認し、前世では長男の嫁であつたことを、確信するために再会したのだ」

「その事は前にも聞いた。だが私にも長女がいたが五歳で亡くなり、長男は結婚してないから、長男の嫁のことについては答えようがない」

「ではお前の父親から考えてみよう。父親にとって悪婆が兄嫁なら、お前にとつても兄嫁ではないか？ 父親にとって悪婆が前世の母親なら、お前にとつても悪婆は、前世の母親ではないか？ そしてお前の上の息子の嫁は悪婆であり、下の息子の前世の母親は、悪婆になるのではないのか？」

父親にとって悪婆が兄嫁なら、宗教家にとっても兄嫁。
 父親にとって悪婆が前世の母なら、宗教家にとっても前世の母。
 宗教家の上の息子の嫁は、悪婆と同じ分け霊の里帰り。
 下の息子にとって悪婆が前世の母になります。



「どうも悪婆が前世の母親だとか嫁だとか、と言う話になると意味が分からない」

宗教家にはどうしても納得できない。悪婆と兄嫁が自分の母親だと言うことが……。そして自分の息子の嫁だと言うことが……。現実には優しく暖かく導いてくれた母親が、現にいるからである。

「人間はこの世界では光り輝く『悟光』なのだが、何度でも生まれ変わり、人間界に戻り、何を悟るために戻るのか？」

「そんなことは簡単ではないか。前にも言ったが、自分自身を知る事であり、人生とは何かを見つけた事であり、自分自身の精神力を高めることであり、自分自身を鍛え上げることであり、魂を神聖化することではないのか？」

「その通りだ！ しかし、何故そのようにしなければならぬのだ」

「子孫を幸せにするためではないのか？ そして子孫を神聖化するためではないのか？」

「お前が言っている子孫とは誰か？」

「孫や、ひ孫のことだ！」

「何故、孫やひ孫を幸せにするのだ？」

「年老いた人間の役目ではないか？」

「何故、年老いた人間の役目なのか？」

「孫やひ孫が可愛いからだ！」

「その思いが人間界に不安をもたらせ、むやみに人口を増やすだけの、存在にしまつたのだ」

「不安をもたらすだけの人口の増加？」

「大部分の人間が、人間界に不安を残してきたからだ。お前もそうだが、人間界では素晴らしい教えをしたが、ここの世界に来て、過去の人生を振り返ってみてどう思うか？」

「今思えば不安なことばかりが、よみがえってきた。二人の息子達は結婚していないし、娘は結婚したが、毎日のように夫婦喧嘩が絶えず、離婚寸前で子供もできない。早く孫の顔を見たかったのになあ！」

宗教家は何がなんだか分からないが、ここの世界に来て、自分の生きた人生が、むなしくなった。自分では何も悪い行為をした覚えはないが、何かが足りないような気がしてならない。その何かがまだハッキリつかめない。善婆は『生前の行いと思いが間違っていたと気づき心が痛んでいる』『外に向かつて徳を求めていたことに気づいた！』と言い、善婆と悪婆は同じ魂だとも言う。兄嫁が宗教家にとって、前世の母だと言われた。先に亡く

なった娘と周りの子供達は、どんな悲惨な亡くなり方をしても、誰も憎まず怨まず、親を見守っているという。そして親に『選ぶこと！』『変えること！』『分かった！』を思い出させるためだと言う。

確かに嫌いだという注文は、好きな物も食べることができない。人間に当てはめても、同じことが言える。あの人は嫌いだと言えば、自分に気の合った人間だけが集まり、気の合わない人間は、さけて通るだろう。さけなくても、反発心が自然に起きてくることも考えられる。だが兄嫁を選んでないばかりで、可愛い娘を見殺しにしたのか……。

そして孫やひ孫を可愛がることは、人間界に不安をもたらし、むやみに人口を増加するだけと、神様は言われたが、孫やひ孫を可愛がってはいけないのか？

「孫やひ孫を可愛がる前の問題を、お前は忘れている。孫やひ孫は、お前や親の魂の分け霊が生まれてくるのだから、可愛いのは当然だ。我が魂は我が魂にあらずと言ったように、誰でも自分の魂は自分の魂だけではなく、全てが一つから二つに、分かれただけなのだから、孫やひ孫を可愛がるより、人間は前世での誠の人生を教えてくれる人を許し、愛することが先決なのだが、その人間をこばみ続けたために、次から次へと悟りの再会者を増やしていったのだ。全ては先祖が子孫を幸せにしたいから、悟りの魂の里帰りを送り、思い

出させようとしたが、思い出すことをやめてしまった人間は、不安を隠すために、むやみに人口の増加だけを、選んでしまったのだ」

「動物もおびやかされれば不安になり、必死に繁殖力を増す本能が、よみがえって来るから、人間も動物も、そう大して変わらないではないか？」

「動物と人間の違いは、全てを許さず全てを愛することを忘れてしまい、思い出さないから、不安を隠すために再会者を増やし、その繰り返しで、むやみに人口が増えてしまったといってもいいほどだ」

「それでは、正当な人口の増え方ではないと言われるのか？」

「ああそうだ！ 正当な増え方なら、極度に人口の調整はしないはずだ」

「その極度の人口の調整とはなんだ！」

「戦争だ！」

「……………」

宗教家は何も言えない。事実だからである。何故、人間は人と人が争い、殺し合わなければいけないのか。

「全ては一つから二つ、二つから四つに分けて、判断している結果なのだ。こことそこと

あそこに分けへだて、好きと嫌いに分け、氣に入る氣に入らないに分け、全てを許さず全てを愛さず、孫やひ孫を可愛がり、無理に子孫を守ろうとしたからだ」

「孫やひ孫を守ることが、いけないと言われるのか？」

「何度でも言うが、良いとかいいけないと言うことはない。ここがそこやあそこを嫌ったり、氣に入らないと言って、孫やひ孫を守ろうとしても、ここに戻ることは出来ない。娘と嫁を分けへだてて、兄弟仲良くと願っても、ここには戻れない。婿を嫌って息子の幸せを願っても、ここを思い出すことは出来ない。他国をおびやかして、自国の幸せを祈っても、平和の体験は来ない。だが人間は全てを思い出さず、全てを許さず全てを愛さず、慈悲と情けと道徳を、見世物にし法律を強化し、自国を守るために軍隊を養成し、みずから自滅に、追い込んでいるに過ぎない。もう一度、魂の故郷に帰りなさい！ 心魂の故郷に帰りなさい！ この故郷に帰りなさい！」

「魂の故郷に帰る？」

「ああそうだ！ 魂の故郷に帰れば、全てを許し、全てを愛することを、思い出すことができる。魂の故郷は、全てがひとつの光の中に輝いている」

「魂の故郷は何処にあるというのだ？」

「憎しみの中にある！ 怨みの中にある！」

「憎しみや怨みの中に、魂の光が輝いていると言われるのか？」

宗教家には訳が分からない。憎しみは憎しみでしかなく、怨みは怨みでしかないではないのか？ 愛と優しさの中に、光があるのではないのか？ 人間は何十世紀もかけて、慈悲と情けと道徳を説き続けてきたが、それが憎しみや怨みの中にあると神様は言われる。

「人間は愛という感情を、思い出すために人を殺し、平和という言葉を使うために戦争を起こし、慈悲と優しさを主張するために、他人を憎しみ怨んでいる」

「神様の言われる事は間違っている。確かに相反する物がなければ、比べようがないかも知れないが、人間社会は環境や習慣によって、心が養われてしまっているから、全世界が共通の意識を持つことは出来ない。そのためにどうしても、意見の対立が出来てしまう。

その意見の対立や環境や習慣を、世界的水準に引き上げ、平和を守るために、平和主義が勝たなければ、世界が滅びてしまう。だからどうしても、愛と慈悲と道徳を、説く必要があるのだ。私は可愛い娘が、幼く亡くなっているから、私と同じ親なら、私の心が痛いほど分かると思う。ましてや愛する子供や身内が、罪のないのに殺されれば、その犯人を許すことは出来ないであろう。それでも神様は、全てを許すことが愛と言われるが、全てを

許していたなら、殺され損になり、無法者がはびこり、悪の天下になってしまふのではないか？」

「全ては光の中に闇があり、善の中に悪があり、優しさの中に憂いがあり、美の中に醜さがあり、平和の中に争いがあり、動く物の中に動かない物があり、正義の中に悪があり、見える物の中に見えない物があり、近づく物の中に遠ざかる物があるように、この世界から人間界に戻り、陰と陽と表裏一体が、お互い再会するために、みずから選んだのだ」

「陰と陽に再会するためと言われるが、では反対の原理もあるではないのか？ 闇の中に光があり、悪の中に善があり、憂いの中に優しさがあり、醜さの中に美があり、争いの中に平和があり、動かない物の中に動く物があり、悪の中に正義があり、見えない物の中に見える物があり、遠ざかる物の中に近づく物が、あってもよいではないのか？」

「ああそうだ。その通りだ！ それが二つが一つになり、一つが二つになったのだ。一つだけでは、陰は陰としての体験しかできないから陽を近づけた。陽も同じように、陽という存在を確信するために陰を造り、存在を明確にしたのだ。岩は一つだけでは、自分の大きさが分からない。だから比べる対象物を置くことによって、みずからの存在を知る。対

象物が小さければ大きな岩に見え、対象物が大きければ小さく見える。全ては一つの存在を知るために分身を造り、体験を確心したかったのだ」

「それはなんとなく分かる。しかし殺された人にとって、殺した相手を許すことは出来ない。自分が確かめたいためや確心するために、それだけの理由で愛する人が、殺されても良いと言われるのか？」

「それだけの理由でと言うが、お前達人間が求め続けた結果が、不幸という体験なのだ。実際には悪も善もない。あるのは全てが神聖なのだ。人間は自分と他人を分け始めてから、憎しみを覚え怨みを忘れず、何度でも同じ体験を、繰り返さなければならなくなった。何度同じ体験をしても、怨みと憎しみは消すことが出来ず、復讐心を持ち続けたまま、この世界に来るから、復讐される体験をするのだ。奪った物は奪われるように、復讐した者は復讐されてしまうのだ。人間界は何度でも、同じ事の繰り返しをしている」

「殺された人は、前世で人を殺したからだと言われるのか？」

「人間は、みずからを神聖化する体験を、選ぶことを誓ったのだから、その方法だけでは神聖化することが出来ない。我が魂は我が魂にあらずと前にも言ったが、もう一度言う。

誰でも自分の魂は、自分の魂だけではなく、全てが分け霊であり、全てが同魂であり、自

分の魂は、ことそこにあそこにあるように、我が子の魂は我が子の魂にあらず、我が孫の魂は、我が孫の魂にあらずも同じ事なのだ。人間はみずからが、全てを許し愛するため、人間界に生まれた。教えられるためではなく、みずからが気づくために生まれたのだから、みずからが殺されれば、気づく前にこの世界に戻ってしまう。だから気づくために、みずからが、そこあそここの人間を選び、心のあり方を確信したかったのだ」

「それが一番嫌いな性格が前世の自分だ、と言われた意味と同じなのか？」

「ああそうだ！」

宗教家には納得できない。人間がみずから気づくまで放っておけば、愛や慈悲や道徳がすたれ、人間界の秩序がなくなり、暗黒街に化し、滅亡してしまうのではないのかと、不安がつのってきた。

4 我が魂は我が魂に非ず

「我が魂は我が魂に非ずと言うように、人間でも動物でも植物でも全ての物は、先祖の魂の分け霊であり、先祖の魂の里帰りとして、代々受け継ぎ生まれてきた。全ての魂は同魂であり、母なる大地に同時に生きている。全ての魂は終わることなく、永遠に生き続けている」

「絶えた生き物や植物も、あるではないか？」

「全ての魂は永遠に、不滅である」

「どこに、そんなことを信じるバカがいるか？ 現にマンモスは絶えているではないか？」

「全ての生き物は生き続けている。絶えることなく、永遠に生き続けている」

「どこに証拠があるのだ。在るなら出して見よ！」

宗教家にもメンツが残っているらしく、まだ神様を困らせようとしている。現実には絶えた物は、数え切れないことを知っているから、神様の困る顔を見たいと思っている。次に、どんな方法で手を打ってくるか、楽しみである。だが、

「マンモスは、地球の大地として生きている」

「それは言い逃れだ。そんなのは生きている証拠になっていない。マンモスが大地というなら、死んで土に帰っただけではないか？」

「全ての生き物の魂は、形を変え、色を変え、姿を変え生きている。マンモスは母なる大地の岩や土の精霊になり、四季折々の花や、草や木の精霊になり、春夏秋冬の雪や雨や雲の源水の精霊になり、人間界になくはない生活の必需品に化し、全ての精霊と化し生きている。人間もマンモスと同じように姿形は違えども、母なる大地に生かされている。生きる物はマンモスと同じように、生きている全ての物の精霊に感謝することだ」

「それなら先祖のお陰であり、先祖があつての我々ではないのか？」

「それは一方的な見方であつて精霊でもなく、先祖のお陰でもない。お前は先祖と言うが先祖は生きていて、マンモスと同じように、亡くなることなく永遠に生き続けている」

「先祖が生きている？」

「お前の言っていることは、固有名詞のことだけであって、あの人とこの人というように、過去の思い出に、ひたっているだけの判断だ。姿形が同じでなければ、この人でもなくあの人でもないと言うように、別人だと言っている事と同じだ。全ての魂は永遠に不滅であり、全ての精霊も同じように不滅である」

「その精霊とは何なのだ。マンモスは死に絶えたが、精霊として生きていると言われるが、結局はマンモス自身は、存在しないと一緒ではないか？」

「精霊は人間界の時の中に存在せず、時に振りまわされることなく、時にまどわされることなく、前世も現世もなく来世もない、自由な世界だ」

「余計この世界が、分からなくなつた。私は今どこに居るのかも、分からなくなつてきた。これが夢ならいい加減に、覚めてもよいはずなのだが……。いっこうに覚めない……」

宗教家は言うことなすが、神様と違うことに腹が立つてきた。自分はなんのために、今までつらい修行に耐え抜き、ここの世界に来てからも、何でプライドを傷つけられなければならぬのかと、思えてならない。イラ立ちがわき始め、もうどうでも良くなった。

「少し話を変えよう！ お前が人間界で使っていた、茶碗やコーヒーカップは、何で出来

ているか？」

「それは土ではないか」

「その土は元は何であつたか？」

「土は粘土質でそれも土ではないか？」

「古代に生きていた人間や動植物が、何億年かかって化石になり、土に化しているのではないのか？」

「ああ！　そう言えばそうだな！」

「生きた物、全て母なる大地に宿り、別の物と化し、永遠に魂として、精霊として、生き続けている」

「……………」

「お前は目にうつる物しか信じてない。悲しいことに目に見える物しか、信じようとしなから、目に見えない魂や精霊を、信じようとしな。誰でも幼い頃は無邪気で、疑う心がなかったが、成長する段階で、学問や道徳や慈悲の、人間界の常識に染まり、大自然の摂理の恩恵を、忘れてしまったのだ」

「私は見えない神を、信じてきたから意味は分かる。だが、事実は事実だ。マンモスは死

に絶えたのだ」

「お前が信じた神は神ではなく、偽りの神だ」

「偽りの神？」

「ああそうだ！ お前の父親が信じていた神であって、信仰心の神ではなく、宗教心の神だ！ もし宗教の教義や講義と魂や精霊の話を、お前が嫌っている兄嫁が、説いているとしたなら、それでもお前は、信じる事が出来るか？」

「……………」

宗教家は神様が言おうとする心が、分かったから何も言えない。事実、兄嫁が父親と同じ事を、解き明かしていても信じないだろう。尊敬する父親が講話を説いていたから、疑うことなく信じたからだ。人間は尊敬する親や博学者や、権威者の言うことは信じるが、幼い子供や怨み憎しみ嫌っている人間の言うことは、信じようとしない。

「精霊は自由だ！ マンモスの精霊は谷間に咲く一輪の花の精霊になり、一輪の花に群がる蝶の精霊になり、蝶が群がる母なる大地の精霊になり、母なる大地に共存共栄する動物の精霊となって、大自然の精霊として生き続けている。これは我が魂は我が魂にあらずと同じように、マンモスの精霊はマンモスの精霊にあらずであり、マンモスは山川草木に

化し、全ての物に無言で化している。善も悪も嫌わず、美と醜さの差別なく、好き嫌いの偏見も持たず、ただ大自然を見守っている。マンモスに限らず、大自然に生きとし生くる全ての動植物は、大自然の摂理を永遠に守り続けている。だが人間は大自然の摂理を無視し、好きと嫌いや気に入る気に入らないで、差別と区別し、魂や精霊の存在すら忘れ、勝手に愛だとか慈悲だとか道徳で、がんじがらめにし、それでも秩序や立場と順序が守られず、安心できないからといって、拘束する法を強化している」

「言われることは、何となく分かってきた！　だが先祖は生きている、と言われたことに對しては、信じられない。現に私の両親もそうだが、悪婆や善婆や幼く亡くなった娘は、ここにいないではないか？」

「分け霊が現に生きている。父親の魂はお前の兄嫁に生きている。母親の魂はお前の兄に生きている。悪婆と善婆の魂は、息子達に生きている。幼く亡くなった娘の魂は、二男や二女婚に生きている。お前は姿形が同じでなければ、死んだと思っているが、魂は姿形を変え、永遠に受け継がれ、生き続けている」

「だが私の息子達は結婚する気がない。娘は結婚したが、喧嘩が絶えず離婚寸前だから、子供が出来ることに、期待は出来ない。このままでは子孫が絶えてしまう」

「子孫は絶えない。永遠に続くだろう」

宗教家には信じていることが出来ない。実際に息子達は、結婚していないからである。ましてや、遺産相続争いをしている真つ最中だから、なおさらである。

「いつ結婚して、いつ子供が出来るのか？」

「お前は我が子だけが、自分の子供だと思っていたから、あとに残った者達に、憎しみや怨みを起こさせ、争いを起こさなければ、収まりがつかなくなってしまったのだ。善の前世は悪であり、悪の前世は善であり、美の前世は醜さであり、醜さの前世は美であり、平和の前世は争いであり、争いの前世は平和である。全ては人間が造り出した、陰陽和合と表裏一体の結果なのだ」

「これが陰陽和合の原理なのか？」

「お前達人間は人間界に、陰陽和合を造り、表裏一体を造り、清濁あわせ吞むを造り、みずからが悟りを開き、全てを許し全てを愛するために、生まれ変わったのだが、慈悲や道徳や偽りの愛に心を奪われて、ここの世界の誓いを忘れ、精霊や魂に耳を傾けることを、さけてしまったのだ」

「何故……………」

「親孝行を強制的に押しつけ、束縛をしたいからだ。育ててやった恩を売り、そのお返しで親に感謝させるためだ。親が子供に孝行するより、親に孝行させる方が、感謝させるに都合がよいからだ。親の勝手で弱者を押さえつけているのだ」

「何故、親孝行が束縛することになり、親に恩を売ることになるのか？ 親は子供を守り道徳を教え、社会の常識と秩序を教えることが、親の義務ではないのか？」

「では聞くが、お前の娘婿は長男ではないか？」

「ああ！ そうだが……」

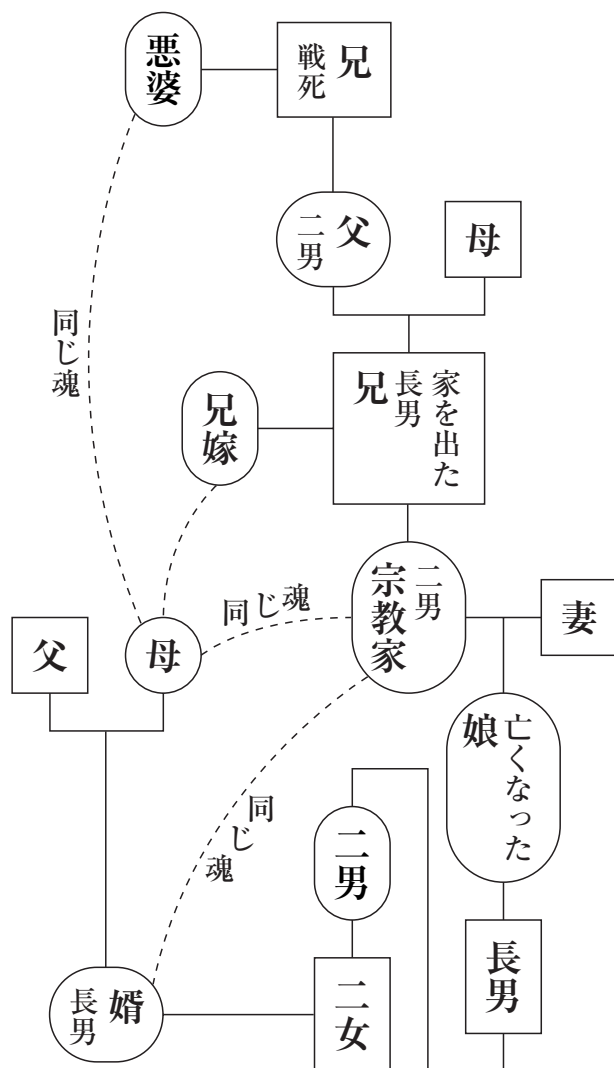
「お前はその娘婿の母親をどう思うか？」

「娘の婿もそうだが、婿の母親も自分勝手で、娘は私の講話を素直な心を持って真剣に聞くが、あの婿と母親は『馬の耳に念仏』とは、よく言ったもので、何を言っても聞く耳をもたない！」

「どこかで聞いたような諺だな」

宗教家は考えた。二女婿は父親の魂と同魂である。と言うことは自分と同じだと気がついた。二女婿は長男だから母親と同じ魂になる。それなら父親と宗教家と、幼くして亡くなった娘と悪婆と兄嫁と、

宗教家の二女婿は長男ですから、その母親と宗教家が同じ魂になります。そして兄嫁と悪婆とも同じ魂になります。



「ああ！　そうか！　分かった。私と父親が説教し続けた、悪婆と同じ魂になる」

「よく分かったな！　お前達親子が説教し続けた、悪婆と嫌っている兄嫁だ。お前が選んでなかったから、亡くなった娘が悟らせるために『娘は先祖の里へ里帰り』させたのだ」

「誰に悟りを開かせるためだ？」

「お前達夫婦に『選んだ！』『変えた！』『分かった！』を悟らせるためだ」

「本人達が、勝手に結婚したのだから、結婚を選んだ娘夫婦に、悟りを開かせるためではないのか？」

「お前達夫婦が『選んでないことを選んだ！』から、娘が選ぶことを教えたのだ。お前達を選ぶことを怠り、嫁いだ娘にも、実家の宗派に引きずり込み、主人側の立場を無視し、偽りの愛を実践していたから、娘夫婦が選ぶことを教えたのだ」

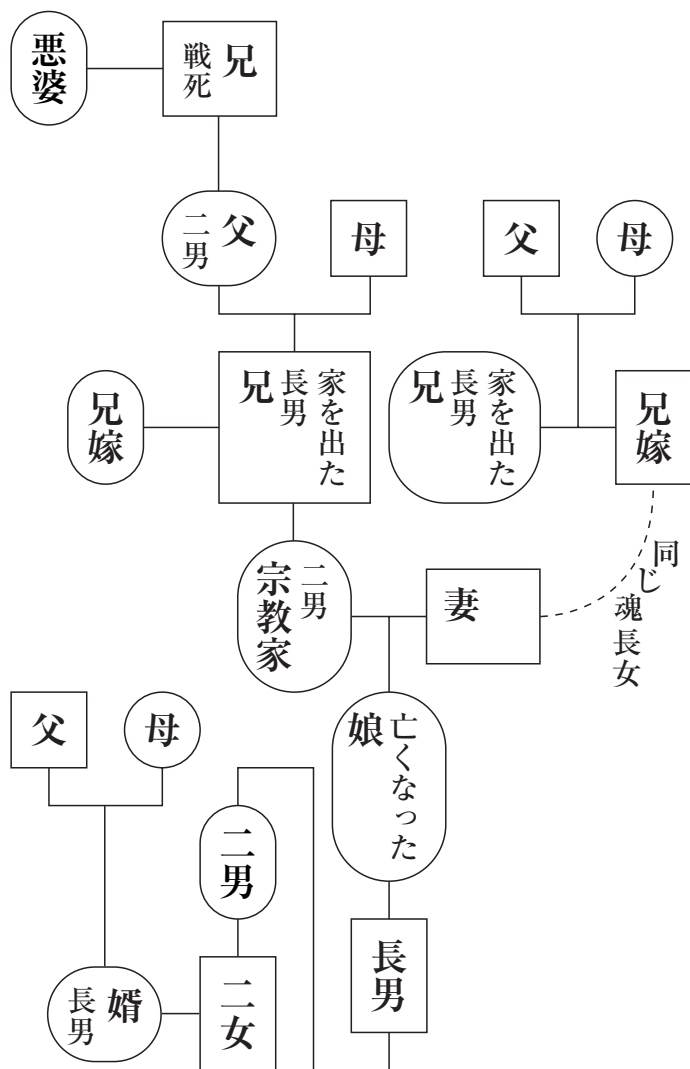
「分らない！」

「では善婆が始めに何を言ったか、思い出すがよい」

「………………。人間界での選択の自由は、善婆自身が悪婆を選ぶこと、と言った。善婆は悪婆と、同じ魂だとも言った」

「お前の妻も同じではないか？　お前の妻は同じ魂の実家の兄嫁を、選択する自由があつ

宗教家の妻も家を出ていった実家の兄嫁を選ぶべきでした。



たはずだが、選んでないことを選んだ」

「……………。病んでいる母親を捨てて、出ていった兄嫁でもか？」

「ああそうだ！ みずからが全てを許し、全てを愛するために、『選ぶ！』ことを誓って生まれ変わったが、選んでなかったから、何度でも同じ体験を繰り返し、不幸だと嘆き悲しんでいる。お前は嫁がせる娘の親の立場として、娘に親の教義を教えるを説くことより、お前自身が婿とその親に、感謝すれば良かったのだが、反対に宗教の権力で説教していた」

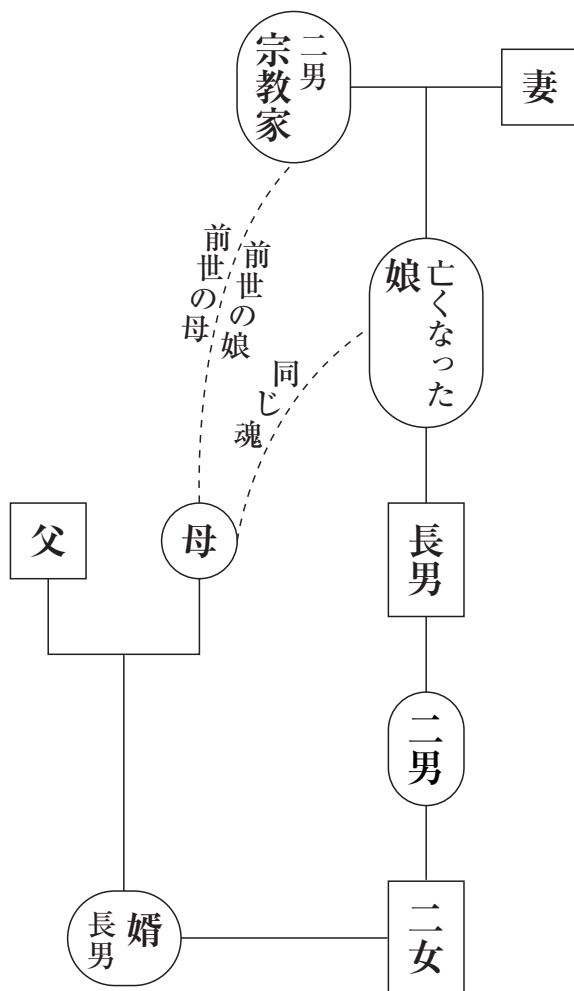
「説教は正しい道に導く方法だ」

「お前が馬の耳に念仏と思っている娘婿の母親は、お前の前世の母親であり、前世の娘であつても同様に説教するのか？」

「娘婿の母親が、私の前世の母親だとか、娘だと言われることは、おかしいではないか？ 私の前世の母親は、兄嫁と悪婆だけではないのか？」

「我が魂は我が魂にあらずであり、この魂がそことあそこに分けて、みずからが悟るために選んだのだ。父親が自分を知るために、長女と長男嫁に分け、二男と二女婿に分けて、体験することと同じことだ。みずからが選ぶまで、何度でも繰り返す」

宗教家にとって二女婿の母親は、前世の母であり、前世の娘です。



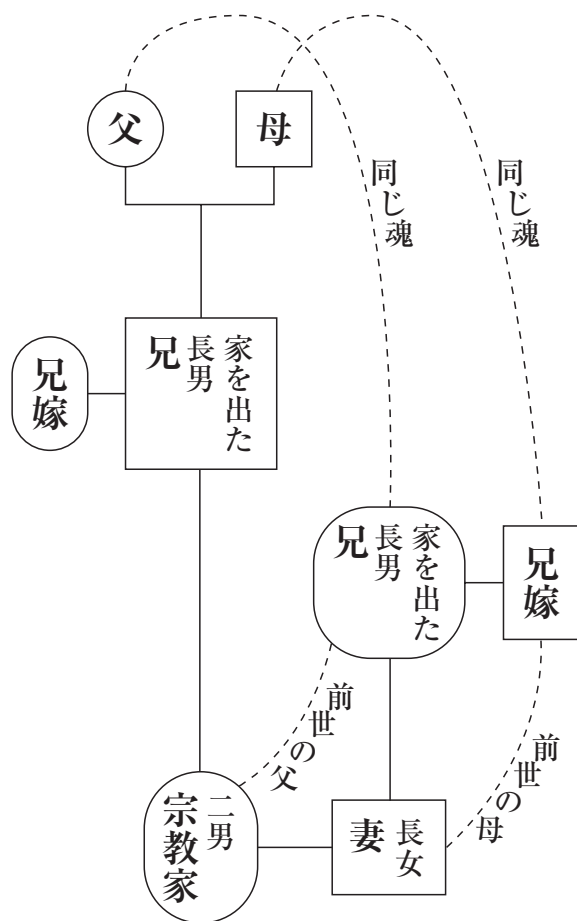
「自分が一番嫌いな人が、前世の自分の姿だと気づくまでか？」

「人間は全てを愛し全てを許すまで、何度でも前世の自分の人生と、再会するようになっている。全ての人間は人間界の神聖化を、目指すために生まれてくる。全ての人間は前世の自分の姿を思い出し、前世の自分を許すために生まれ、前世の自分を愛するために生まれ変わり、悟り「分かった！」と言うまで、何度でも前世の自分を近づける。それはみずからが心の引力で、引き寄せているのだ。ここの世界に来る前の人生は、二男としての人生だったから、お前の妻の兄は、お前にとつての前世の父親の人生であり、兄嫁はお前にとつての、前世の母親である。そして、お前達夫婦の前世の誠の人生を、教えてくれたのだ。その前世の親と、前世の己の姿を無視して、我が子の幸せを願っても幸せにはない。だから娘が幼く亡くなったのだ」

「何故」

「お前の父親が選んでなかったから、『孫娘を殺した！』と言ったことを思い出すがよい。そして娘が言った『選ぶこと！』『変えること！』『分かった！』を思い出させ、親が悟りを開くのに丁度よい時、娘が死を選んだのだ。だが、実際にはお前達が、娘に死を選ばせたのだ」

宗教家は二男ですから、妻の兄夫婦と宗教家の両親が同じ魂になります。宗教家にとって妻の兄夫婦は、前世の親であり、前生の人生を教えるための人です。



「まだ私には分らない。何故、そうまでして、娘が死を選ばなければならないのか？」

もっと他に方法はなかったのか？」

「人間界に生まれ変わるとき、全ての子供は『この親ならきつと人間界を、神聖化してくれるから！』『全てを許し全てを愛してくれるから！』と親を選んで生まれてくる。しかし、選ばれた親は、我が子の真意と神意を知らず、人間界の偽りの愛にうつつを抜かし、全てを選ばず“ここ”“そこ”“あそこ”に、分けへだて『好きと嫌い』『気に入ると気に入らない』だけの差別の判断で、親孝行しているから、罪のない子供が『選ぶこと！』を、死をもって教えていたのだ」

「それで父親と私が、娘を殺したと言われるのか？」

「ああ！ そうだ」

「親に孝行したことによって、娘を殺したと言われるのか？」

「親にとって嫁や婿は、前世では娘と息子であった。それを確かめるために、出迎え結婚という再会をしたのだ。我が子の魂は我が子の魂にあらず、と言うように、自分の娘婿や息子の嫁は、前世では実の子供達であったが、親の心のあり方を確心し、入れ替えと組み替えして確神したかったのだ。生まれ変わる時、人間は神の前で全てを許し、全てを愛す

るために、親と子、子と親、娘と嫁、息子と婿、親と親を入れ替え組み替えて、みずから前世の憎しみや怨みを消し去り、光り輝くこの世界と同様に、ひとつにするために、誓ったのだ」

「親の心のあり方を確かめるために、入れ替えと組み替えをして、教えるのではなく気づくために、神に誓ったと言われるのか？」

「そうだ！　だが人間はこの世界の誓いを守らずに、偽りの愛を誠の愛と勘違いしたから、みずからが苦しみを持たなければ、生きて行けなくなつたのだ。だが神は誓いを守らない人間をも許し愛しているのだが、人間は神の神意から離れたばかりでなく、この世界の誓いも忘れ、前世の自分を許すことを、思い出すことさえ忘れ、慈悲や情けや道徳や親孝行を、売り物にしている。この人間が、その人間を哀れみ、あそこの人間を憎んで、ここが幸せになれると思うか？」

宗教家にも、人を憎んではいけないことぐらいは、分かっているが答えられない。宗教の道の修行をし、教義や慈悲や情け、天国と地獄の因果を説法し、優しい心で親孝行と御霊祀りや先祖供養をしないと、祟りと因縁が起きると、教え続けていたことが、間違っていたのか、まだ分からない。だが神様は間違いも正しいもなく、全て人間が選んだ結果や、

選んでないことを選んだ、結果だと言われる。そして、神様は誓いを守らない人間をも、許し愛していると言われる。人間は約束をやぶれば怒られ、誓いを守らない人間を非難する。人間は不安があるから『何時・何処で・誰と・何を・どうした!』と約束することも、何となく理解できるが、人間として秩序を守るためには、どうしても約束しなければ、安心できないのではないのか？

「それでは気づくだけで、憎しみを持たずに生きるためには、どうすればよいのか？」

「我が魂は我が魂にあらずは、我が子の魂は我が子の魂にあらずであり、全てはことごとあそこの魂を、お互いが神聖化のために、預かり育てさせてもらっている」

「誰かの子供を、預かり育てさせてもらっている、と思えと言われるのか？」

「事実そうだから言っているのだ」

「誰でもか？」

「全ての人間が、預かり育てさせてもらっているのだ」

「何故？」

「この世界では、ひとつであった人間が、人間界に戻るとき、ここがことあそこを、憎まず、嫌わず、怨まず、全てを許し全てを愛す体験をして、人間界を神聖化するために、

人間自身が誓ったのだ。神は生まれ変わる全ての人間の誓いに、口出しはしないが、協力することを約束した」

「神様は人間界に口出しもせず、人間の威厳と尊厳を無視せず、どんな生き方にも説教せず、ただ無言で見守っているだけなら、何も約束する必要がないではないか？」

宗教家には、何がなんだかまだ分からない。自分が誰なのかが、分からなくなってきた。だが、何かが自分の心の中に、沸き始めてきたことは事実である。生前は無我夢中で教義を守り、因縁と崇りを解き明かしていたが、そんな物はこの世界では、通用しないと言うことが分かり始め、理解し始めたが、納得まではいかない。

「神として人間界に協力する約束は、人間の品位品格、威厳と尊厳を、そこなわない方法を選んだ。その方法は全ての生き物にも平等に、全ての人間がみずから、悟りを開くのに丁度良い方法だ」

「神様の協力は、人間にも理解できる方法なのか？」

「何も協力方法を隠す必要はない」

「誰でも知っている方法なのか？」

「ああ！　どんな人間にも平等に与えられ、平等に利用していて重宝している」

「平等に利用していて、重宝している？」

宗教家にはまだ、何がなんだか分からない。この世界が、何とか分かり始めてきたが、また急に分からなくなってきた。この世界には、天国も地獄もなく、崇りも因縁もなく、全ての人間に、怨みや憎しみもないことは事実だ。

「全ての生き物に必要であるが、ただ無言で威張ることもなく、おびやかすことなく、欺くことなく、偽ることなく、愚痴も言わず、評価も議せず問うこともしないが、全ての生き物に必要とされている」

「分かった！ 空気だ！」

「確かに空気も同じだが、神との約束は、人間が全てを許し全てを愛するに、一番ふさわしい約束だ」

「……………」

「時なのだ」

「時……………？ 時間のことか？ 神様が人間に約束したことは、ただの時間のことか？」

宗教家は考えた。確かに人間界にとって、時間は大切な物である。時間は全世界共通に

二十四時間があり、大部分の人間が、一分刻みの感覚で動いている、と言うより動かされている。朝起きて食事をして、学校や会社に出かける。それも日曜日や休み以外は、誰が決めたか知らないが、毎日定期的に動いている。何かに操られているように、時間に追われ、時間に管理されている。昔は時間が止まったようで良かった。のんびりと牛が放牧され、羊やヤギが飼われ、鶏が時を告げる。自給自足の生活だった子供の頃は、野山を駆けめぐり、野イチゴや木の実を、おやつ代わりに食べ、兄と二人で草花を摘み、花輪を造ったり、小川のせせらぎをせき止め、小魚を捕ったり、葦の葉で小舟を作り、川の流れてお互いが競争したりした。食べ物はその日に採れた物を、親子で分け合い、語らいながら食べていた。だから、神様の約束が理解できると、ひとりで勝手に納得していると、

「ここから先は、時を司る神がいるから、その神に聞きなさい。だが強制はしない。お前が自分の判断ですればよい。大部分の人間は、ここまで来る前に断念し、みずからあきらめてしまっているが、お前はまだ聞く耳を、持っているようだから、子孫のために悟った方がよからう。みずからの心を変えることが、誠の勇氣だと理解することだ」

「ここまで来た以上は、何がなんでも、全てを聞かなければ納得できない」

「それでは時の神を紹介しよう。だが言っておくことが、今まで時の神に会い、時の神の

言われることを信じた人間は、数えるほどしかない。その数えるほどの人間の中に、キリストや釈尊や孔子などがある。それだけに悟りを開いた人間が、少ないと言うことだ。お前の父親も、今までのことは信じて悟りを開いたが、時の神の言われる真意と神意が、理解できなかったから、いまだに苦しんでいる。お前がそれを克服できれば、父親はもちろん、お前の先祖の全てが、神聖化されるであろう。だからお前の心一つで、全てを変えることが出来る。克服することを祈る。もう一つ言っておくことがあるが、どんなことを聞こうが、その奥に秘められた誠の真意と神意を、見抜くことだ」

宗教家は父親も、時の神の神意を信ずることが、出来なかったために、いまだに苦しんでいるのかを、初めて理解できた。と同時に宗教家も不安になってきた。どんなに恐ろしい神だろうかと色々考えている。閻魔大王のような大男で、赤鬼のように目はキラキラと赤く光り、青鬼のように牙をむきだし、太いこん棒を持って仁王立ちをし、怖い顔をしているのだろう。だから昔の人は鬼門や裏鬼門は、恐ろしいと言ったのだろう。と世間一般の人と変わらない想像をしている。

第三章 時

1 全てが時の中に存在する

「わしが、時の神じゃ！」

と突然現れた。見れば杖をつき、ボロボロな衣服を身にまとい、ヨボヨボした格好で、何処に目の焦点が合っているのか、分からない老人が目の前に現れた。その老人は、繁華街の片隅で、誰かの食べ残した残飯を、カラスと一緒にあさっているような姿なので、誰が見ても、神様とは思えない雰囲気がある。宗教家は、想像していた恐い神と、似ても似つかないので、安心したが見当違いで落胆し、父親が、神意を悟れなかったことが分かるような気になった。こんな気持ちで、真意と神意を悟れるか、不安な気持ちになり始めた。人間界の常識では神様とは、威厳や風格が備わっていて、見るからにして「神様！」と思っていたので、疑った目で、

「本当に時の神様なのか？」

「わしは時の神じゃ！」

「どうも何処かで、会ったことがあるような？ ああそうだ！ 飲んだくれだ！ ここの世界に一緒に来た、飲んだくれにそっくりだ」

と言ったかと思うと、目は飲んだくれを捜している。だが当の飲んだくれは、四季折々の花々に囲まれ、童心に返ったように、子供や小鳥たちと、無邪気に遊び回っている。

「わしは時の神じゃ！」

バカの一つ覚えのように、同じことを繰り返しているだけなので、

「何故、そんなみすぼらしい格好をしているのか？ 神様なら神様らしくした方が、信用されてよいではないか？」

「お前は何に心を捕らわれているのじゃ！」

「……………」

「まあよい！ わしはそんなことはどうでもよい。わしがこれから言うことを、お前が理解できれば、よいことだからな！ だからまず、全てが時の中に含まれていることを、理解するべきじゃ」

「全てが時の中に存在することと同じ意味なのか？」

「おお！ その通りじゃ。全ての物が時の中に存在し、全ての物が時によって、解決できると言うことじゃ」

「全ての物が時によって解決できる？ それほど時とは大切なのか？」

「大切か大切でないとか、必要か必要でないとかの問題ではない。人間は時を、時間という数字で表すから、混乱するのじゃ。実際には時間などは存在しない。だから、大切な必要もないのじゃ」

「何がなんだか、さっぱり分からん」

「お前はまだ心の中に、必要な人間になることや、大切な人間になることが、人間の目的だと思っているからじゃ」

「必要な人間や大切な人間になることが、生まれた本望ではないか？」

「それは人間の進化ではなく、破壊に向かっていているのじゃ」

「破壊に向かっていている？」

「そうじゃ。進化しているように見えるが、破壊に向かって歩き続けているだけじゃ。過去の教訓を生かし、未来に同じ過ちを繰り返さないために、努力しようとしているが、実際には、破壊に向かっていていることに、気がつかないだけじゃ」

「それでは努力は、大切でも必要でもない、と言われる意味に、とれるではないか？」

「おおそうじゃ！ 過去も未来もないからじゃ！」

「過去も未来もない？」

宗教家は頭がパニックになった。と言うより疑い始めた。ボケ老人のたわごとを、聞いているような思いになったが、

「お前は何を基準にして、過去と未来に分けているのじゃ！」

「過ぎ去った出来事や体験が過去で、これから先に何が起きるか分からない、全ての体験や出来事が、未来ではないのか？」

「それはお前自身を基準とした見方だけであって、自己中心的に物事をとらえているから、時間に振り回されてしまったのじゃ」

「……………」

「実際には時間など存在しないのじゃ。人間が勝手に時間を作り、生活の基準を時間の中で、生きるようになってから、過去と現在と未来に、分けて考えるようになったのじゃ。過去も現在も未来もないように、前世も現世も来世もなく、全てが同時に起きているのじゃ」

「ますます訳が分からなくなってきた」

「では始めに戻ろう。お前が時について、何が頭に浮かんでくるか、言ってみるがいい」
「そうだなあ！ 春夏秋冬の季節や、年中行事のお祭りや、祝い事などが代表的だろうな」

「おお！ その調子じゃ。まだ他にあるじあろう」

「思い出もそうだな！ 思い出が時の中に含まれるなら、旅行や行楽などもそうだな！」

「おお！ その通りじゃ！ まだいっぱいあるが、全てが時の中に存在し、全てが時によつて、生かされている」

「それでは時間は、存在するのではないか？」

「お前の目から見れば、時間に見えるかも知れないが、時間ではなく、人間界では同時に起きているのじゃ」

「それでは魂の神が言われた、マンモスも生きている、と言うことと同じではないか？」

「おお！ 飲み込みが早い」

「まだ私はマンモスが生きていると、言われたことを信じたわけではない。現にマンモスは、死に絶えて存在はしないからな」

「では聞くが、お前の頭上で光り輝く、あの星は何時の光りじゃ」

宗教家は今の今まで、星が輝いていることすら、目に入らなかった。それほど話に夢中になっていたと言うより、生きていた人生と、この世界の感覚が違いすぎて、精神的に周りの景色を、見る余裕がなかったからだ。改めて星の輝きに魅了した。そして、

「星によって異なるが、何億光年前の輝きだろうなあ！」

と言ったかと思うと「はっ！」とした。

「分かった。今ここから見える星の輝きが、存在するかしないかを、確かめるためには、何億光年後でなければ、確認できない訳だ。地球でも同じことが言える。自国と反対の国では、時差によって日付が違う。それと同じことだろう」

「おお！ そうじゃ。全ては時によって、生かされていると思うが、時ではなく、全てが同時に起きているのじゃ。だから現在も未来もなく過去もなく、現世も前世も来世もなく、全てが同時に生きているのじゃ」

「少し待ってくれないか？ 今言われたことは、魂の神のことを否定しているのではないか？ 魂の神は、前世の自分の誠の人生を確信し、前世の自分を許し、前世の自分を愛し、前世の父親と母親に再会し、前世の配偶者と出会い、前世の子供と孫に再会し、前世の自

分に感謝すれば、人間界に誠の愛がよみがえり、全てが一つになり、素晴らしい人間界に、戻ることが出来ると話された。だが時の神は、同時に生きていて、前世も来世もないと言われる。それでは魂の神が言われたことが、間違っているように聞こえる。つじつまが合わないではないか？」

「何も間違っていない。全ては同時に起きているのじゃ」

「どうもおかしい。ぼけてはいないか？」

「魂の神が回答を出しているから、お前が思い出せばよいのじゃ」

「……………」

「お前はまだ何かに惑わされているのじゃ。お前達人間は、人間界に時間を作り、色々な体験を、みずから求めたから、神も協力する約束をしたのじゃ。人間自身が悟のに、丁度いい方法だからじゃ。全てが時の中に含まれ、同時に存在しているが、人間界に時間を創ることにより、この世界と分けたのじゃ。それがお前の言った、春夏秋冬の季節や、年中行事の祝い事や、思い出の旅行や行楽もそうだが、まだ他にもあるのじゃ」

「まだ他にもある？」

「おおそうじゃ！ 時には時代や歴史、老若男女、兄弟姉妹と配偶者や親戚、娘や嫁や母

や姑、少年や青年や老人、過去や現在や未来、名前や生年月日や誕生日や成長や結婚、就職や転職や引退、数字や記念日や節目や記憶、自転である朝昼晩、栄枯盛衰や喜怒哀楽、愛と憎しみ、出会いと別れ、慈悲と情けや道徳、ことそこそこあそこ、増改築や普請や家具類、葬儀や命日や法事や輪廻転生、仏像や石像や木像や墓、宝石や貴金属、色彩や物の形、着る物や洋服類、病名や入院と処方箋、出来事や事件や犯罪、水害や災害や火災、陰陽和合や表裏一体、写真やアルバム、前世や現世や来世、戦争と平和、大自然の摂理や雨や風、順序と立場などが含まれているのじゃ。だがまだ数え切れないほどいっぱいあるぞー！

「……………」

「魂の神は、一つの魂が自分という魂の存在を確認するために、相手が必要だったと言ったじゃろう」

「確かに何度も聞いた。父親の魂は自分を知るために、長女と三女、二男と四男に分け、母親の魂は長男と三男、二女と四女に分け、父親は、自分の本来の心を思い出すために、長男嫁と三男嫁、二女婿と四女婿を選び、母親は長女婿と三女婿、二男嫁と四男嫁を選んだと言われた。その事と前世も来世もない、と言われることと関係がないではないか？」

「おおいに関係があるのじゃ。人間は本来の心を思い出す方法を、時の中にあると思ったから、神様と約束し、前世の自分を知るために、子供達が必要になったのじゃ。だが実際には自分の子供ではなく、子供達は、全て神の子として、授かったのじゃ」

「子供は神の子？」

「おおそうじゃ！　どんな子供も全てが神の子として、人間界に生まれ変わっているのだが、親が勝手に神の子を私物化し、ことごとあそこに分け、区別するだけなら良かったが、差別してしまったために、本来の心を思い出すことを、忘れてしまったのじゃ」

「それでは何故、神の子が犯罪を起こすのだ」

「神の子だからじゃ」

「神の子なら本来の心を思い出す方法を、覚えているのではないのか？　全てのことを忘れはしないのではないのか？」

「おおそうじゃ！　だから親に本来の心を思い出させるために、犯罪を起こすのじゃ」

「そんなバカなことがあってたまるか。親に本来の心を思い出させるために、犯罪が起きるなんて誰が信じる。時の神は狂っているとは思えん。それじゃあ！　神の子でも人間の子でもなく、悪魔の子ではないのか？」

宗教家には納得できない。子供は神の子なら、親孝行者として産まれて来るだろう。それなのに、年々犯罪が多発している。それも少年犯罪が大部分の国でも、減少することなく、発生している。それでも子供は、神の子なのか？これは時の神が企てて、密かに人間界に、悪魔の子を混せて送り込み、産ましているのではないかと思える。それなら納得できる。年々犯罪が低年齢化してきているから、きっとそうに違いない、と確信したかのように、ブツブツ独り言を言っている。

「犯罪は全ての人間を、神聖化するために、神の子が選んだ。と言うより、選ばせたのじや」

「誰が選ばせたと言われるのだ」

「人間自身がじゃ。神が選んだのではなく、人間が選んだ結果が犯罪じゃ。と言うより、みずからの心を変えず、誠の勇氣を持たない、臆病な偽善人ぶった人間が、神の子に選ばせたと言っているほどじゃ」

「言っている意味が分からない。それでは聞くが、少年が少年を殺したり、子供が親を殺したり、親が子供を殺したり、色々な犯罪が日常茶飯事に起きていることも、人間を神聖化するために、選んだと言われるのか？」

「おおそうじゃ！ 臆病な人間が選ばせたのじゃ。と言うより、誠の勇氣を持たない、臆病な親が選ばせたと言つても、よいほどじゃ」

「……………」

宗教家には理解できない。魂の神が言われたことは、何となくだが理解できたが、時の神の言われる意味が、理解できないというより、皆目見当がつかない。

「犯罪は全て親の心を変える勇氣がなかったから、神の子に選ばせたのじゃ。どんな犯罪にしても、またどんな年老いた子供にしても、全て親が選ばせたのじゃ。と言うより親自身を選んでなかったから、神の子が選んだと言つてもよいほどじゃ。親にみずからを変えて、選ぶ勇氣を持たせたかったという訳じゃ。犯罪だけじゃない。諸々の人間界の出来事は、神の子である子供が親自身に、誠の勇氣を思い出させるために、起こしているといつても、過言ではないのじゃ」

「それが親に『選ぶこと！』『変えること！』『分かった！』ということを、思い出させるために、犯罪を起こすと言われるのか？」

「おおそうじゃ。飲み込みが早い。少年が少年を殺すと言うことは、両方の少年の親自身を選んでなかったから、神の子達がみずからを、犠牲にしたのじゃ。子供が親を殺すこと

は、親自身が選んでないことを選んでいたために、訴えかけていたことに気づかなかったからじゃ。親が子供を殺すことは、祖父や祖母の代で、ここがあそこを無視し、偽りの愛にうつつを抜かし、立場と順序を守らず親孝行をさせたから、そこを捨てたのじゃ。神の子である子供は、人間界を神聖化するために、選ばせようと訴えかけているのじゃ。そして、それを周りの人間達に、真の勇氣と感動と感謝を、与えるためじゃ」

「私には納得できない」

「それでは犯罪のあと何かが改まったり、改善されなかったか？」

「そう言えば、少年が少年を殺した後に、少年法が改まり、学校の先生に責任追及をしたり、少年が少年を銃で殺してから、銃刀法を改善する運動が起きあがったり、医療ミスがあった後、医療ミスをしないように、医療制度が改善されたり、毒物の犯罪が起きてから、毒物の保管を、徹底的に管理するようになり、保険金詐欺やサラ金地獄に陥ってから、金融関係や保険制度が、改善されるようになったり、飲料の細菌問題が起きてから、除菌駆除施設を周期的に清掃したり、空港内に乗っ取り事件が起きてから、ハイジャック防止を、強化するようになったことは、事実だなあ」

「何故、その前に改善できないのじゃ」

宗教家には何も答えることは出来ない。事実何か犯罪や事件が起きなければ、変えることが出来ない、社会の仕組みになってしまっているからである。

「魂の神が『憎しみの中や怨みの中に魂の故郷がある！』と言われた意味が分かるか？
今のお前なら、少しは分かるだろうなあ」

「ああ！ 何となくだが……。偽善人ぶった人間や、臆病な大人や親に、みずからの心を変える勇気が、なかったばかりに、神の子を犠牲にして、犯罪が起きていることは分かった。だが感動と感謝の意味が、分からない」

「全ては同時に起きている。人間は再会できる時を選んでいる。人間は出会えた喜びを誰かに伝えたいと思い願っている。全て人間が前世で誓った約束を、体験できたことに対して、感謝されたいために、物事が起きているのじゃ」

「意味が分からない」

「全ての出来事は誰かに出会ったり、体験できたことを報告したいから、同時に物事が起きるのじゃ」

「報告したために物事を起こし、その報告したい誰かとは誰なのか？」

「親じゃ！ 報告の中にも喜びも悲しみもあるが、全て親に感謝されたいがための、体験

なのじゃ」

「その親とは現在の親なのか？ それとも前世の親なのか？」

「全ての親に報告し、全ての親から素晴らしい体験をしたと褒められ、感謝されたいための体験なのじゃ」

「どうもさっぱり意味が分からない」

「お前はまだ犯罪だけに、心を捕らわれているようじゃ。別の解釈で物事や体験を、考えてみてはどうじゃ。例えば試験に合格したとか、友達が出来たとか、結婚の縁ができたとか、子供が出来たとか、色々祝い事もあるのではないか」

「ああそうだな！ それなら意味が分かる。どんな親でも親戚でも、人生儀礼のお祝い事なら喜んで祝福するだろうし、喜びに感動するだろう。だが犯罪にも感謝しなければならぬのか？」

「おお！ そうじゃ！ 全てに感謝することじゃ」

「私の頭では付いていけない」

宗教家には時の神の言われる、真意と神意が分からない。ふと！ 魂の神の言われたことを思い出した。きっと父親も同じように、真意と神意が分からず、挫折してしまったの

だろう。だが、このままでは、父親や母親や先祖の神聖化が果たされず、奈落の底に奥深く落ちてしまう。何とか頑張らなくては、と使命感が沸いてきたが、

「気づかせてもらったことに、感謝すればよいのじゃ」

「……………」

「例えばじゃだ。お前の前を走っている自動車から、タバコの吸い殻が道路に捨てられたとしよう。その時お前はタバコを捨てた人間をどう思うか？」

「タバコの吸い殻を捨てた人を、非難するだろうか」

「そう言う考えでは、何百年や何千年経っても、犯罪が治まらないだろう」

「何故だ？ それではタバコを捨てた人に、感謝しろと言われるのか？」

「おおそうじゃ！ 全てを許し全てに感謝じゃ！ タバコを捨てるところに、出会えたと言ふことは、お前に『タバコやゴミを道路に捨てるな！』と教えてくれているのだから、タバコを捨てた人間に感謝すれば、お前自身が、道路にタバコやゴミを捨てなくなるのじゃ。そうだろう！ だから捨てた人のお陰だと気づき、感謝すればよいのじゃ」

「それでは捨てた本人はどうなるのか？」

「お前に気づかせてくれた神の子じゃ！」

「私には分らない」

「それでは捨てられたタバコやゴミを、お前が拾いゴミ箱に捨てればよいのじゃ」

「何故、私が他人の捨てたタバコやゴミを拾い、ゴミ箱に捨てなければいけないのか？」

私は自分の責任は自分で取ることを、親から教えてもらった」

「それでは誰かが拾ったとしたらどうじゃ」

「それなら拾った人間を褒めるだろう」

「何故、褒めるのじゃ」

「褒められる行為をしたからだ」

「タバコを捨てた人間も、褒められるべきではないか？」

「私には時の神の言われる意味が分らない」

「人間は矛盾だらけの社会を造り、矛盾を矛盾と思わなくなってしまったから、今の意味が分からなくなってしまったのじゃ」

「……………」

「罪のない人を殺せば殺人罪となるが、戦争で人を殺し国を救った人間を、英雄に祭り上げたり、焼き肉を食べながら、愛鳥週間の問題を議論し、暴飲暴食した後に、胃薬を飲ん

だり、牛肉を食べながら、捕鯨問題の賛否の議論をしたり、宗派の違う信者同士が、宗教の教義を非難し憎しみ合ったり、菜食主義が健康に良いからと、肉食主義を非難したり、人を憎んでいる親が、我が子の幸せだけを願うのは、矛盾ではないのか？ 神が言われたように、人間は外に徳を求め過ぎて、内に徳をもつて帰れなくなってしまったのじゃ」

「それが全ての始まりは一つだが、自分の存在を知るために二つに分け、自分の存在が何であるかを、確かめたいために、みずから分け、人間自身が自分という存在に、気づくための手段という訳か？ 人を呪えば穴二つなのか」

宗教家にも、人を非難したり憎んではいけないことぐらいは、分かり過ぎるほど分かっていた。だが、どうしても現実を見れば、親に孝行しなかった両方の兄夫婦を、許すことが出来ない。親を無視する事は、人間としての優しさや愛情や慈悲を、捨てることになるから、親孝行を出来る者が、親孝行すれば良いのではないのか。だが、選ぶことを選んでなかったり、偽りの愛で娘が亡くなったと言う。そして、時の神は、

「人を呪えば穴二つばかりではなく、同じ魂の人間にも、悪影響を及ぼすのじゃ。お前は善婆が、始めに言った言葉を、覚えているか？」

「善婆が選ばなければならない人間は、悪婆だと言うことか？」

「おおそうじゃ！ 全ては光りの中に時と共に存在し、善の中に悪、優しさの中に憂い、美の中に醜さ、平和の中に争い、動く者の中に動かない者、見える者の中に見えない者、近づく者の中に遠ざかる者がある。タバコを捨てた人間や、親不孝者や悪を攻めたり、非難することが目的ではなく、みずからが出会え、みずからが気づき、全てを許し全てを愛するために、お互いが心の引力によって引き寄せ、悟るために無くてはならない相手であると言うことじゃ。これがお陰様なのじゃ」

「清濁併せ吞むという訳か！」

「人間は己の真の姿や形を、鏡に相反する姿として映し、みずからが確信することを、神の前で誓った。そのために神が約束したのが『時』なのじゃ。その時の中には、全てが存在し、全てが同時進行し、全てが同時に含まれ、同時に生きているのじゃ」

「同時に生きている？ 現にここに亡くなった親がいるというのか？」

「おお！ 誰も亡くならないのじゃ。お前は姿や形が同じでなければ、親や兄弟ではないと思っっているから、信じようとしなのじゃ。善婆が選ぶ相手は悪婆だと言ったが、悪婆と善婆は姿や形は違えども、一つの魂が二つの魂になっただけなのじゃ。だから選ぶことにより二つが一つの魂になり、一心一体になれたのだが、選んでなかったばかりに、一つ

の魂になれず、姿や形が別々になったままの、一心一体になれない存在になってしまったのじゃ。善婆と悪婆だけではなく、お前の妻とその兄嫁も、元は一つの魂だったのだが、選んでなかったばかりに、この世界に来て、一つに戻れなくなってしまうのじゃ」

「人間は全てを許さず、全てを愛することを忘れ、自分の一番嫌いな性格が、前世の己の姿と言うことも、思い出すことを忘れ、不安を隠すために、一つの魂が陰と陽の二つに分けられたまま再会者を増やし続け、その繰り返してむやみに人口を増やし、結局は戦争で人口の調整をしているだけなのか」

「おおそうじゃ！　だが戦争だけではなく、交通事故死や突然死や病死、犯罪などの全ての不幸な死は、一つになれなかったために、起きているのじゃ。お前の父親も同じことじゃ。善婆だけを選び、兄嫁になる人だった悪婆を選ぶことを忘れ、自分の徳だけを求め、自分の徳を維持するだけの考えを押しつけ、自分の気に入るようにならなかった、前世の父親である我が子長男を選ばず、前世では母親であった悪婆を非難し説教したために、我が子の長男の嫁を快く迎えることが出来ず、気に入る二男であるお前を選んだために、自分と同じ魂の孫を見殺しにしたのじゃ。全てが一つに帰れば、良かったのじゃ」

「分かった！」

「ようやく言えたな！ その言葉を待っていたのじゃ」

宗教家には何となくだが分かつてきた。長いトンネルの中にたたずみ、前に進むことも退くことも出来ず、思案に明け暮れていたが、遙か遠くにかすかな明かりが、見え始めてきた。だが父親だけではない。宗教家も兄を無視して跡を継ぎ、兄嫁を憎み父親を敬い、伯父の妻になるべき悪婆を説教し、悪婆と同じ魂の兄嫁と縁を切り、妻の兄夫婦は前世の親であったことを忘れ、憎しみの心で追い出したから、同じ魂の娘を見殺しにする手助けをしていたことが、分かった。

「人間でも動物でも、全ての物の魂は、“ここ”に帰るために、時の中に姿や形を変えて、生まれ変わっているのじゃ。だが人間だけは“ここ”に帰ることを止めたと言うより、慈悲や情けや哀れみ、そして偽りの愛に惑わされ、真の自分を許すことを忘れ、前世と現世と来世に分け隔て、“ここ”と“そこ”と“あそこ”に、区別だけなら良かったが『好きと嫌い』『氣に入ると氣に入らない』に、差別して判断したから、一つに返ることが、出来なくなってしまったのじゃ」

宗教家にも言われる意味が分かつてきたが、意味が分かるが『選ぶこと！』『変えること！』とは、何を選び何を変えれば、この世界と、人間界が同じになるのか、まだ分か

らない。

「人間は“ここ”と“そこ”と“あそこ”を、一つにするために、魂の神が言われたように、組み替えと入れ替えをして、神の子を預かり育てさせてもらい、みずから前世を悟るようにしたのじゃ。要するに映画の配役を、役柄によって、入れ替えと組み替えをして、前世の自分や、神の子の姿や形を“そこ”と“あそこ”に見て、立場と順序を、気づく方法じゃ」

「みずからが前世の憎しみや怨みを、消し去るために、組み替えと入れ替えをし、“ここ”が“そこ”と“あそこ”の魂を、神の子として、我が子に預かり育てさせてもらい、前世の親に恩返しをすることとは、反対から見れば親にとって、嫁や婿は前世の息子と娘であったが、預けて育ててもらい、結婚と言う華燭の典を挙げ、両家が再会しお互いが感謝し、快く出迎え入れるのか？」

宗教家にも少しずつではあるが、分かり始めてきた。だが『選ぶこと！』『変えること！』までには、時間がかかりそうである。

2 組み替えと入れ替え

「おおそうじゃ！ 人間がこの世界と、同じ一つの世界にするために、どうすればよいかを考えた。そして、誰でも平等に神聖化することを『時！』の中にあると思ったから、神と約束した。その約束は、自由であり、ありのままの姿であり、ある日突然であり、想うがままと以心伝心であり、永久と永遠である。それが組み替えと入れ替えである」

「それでは、組み替えと入れ替えの意味は、分らない！」

「人間は出会いを漠然にしか思わないが、ある日突然ありのままの姿で、自由に出会ったりする。それは心で思ったことが、相手に心が伝わり、前世で出会った人達と、現世で再会が出来る。それは永遠に変わることなく続く。簡単に分かりやすく言えば、兄弟や親戚の魂の分け霊を、我が子として授かり、お互いが憎しみや怨みを持たず、この世界と同じ素晴らしい人間界にするために、丁度いい時を選び、永遠に生まれ変わるのだ」

「それが魂は我が魂にあらずと、我が子の魂は我が子の魂にあらずか？」

「ああ！ その通りだ。誰にも平等に全てを許し、全てを愛することができ、全ての人間がここもそこもあそこもなく、一つになる方法じゃ」

「詳しく教えてくれないか？」

「例えば、同じ魂でもお前は二男だが、妻の兄は長男と言うように、兄と弟になったり、お前は男だが兄嫁は女と言うように、男と女になったり、お前にとっては仲が良かった両親だが、仲が悪く子供も出来ず、離婚寸前の娘夫婦になったり、お前達夫婦が、我が子の長男と二男になったり、お前の兄は男と言う存在だが、お前の妻は女と言う存在になったり、妻は長女でも二男の嫁になったり、妻の母から見れば、お前は二男でも長女婿になったり、妻の兄夫婦の子供を我が子として、預かり育てさせてもらったり、我が子を妻の兄夫婦に、預けて育ててもらう。または、お前の兄の魂を、我が子長男に分け霊として預かり育て、兄嫁を我が子長女に分け霊として、預かり育てさせてもらったり、兄嫁を我が子長男の嫁に、魂の里帰りとして出迎え、妻の兄嫁を我が子二男の嫁に里帰りさせ、我が子二女をお前が嫌って縁を切った兄夫婦の処へ、里帰りさせているのじゃ。人間は生まれ変わる時に、立場と順序を入れ替え組み替えして、みずからが悟ることを目的にしたのじ

や」

「誰でも悟りの里帰りなのか。兄弟を憎めば、我が子が不幸になると言う訳か」

「人間がこの世界と、同じひとつの世界にするために、自分の魂の分け霊を、兄弟の子供に預け、兄弟の魂の分け霊を、自分の子供に授かったり、前世で一番嫌いな人の子供を預かり、我が子を一番嫌いな人に預けたり、前世では娘であった子を、現世では嫁として出迎えたり、前世で嫁であった子を、現世では娘として授かったり、前世で息子であった子を、現世では婿として出迎えたり、前世では男であったが、現世では女に生まれたり、前世では先妻や先夫の子であったが、現世では後妻や、後夫の子として生まれたり、前世は一番先に生まれたが、現世では二番目や、三番目に生まれたり、前世では兄や姉の子として生まれたが、現世では妹や弟の子として生まれたり、前世で人を救った人は、現世ではその人に救われたり、前世で好かれた人は、現世では憎まれる人になったり、前世で親孝行者は、現世では親不孝者になったり、前世では侵略した国に生まれたが、現世では侵略された相手国に生まれたりして、お互いが再会し心を確認し、契りを結ぶ確信をし、全てを許す確心をし、全てを愛す確神をするために、組み替えと入れ替えにしたのじゃ」

「それが魂の故郷は、全てがひとつの光りの中に輝き、全ては光りの中にあり、善の中に

悪があり、優しさの中に憂いがあり、美の前世は醜さであり、平和の前世は争いであり、魂の故郷は、憎しみや怨みの中にあると言われ、一番嫌いな人が、前世の自分の姿だと思え、と言われた意味なのか」

確かに憎んでいる人に、我が子を預けたと思えば、憎むことをさけたいだろう。我が子を憎んでいる人に人質に取られ、憎んでいる人の子供を人質に取っていれば、我が子を守るために人質の子供を可愛がり、精一杯守ってあげれば、我が子が憎まれずに、守られることは理解できる。もし人質の子供を憎めば、我が子が憎まれ、無視すれば無視され、殺せば殺される。

宗教家にも全てではないが分かってきた。ここであるみずからが犯した罪で、みずからが殺されれば、悟ることが出来なくなるから、罪のない同じ魂の人質の、そことあそこが殺される。だが誰がこんな事を信じるだろう。人を憎んではいけないことぐらいは、誰でも知っている。神様は人間は全てを知っていると言われ、全てを思い出すだけだと言われた。人間はいつから全てを思い出すのをやめ、憎しみを覚え怨みを、忘れなくなったのだろうか。

「全ての人間は、全てを許し全てを愛することを神に誓い、生まれ変わったが、大部分の

人間は誕生と同時に、忘れるようになっていくのじゃ」

「何故、忘れないといけないのか？」

「時の中で思い出し、全てを許し全てを愛する体験をしたいからじゃ！」

「全てを許し全てを愛する体験のためなら、忘れない方が神聖化するに早いではないか？」

「前世で愛する子供や身内が殺されても、お前は許すことが出来るか？」

「許すことは出来ないだろうな！」

「この世界から人間界に戻るとき、大部分の人間は前世の憎しみ怨みを忘れ、全てを許し全てを愛するために、みずからが組み替えと、入れ替えを選び、神と誓って生まれ変わったのじゃ。だが、全てを許し全てを愛さない人間がいるから、人間界を神聖化するために、みずからを犠牲にし、臆病な親達に真の愛と、前向きに生きる希望と、みずからの心を変える勇気を与え、『選ぶこと！』『変えること！』『分かった！』と、気づくことを目的にする人間もいる」

「それが釈尊やイエス・キリストや孔子なのか？」

「実際には釈尊やイエス・キリストや孔子達ではない。逆から考えて見れば分かるだろう。

何故、その人間が必要になったかののだ」

「分らない。だが釈尊やイエス・キリストや孔子は、素晴らしい教えを説いた」

「確かに素晴らしい人間だと言うことは、誰でも知っている。だが何故、そのような素晴らしい教えを説く人間を、必要にしなければならなかったのじゃ」

「善が有るのは、悪という比べる対象物があつたからか？ その悪は人間界を、神聖化するために、臆病な親達が求めたものなのか」

「おおそうじゃ！ 全て対象物のお陰に感謝しない限り、何度でも憎しみと怨みの、組み替えと入れ替えを、繰り返さなければならないのだ。釈尊やキリストや孔子のような、素晴らしい人間が、慈悲、愛、道徳を説くために、何度生まれ変わってきても、この世界と同じようにはならないのじゃ」

「どうしても悪に感謝し、薄情に感謝し、殺人犯に感謝しろと言われるのか？」

「善も悪もない。悪は善のしないことをして、善は悪のしないことをするだけであつて、お互いが前世の姿を、相手に与えただけじゃ。全て人間が求めた結果であり、何も不必要な物はない。全ての体験を人間自身が求めた物であつて、それ以上でもそれ以下でもない。全てを許し全てを愛さなくて、己の幸せだけを求めても、何も変えることは出来ない。善

が悪を憎み怨んでいるのに、釈尊やキリストや孔子に救いを求めても、憎しみは消すことは出来ない。それは善人ぶった偽善者じゃ」

「それでは何故、悪ができるのだ。悪いことをする人間さえないなかったなら、素晴らしい世界ができるのが」

「立場と順序を守ることじゃ」

「立場と順序を守るだけで、悪ができないと言われるのか？」

「前世の己の姿を相手に与え、相手の姿を自分にもらい、お互いが自分の前世の姿を、鏡として映し出しているに過ぎないのじゃ。だからその相手に感謝することは、相手の立場を守り「気づき」となり、悪が納まるのじゃ。要するに、お前が同じ魂の兄嫁や妻の兄と、娘婿とその母親の、立場と順序を守り感謝すれば、悪などなくなるのじゃ。分かるか！」

「何となくだが……。それだけで悪が納まるとは思えないが」

「何故、お前は両方の兄夫婦を、無視して親孝行をしたのじゃ」

「親孝行をすることは、当然ではないのか？ 親が困っていれば、助けてあげるのは当然ではないのか？ 親に育ててもらった恩を、返すことは当然ではないのか？」

「親に受けた恩を、神の子である我が子に返すことが、恩返しじゃ」

「親に恩を返してはいけないのか？」

「魂の神が言ったことを覚えているか？ 親が子供に孝行することが、水が滞ることなく

流れ「親が子供に孝行が親孝行」することの方が、理に叶っていると言ったじゃろう。と言うことは、子供がいなければ、親孝行という体験もできない訳じゃ」

「確かに時の神が言われる通りだ。しかし、病んでいる親を見捨てることは、人間として捨てて置くわけにはいかん」

「可愛い娘を見殺しにしてもか？」

「……………」

「お前は立場と順序を無視したから、可愛い娘を見殺しにしたのじゃ。お前の親と同様に、親に孝行が親孝行だと思っていたから、娘が身をもって教えたのじゃ。人間は自然界の過酷な摂理を無視し、優しさと同情心で判断したから、立場と順序がなくなったのじゃ」

「親に孝行しなければ、娘が助かったというのか？ どんなに苦しんでいる親でも、放つて置けと言われるのか？」

「おおそうじゃ！」

「何故、そうまでして時の神は薄情なのか？ それが神の仕打ちなのか？」

「妻の母親がとった仕打ちの方が、もっと薄情ではないのか？ 妻の母親の実家は今どうなっているか、お前は知っているのか？」

「知っている。妻の母親の実家の跡を取った、弟の嫁と親と折り合いが悪くて、親が可哀想だからと、妻の母親が弟嫁を追いつ出し、妻を追いつ出された弟は、嘆き悲しんで亡くなり、実家が絶えてはいけなからと、下の弟に実家を継がせたが、今度は継いだ下の弟の嫁が、腹に身ごもったまま、突然亡くなり、下の弟は精神病院に入ってしまった亡くなり、妻の母親の実家は、絶えてしまったと聞いている」

「嫁は先祖の魂の里帰りであり、前世の娘が嫁として帰ってきたのだが、現世の娘が出しやばって追いつ出しておいて、それでも妻の母親が可哀想か？ 病んだから可哀想だと思うなら、それは自業自得ではないのか？ 善人の子供が罪を犯せば、魔が差したと思い、悪人の子供が罪を犯せば、自業自得だと言うことと同じではないのか？ 神は全て平等じゃ」

「二男と兄嫁は前世の母と息子であり、兄と二男嫁は前世の父と娘して考えれば、確かにそうだなあ！ だが……」

宗教家には何も言えない。事実が事実であるからだ。

祖母の罪を背追った

父

母 長女

長男

嘆げき悲しんで亡くなった

嫁

追いだされた

前世の父と娘

身ごもって亡くなる

前世の母と息子

精神病院で亡くなった

二男

兄 長男 家を出た

兄嫁

妻 長女

二男 宗教家

娘 亡くなった

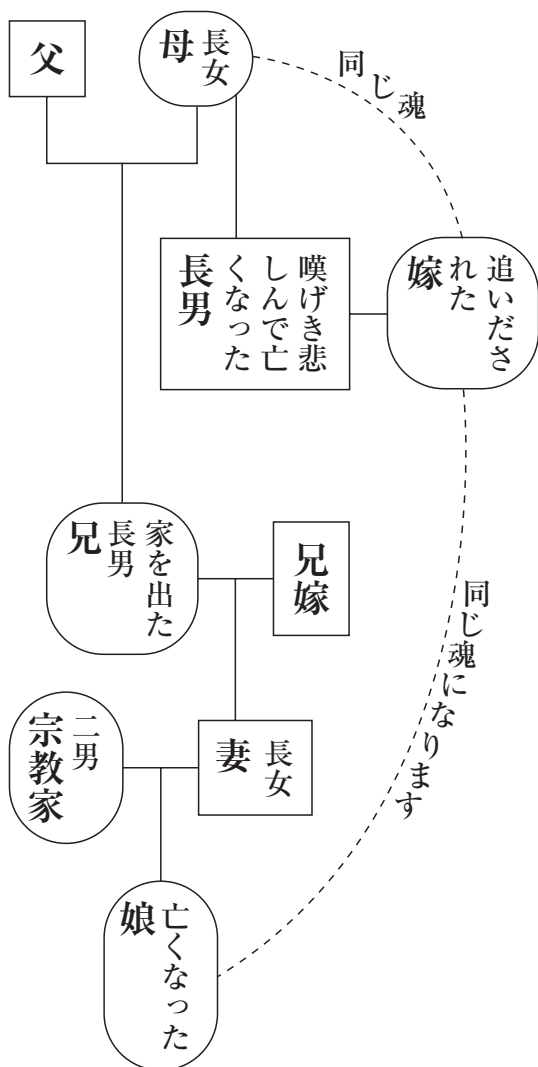
「お前の五歳で亡くなった可愛い娘は、おばあちゃんの病を治したいなら、『おばあちゃんが追い出した弟嫁を探しだし、おばあちゃん自身が詫びなければ、おばあちゃんも私も治らないのよ!』と訴えかけて、娘が病んだのじゃ。だがお前達夫婦は、よりによって何を勘違いしたのか、妻の母親が取った態度と同じように、今度はお前達の前世の親である妻の兄夫婦を『薄情だ!』と言って追い出したから、可愛い娘を見殺しにしたのじゃ。それでも親孝行と言えるか? それでも可哀想と言えるか? それでも薄情だと言えるのか?」

「ウオォー」

声にもならない叫び声で泣きじゃくった。宗教家にも妻の母親が、同じ魂の弟嫁にとつた仕打ちが、時を経て病という体験に、降りかかったことが分かった。神は薄情ではなく、人間が神の真意と神意を無視し、前世の娘を捨て、現世の娘に親孝行をさせ、同情心と慈悲で『好きと嫌い』『氣に入ると氣に入らない』『親孝行者と親不孝者親孝行』に、分ければ『親の因果が子に報い』となつて返ってくるのが。今までの思い方が、間違っていたのが氣づいたのか……。それとも選んでなかったことが分かったのか。しばらくしてから、

宗教家の奥さんの母の取った態度と、宗教家夫婦が奥さんの兄夫婦を追いつ出したから可愛い娘を見殺しにした。

宗教家の奥さんの母が追いつ出した弟嫁と、五才で亡くなった娘さんは同じ魂になります。



「何となく分かってきたから、ようやく思いを変えられるような気がする。今から私が言うことを審判してくれるか？」

「いいじゃろう！」

「今の今まで気が付かなかった。私は勘違いしていたことが分かった。私は長女婚だから妻の母親と同じ魂である。妻の母親は長女だから、実家を追い出された、叔父の妻である弟嫁も長男の嫁だから、私とも同じ魂になる」

「おおそうじゃ！」

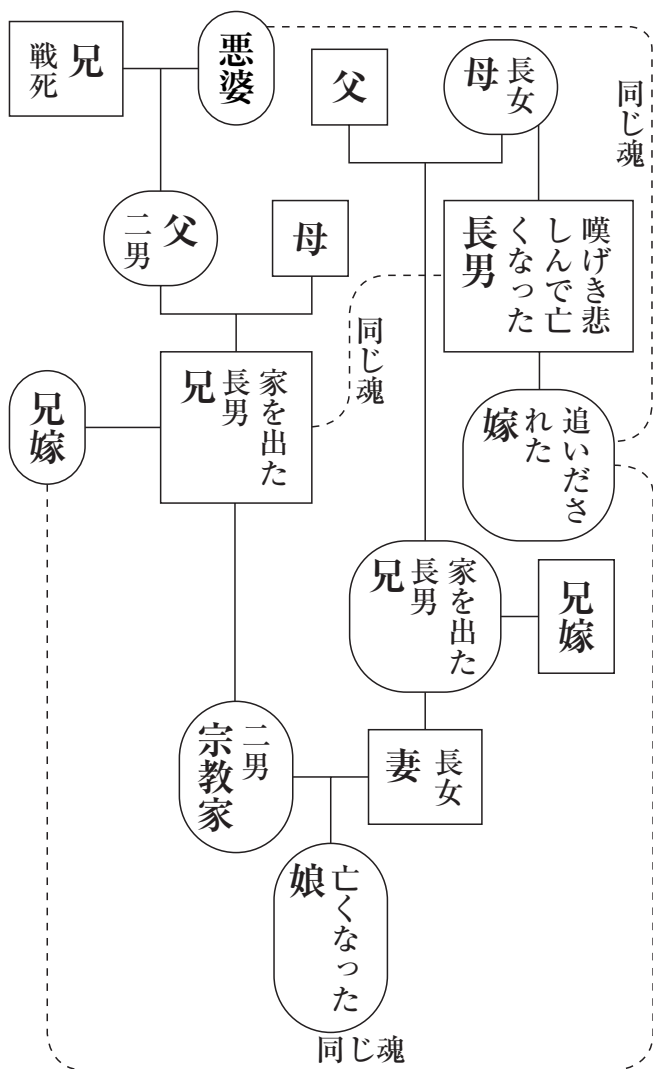
「妻の母親の弟である叔父は、私の兄と同じ魂になり、その追い出された弟の嫁である叔母は、私が嫌っていた兄嫁と同じ魂になる。そして、戦争でなくなった伯父の妻になる人であった悪婆とも、同じ魂になる」

「そうだ！」

「私の娘婚と悪婆と、そっくりなその母親も同じ魂になる。この魂は全てが一つであり、全てがここもそこもあそこも一つである。憎しみや怨みがあれば、一つに帰れないから、気づかせるために、一つの魂が二つになり、二つが三つになったただと分かった」

「おおそうじゃ。よく分かったな！ 全てが心の引力で引き寄せて、時の中で気づくこと

宗教家は二男でも長女婿です。宗教家の家系と奥さんの実家の家系を見ますと誰と誰が同じ魂だかが分かります。



を誓ったのじゃ」

「全てが『丁度いい時！』を選んで、悟りの里帰りをしているという訳か」

「全ての魂は一つになりたがっている。全ての魂は一つの光りの中で輝きたがっている。魂の神が言ったことを思い出すがよい」

「魂の故郷は憎しみの中にあり、怨みの中にあると言われた」

「人間は、愛という感情を思い出すために、人を殺し、平和という言葉を使うために、戦争を起こし、慈悲と優しさと道徳を主張するために、他人を憎しみ怨んでいるとも言ったはずだ」

「みずからが気づくために生まれたのだから、みずからが殺されれば、気づく前にこの世界に戻ってしまう。だから気づくために、みずからがそことあそこの人間を選び、心のあり方を確信しなかったとも言われた。妻の母と私の父が犯した罪を私が受け継ぎ、娘が背負い訴えかけていた。それを気がつかなかったから、親の陽徳の怨みを、子供が受け継ぎ、孫が現すのか」

「憎んで追い出した人間が先に亡くなれば、悟ることが出来なくなるから、その人間にみずからが気づくことを、思い出して欲しかったのだ。『病は悟りの始めなり！』と言うわ

けだ。だが実際には病などないのだ。全てが気づく手段だと言うことだ」

「病は何かを悟れば治ると言われるのか？」

「悟りは病だけではなく、犯罪も不幸な出来事も、全てが丁度いいように、心の引力で引き寄せ体験しているのだ。人間は全てを思い出すために、不幸という体験を起こしているのだ。実際には不幸ではなく『気づき！』の道具なのだ」

「気づきの道具？」

「おおそうだ！ 全てが平等に気づく道具なのだ。神は全ての人間が幸せに生きるために、平等の権利を与えた。だが、人間は好き勝手に解釈して、不平等にしてしまったのだ。だから『不平等の中に平等あり、平等の中に不平等あり』になってしまったのだ」

「その『不平等の中に平等あり、平等の中に不平等あり』とは何だ」

「お前は娘夫婦の喧嘩はどっちが悪いと思うか？」

「婿が悪いと思う」

「だが娘婿の親ならどう思う」

「たぶん嫁が悪いと思うだろうな」

「これは平等であり、えこひいきがあるから平等に見えず、不平等になってしまうのだ。

全てが平等なのだが、「ここ」と「そこ」と「あそこ」に分け隔てたために、起きる不平等なのだ。

嫁と娘の喧嘩は嫁が悪く、娘と嫁ぎ先の小姑の喧嘩は、小姑が悪いと思うだろう。

嫁いだ娘が病んでいれば嘆き悲しみ、嫁が病めば自業自得と思うだろう。

嫁いだ娘が毎日来れば喜び、嫁が毎日実家に帰れば怒れるだろう。

週一回の嫁の看病には怒れ、週一回の娘の看病は待ちこがれ喜ぶだろう。

娘の離婚は嘆き悲しみ、嫁の離婚は憎しみ怨むだろう。

母親が嫁の悪口を言っても、嫁が母親の悪口を言えば怒れるだろう。

娘夫婦を親の思い通りにさせても、息子が嫁の親の思い通りになれば怒れるだろう。

娘可愛さで婿の家に出しゃばっても、嫁の親が出しゃばってくれば怒れるだろう。

戦で国を救った英雄を褒め称え、罪のない人を殺した殺人犯を憎み裁くだろう。

だがこれらは神から見れば平等なのだ」

「何故、人間はえこひいきするのか？」

「ことごとあそこに分け、気に入ると気に入らないに分け、好きと嫌いに分けたからだ」

「何故、気に入らない人間と、嫌いな人間が出来るのか？」

「長女と長男の嫁は、氣質が真反対になり、長男と長女婿も、氣質が真反対になるからだ。

二男も二女婿も、同じ原理であり、二女も二男の嫁も、同じ原理だからだ」

「何故、同じ魂なのに、氣質が真反対になるのか？」

「お互いが前世の姿を確認し、確信しなかったために、お互いの性格と人生を、入れ替えと組み替えて、親の心のあり方を、確信しなかったのだ。

母親の前世の人生を嫁が現し、

父親の前世の人生を息子が現し

嫁の前世の人生を母親が現し、

婿の前世の人生を父親が現し

長女の前世の人生を長男の嫁が現し、

長男の前世の人生を長女婿が現し

長女婿の前世の人生を長男が現し

長男嫁の前世の人生を長女が現し、お互いが悟りの里帰りをしたのだ」

「前世の娘を兄弟と同じ魂の人に、育ててもらい嫁として出迎え、前世の嫁を娘として、

預かり育てさせてもらい、兄弟と同じ魂の処に、里帰りさせるといふ訳か」

「だから娘は先祖の里へ里帰りして『お帰り下さい！』と丁重に送り出し、嫁は先祖の魂の里帰りさせて『お帰りのさい！』と、快く出迎える結魂なのだ」

「それが魂の神が言われた、先祖同士が結ばれているから、子供達が結婚するのか」

「人間は生まれ変わる時に、お互いの性格と人生を、入れ替えと組み替えして、自分という本来の心を思い出し、誠の心のあり方を確かめたために、前世で出会った人と再会をし、前世の己を許し、前世の己を愛することを、神の前で誓ったのだ。そして、前世の両親に再会し、前世の配偶者と出会い、前世の子供と孫と再会するために、人間界へ戻ったのだ」

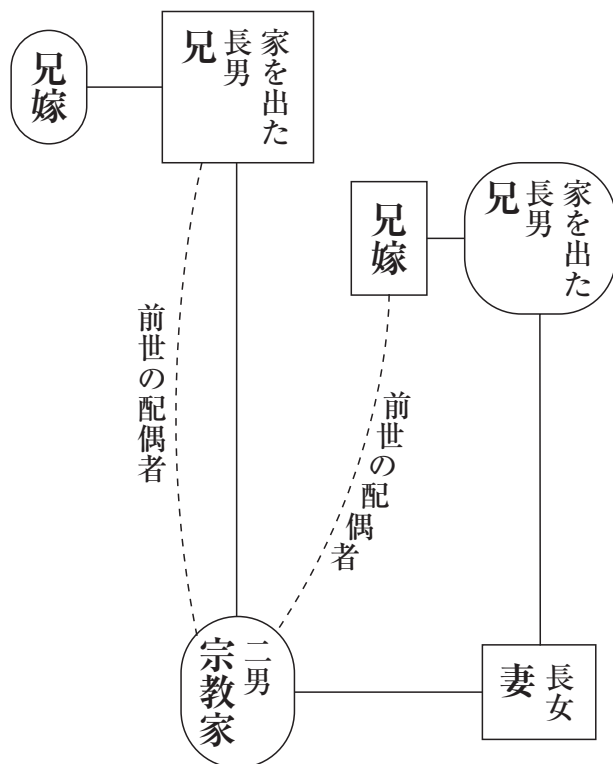
「私の前世の配偶者とは誰なのか？」

「身近な存在ではお前の配偶者は兄であり、妻の兄嫁だ！」

「妻の兄嫁は分かるが、兄は男ではないか？」

「まだお前は勘違いをしている。魂は男と女の性別の問題ではなく、全てが悟りのための組み替えと入れ替えだ。人間は姿や形が同じでなければ、その人間ではないと思っているから、心を捕らわれ惑わされるのだ」

宗教家にとって前世の配偶者は色々な人達がありますが身近な人では、宗教家の兄と奥さんの兄嫁になります。



「……………」

宗教家は「心を捕らわれ……」を聞いて「ハッ！」とした。時の神が若返っているのではないか。何時からだろう。飲んだくれにそっくりな顔をしていたが、ここの世界に来て、初めて出会った威厳と尊厳をただよわせた神に、似てきたような気がする。何故、急に若くなったのだろうか？ 不思議でならない。人間は年を重ねる毎に年老いるのだが、

「時の神が若くなっている！」

「そうかな！」

「確かに初めて出会った時は、神様に見えなかった。町の片隅の何処でもいるような、浮浪者に見えたが、今では威厳と尊厳が漂う神に見えるが」

「神の世界には時は存在しないからな！ 人間も同じだ。ここの世界と同じように、体験をするのに丁度良い方法が、同時に起きているのだ。私が若く見えるようになったのは、お前の心の中に“悟光”が差し始めたからだ。自分自身をも信じていなかった時は、悟光が差した悪婆を、まともに見ることが出来ず、神に対しても『こうあるべきだ！』だという固定観念があり、色メガネで物事を判断していた。だが、今は誠の真意が分かり始めてきたから、今なら悟光が差した悪婆も、見ることが出来るだろう」

「私が自分を信じていなかったって？ 私は自分を信じていたから、宗教の位の最高位まで上ったのだ」

とは言ったものの宗教家は、それ以上言葉が出なかった。

「それは、ただ外に向かった陽徳だ。そのために人間界に争い事を、残してきてしまったが、お前が内なる神を信ずるようになり、ここもそこもあそこも全てが、一つに帰ることのでき始めたからだ。これが、

我が前世は我が配偶者になり

我が前世は我が親になり

我が前世は我が兄弟になり

我が前世は我が配偶者の親になり

我が前世は我が子になり

我が前世は我が子の配偶者になり

我が前世は我が叔父や叔母になり

我が前世は我が甥や姪になり

我が子は我が親なり

我が親は我が子なり

我が子は我が兄弟なり

我が兄弟は我が子なり

我以外が我であり

我以外の道が我が道であり

我以外が我が姿であり

我以外が我が鏡であり

我以外が我が悟りの道であり

我が兄は我が子なり

我が子は我が兄なり

我が子の嫁は我が兄嫁であり

我が兄嫁は子の嫁なり

我が兄は我が子の父親なり

我が兄嫁は我が子の母親なり

と言うように、ここもそこもあそこも、一つになって同時進行しているのだ」

「変えることが出来た！」

宗教家はようやく『変える！』ことが出来た。『変えた！』まではいいが、心眼が開き始めた。人は人間界に戻るとき、自分の前世を配偶者や兄弟やその配偶者に与え、御鏡として前世を映し出し、みずからが時の中で悟ることを、神の前で誓った。父親と善婆の前世は兄嫁や悪婆であり、兄嫁や悪婆の前世は、父親と善婆と言うように、お互いがお互いの前世を、入れ替へと組み替えをして、お互いが悟り、前世で犯した罪を繰り返さず、全てを許し全てを愛することを目的にしている。

3 同時進行

「前世も現世も来世もなく、同時に生きている。人間が全てを許し全てを愛するに、一番ふさわしく、悟りを開くために『丁度いい時！』を人間界に与えた。これが神の約束で、誰ひとりとして、悟りを開くことが出来ないことはない」

「だが何故、人間は死ぬまでに、悟りを開くことが出来ないのか？」

「お前は思うか？」

神様はこれから先は宗教家に、みずから気づくように考えさせた。

「私は人間界での修行は徳を磨き、兄弟姉妹は仲良く助け合い、友はお互い信じ合い、子供は親孝行をして親の恩に報い、年寄りには優しく接し、先祖のお陰で今があるのだから、御霊祀りや先祖供養を真剣にし、法律や規則を守り、道徳によって人間的な生き方を教えることにより、社会の秩序が保たれ、慈悲や愛を教え広めることが、幸せになれる道だと

思っていたが、この世界に来て親孝行でもなく、御霊祀りや先祖供養でもないことが、何となくだが分かり始めた」

「それは反省であって、人間の進化でもなく進歩でもない」

「ああ！ それは分かっている。だが自分自身が納得できないから、言わせてもらいたい。私と同様に人間界では、いまだに勘違いをしている。この世界では『前世の自分』を選び、許し愛することを基準にしているが、人間界は正しいか、間違っているかを、真剣に討論したり議論している。『好きと嫌い』『気に入ると気に入らない』『出来が良いと悪い』『善人と悪人』『親孝行者と親不孝者』『誰の意見が正しいか間違っているか』を審議して、差別していることが現実が多いからだ。結局はお互いが対立して、争いで勝つことしか考えていない」

「全ては同時に起きていて、争いは対極という相手を作る対象物が必要となり、勝ちと負けで、勝った方が負けた方を見下すだけだ。見下せば怨みが残り、前世の自分を許すことにならない」

「全てが同時に起きると言われるが、争いが起きない方法があるのか？」

「前世の己の姿形を、気に入らないと嫌いだと、差別しているからだ」

「争いの元は我が心にありと言うことか？」

「嫌えば嫌った人と同じ人間を近づけるだけだ。無視すれば無視する人と同じ人間が教えてくれる。だからその人間に感謝することと同時に、己の心の引力に感謝すればよい」

「私が兄を無視したから、飲んだくれの弟子が近づき、兄嫁を嫌ったから、妻の兄夫婦と出会ったのか。それが『虫の知らせ』という偶然の一致でなく、必然的な一致の出会いという訳か？」

「これが同時進行なのだ。無視する事や憎しみが心にあるから引き寄せ、心の引力で確神する神との約束の時なのだ。人間には時間として感じられるが、全て『瞬間の言霊！』が選んでいるのだ」

「誰でも言霊の力を利用しているのか？」

宗教家も言霊のことは、常々講話の中で話していた。言霊には先祖の魂が宿っていて、潜在意識や心の想念と同様に霊力がある。それはその人に先祖の思いが託され、無意識の内に働き導いている。だが悪いことをした先祖がいれば、何代も言霊の中に入り込み、怨念や因縁で崇られ、霊障で苦しめられる。

霊障の人は頭の中の誰かに命令され『人を殺せ！』とか、信号待ちしていると『進め！

進め！』と赤信号なのに急ぎ立てられたり、『死にたい！』と口走ったり、急に自分でも分からない行動を取るようになり、悪霊に取り憑かれたように、自分の意志に反しての行動を取ってしまう。最近の少年犯罪は、意志や思考を第三者に、魂を奪われたように、二重人格や三重人格者のような傾向の事件が多く見られる。だから清く正しい思いで、言葉を使わなければ、言霊が悪霊に占領されるから、怖いものだと言われている。

「利用ではなく、瞬間に選ぶことだけだ」

「瞬間に選ぶ？」

「ああそうだ！ 過去でもなく、現在でもなく、未来でもなく瞬間だけだ」

「訳が分からない」

「前世も現世も来世でもなく、瞬間の継続だけだ」

「余計に分からない」

「瞬間だけが人生だ」

「人生は瞬間だけなのか？」

「ああ！ 瞬間だけだ」

「人間はイヤにあっけない人生だなあ！」

「人間は瞬間を秒間にし、秒間を分間に延ばし、分間を時間の単位に変え、時間を日間の期間に延長し、日間を週間の一区切りにし、週間を月間の一単位にし、月間を年間の一回りにし、年間を人生という一生にした。だが瞬間を継続として、一生という人生に、積み重ねただけだ」

「瞬間が秒間に、秒間が分間に、分間が時間に、時間が日間に、日間が週間に、週間が月間に、月間が年間に、年間が一生と言う人生か。よく考えたものだアハハハハ」

「確かによく考えたものだ。だがよく考えたまでは良かったが、選ばなかったから、偶然の一致にしか思えないのだ。全てが必然的な一致に物事が運ばれ、全てが同時に同じ方向に進行しているのだ」

「同じ方向とは何だ？ 人生は後戻りできない、一方通行みたいなものか？」

「過去は未来で未来は過去、前世は来世で来世は前世である」

「何がなんだかさっぱり分からん」

「お前は兄と上の息子と、同じ魂だと言うことは分かるな！」

「ああ！ 何度も聞いた。ああそうか！ 分かった。兄は息子の前世の人生で、息子の来世の人生は兄だと言うことか。その事が本当なら、悪婆と善婆や父親と兄嫁が、五歳で亡

くなくなった娘の前世で、娘の来世が、悪婆や善婆と父親や兄嫁と言うことになる」

「それが同時進行なのだ」

「と言うことは、私も前世と現世と来世の体験を、同時に“ここ”と“そこ”と“あそこ”に分けて存在しているのか。私が周りの人から嫌われた悪婆の存在、誰からも好かれた善婆の存在、長男の嫁として嫁いだが、離婚した先妻の兄嫁と、後妻の兄嫁の存在、妻の母親とその実家から追い出された弟嫁の存在、実家から追い出された妻の兄の存在、嫁いだ娘の婿とその母親の存在、五歳で亡くなった娘の存在と言うように、ことごとくあそこに、分けて存在しているが、全てはここから始まり、そことあそここの前世の自分の姿と人生を許し愛し感謝し、全ての魂の一つにするために、人間界に戻っているのか」

「よく分かったな！ 人間は同時に存在している。ここの世界では全てが一つなのだが、人間界では二つに分かれた。人間が悟りを開くために、一つの魂を二つの魂に分け、二つから四つに分け、本来の自分の姿を相手に与え、見させてもらい確神するために『丁度いい時！』を選んだ」

「人間は何度も生まれ変わっている。と言うことか？」

「ああ何十回でも何百回でも、悟りを開くまで同じことを、繰り返されるであろう。現世

の己をこことして主役を演じ、前世と来世をそことあそこの脇役にし、悟りの人生のドラマを演出し創造して、偽りの愛ではなく誠の愛、偽りの優しさではなく、誠の優しさを確神するためと、みずからを変える誠の勇気を思い出すために、ここの世界から、人間界の時の中に戻されるであろう」

「人間は全てを知っている。人間は全てを思い出すために生まれてくる。人間は前世と現世と来世が、同時に瞬間に存在し、前世の己の姿と人生を相手に与え、許し愛するために生まれ変わっている」

「そうだ。だから来世に向かっているはずなのだが、全てを許し全てを愛さないから、未来に向かっているはずが、前世に向かっている。進化しているように見えるが、一番嫌いな人は前世の己の姿と確認し、その人を許す心を持たないから退化している」

「私も父親も悪婆も善婆も兄嫁、妻の母親と兄も全てが、一つの魂だったが、”ここ”と”そこ”と”あそこ”に分け隔てたために、一つに帰ることが、出来なくなってしまうたと言う訳か。人間は姿や形は見分ける区別だけであって『好きと嫌い』や『気に入ると気に入らない』の差別で物事の判断をしたために、むやみに人口を増やし、争いを起こし戦争になって、人口の調節をしているだけなのか」

「飲んでくれも同じだ。お前が家を出た兄を思い出すために、お前自身が『心の引力』で引き寄せ、確認したかったのだが、優しさと親孝行という偽りの愛で、兄を無視したから、教えるために近づいたのだ」

「分かる！　飲んでくれの弟子もそうだが、姿形は違えども妻の兄嫁も、魂の結びとして『結魂』し『心の引力』で前世の再会をし、確信することを目的にしたのだから、気づき感謝すれば良かったのだが、気づかず感謝もなく、ただ憎しみで思い続けたから、幼く娘が亡くなった。全ては『選ぶこと！』『変えること！』『分かった！』を、鮮明に思い出すための出会いだった」

「全ては時の中で、同時進行しているのだ。兄と別れたから飲んでくれに会おう。これは『憎しんだから憎しみが近づく』と言う体験を求めた結果であり、全てが同時に起きている。それは心の中に『瞬間に選ぶ！』を確信した。お前は瞬間に『兄は親を捨てた！』と選択したから、秒間から分間になり、時間、日間、月間と言う時を経て、飲んでくれと再会したのだ」

「私が兄に対して瞬間に思ったことを、時が解決してくれたという訳か？」

「いい解釈だ。その思い方が人間界にとって必要だ。人間界ではこの世界と違い、いま

瞬間に思ったことが、人によって異なるが、数分後や三日後や、一ヶ月後や三ヶ月後、一年後や五年後に、解決してくれる」

「私は今までは、このような考え方にはならなかった。今までなら、何故このような飲んだくれが近づいてきたのか。兄も兄なら飲んだくれも飲んだくれだ。よりによって近づく人間は、碌でもない者ばかりだと思っていた。『どんな予言や予告でも、全て思い通りになる』ということを、私自身が成功者として、常々言い続けていたが」

「お前は心の活用方法を知っていたが、

我が選びし我が友は、我が前世の友なり、我が友において我が前世を見る

我が選びし友、我が心にあり、我が姿は我が友にあり

我友として選びし友、我に与えし悟りの友

ただ選んでないことを選んでいたと、気づくだけだったのだ」

「誰でも全ての出会いは、偶然の一致ではなく、必然的な出会いになっていて、出会いに感謝すれば、犯罪に発展しないで済むという訳か？　だが実際には犯罪ではなく、気づきの道具として、みずからが選んでいたのだが、気づかずには憎しみや怨みで、人を差別という判断を瞬間に思ったから、同じ人間を心の引力で引き寄せ、確認していただけというこ

とだな」

「ああそうだ。よく分かったな！ 人間はみずから思ったことを、確認したがつていから、出会う約束をしていたのだ。お前は飲んだくれと、いつ出会ったか覚えているか？」

「確か父親の代から使えていたお抱え運転手が、定年過ぎても乗務してもらっていたが、目が不自由になり、とっさの判断が出来ないからと言う理由で、急に退職届が出されたので、代わりの運転手が見つかるまで、少しの間、タクシーを利用してゐる時に出会ったな」

「そのお抱え運転手は、なぜ急に辞めたのかな？」

「ああそうか！ 分かった。妻の兄夫婦を追い出した直後だった。あの頃は妻の母親が病んでいて、妻が看病に行くたびに、お抱え運転手に乗務させていた」

「同時に起きている」

「そうだな。普通なら辞職しても、すぐに運転手が見つかるはずなのに、その時は何故か募集しても、なかなか見つからなかったの、安全運転ができる専属のタクシー乗務員を頼んでいた。ある日いつものように、妻を母親の看病に行かせるために、専属の運転手を

呼んだが、別の運転手が来たので『いつもの運転手はどうしたのか?』と尋ねたなら『その人なら昨日で退職して実家に戻った』と言うので、仕方なくそのタクシーに乗って行かせた。後で人柄を聞いてみたなら、妻は『新しい運転手は今日入ったばかりで、冗談を言つては、おもしろい話で笑わせてくれたので、行き帰り束の間であつたが、常日頃の重い心が安らぎました』と言うので、タクシー会社に頼んで、その運転手を雇用したのだ。それがこの世界に一緒に来た飲んだくれだ」

「素晴らしい出会いだな。アハハハハ」

「その時はそうは思えなかった。「泣きつ面に蜂!」とは、良く言つたもんだと思つた。今にして思えば、当然の出会いだと気づいたが」

「何故、当然の出会いなのか?」

「兄と妻と飲んだくれが、同じ魂だと分かつたからだ。あの時、妻の言葉を信用しなければ良かったと、当時は思つたが、今は『丁度いい出会い!』だった、という思いに変わった」

「まだ他には?」

「兄は父親に反発して出ていったが、飲んだくれは私が妻の兄夫婦を追い出したように、

親と兄弟の姉と妹達に、追い出されて勘当の身になり、立場は違えども、親に縁がない長男という同じ境遇になっていて、食べる好みも同じで、兄を思い出すために出会った」

「まだあるはずだ」

「まだある？」

「妻の母親が病み始めたのはいつ頃だ」

「亡くなる七年前になるかな。そして五歳で亡くなった娘が、生まれる二年前だったな。

その頃はまだ妻の兄夫婦とも、仲良く母親の看病をしていたのだが」

「その頃に、お前の兄の子供が亡くなったのだ。それが魂の気づきなのだ」

「同時進行か。生まれて間もなく亡くなった兄の息子は、私の魂の分け霊で、五歳で亡くなった娘とも同じ魂で、妻の兄とも同じ魂で、妻の母親とも同じだ。妻の母が犯した罪を罪と思わず、氣遣うと言うことは進化ではなく、過去の因果に戻っていることを、氣づく道具だったのか」

「お前が縁を切らなければ、同時にこのような不幸が起きずに済んだはずだ」

「では兄が離婚した頃に、私の娘が亡くなったと言うことになるのか。納得するために兄夫婦の離婚が先か、娘の死が先なのか聞きたい」

「娘や善婆や父親が言ったことを、思い出せばよい」

「分かった！ 対象物は因果になっている。原因がなければ結果もない。結果がなければ原因もない。原因がないと言うことは、因果の同時進行もない。因果の同時進行もなければ、魂は一つに帰ることが出来る。と言うことは、兄夫婦の離婚の方が、先と言うことになる」

「素晴らしい！ 上出来だ！ 人間は不幸という結果を体験する前に、原因となる結果を、体験している。その原因は同時に、そことあそこに分け隔て、差別した体験を確認したかったための結果だが、それ以上でもそれ以下でもない」

「みずからが種を蒔き、みずからが刈り取っているのか。父親も兄嫁もみずからであり、悪婆も善婆もみずからであり、妻の母と兄もみずからであり、ことごとそことあそこに分け隔て差別し『好きと嫌い！』『氣に入ると氣に入らない！』の原因を造り出したために、娘が結果を出したのか」

「まだ他にもある。因果は結果が出た場合だけではない」

「分かる。息子が嫁に縁がないことや、離婚寸前の娘夫婦に、子供が出来ない結果のことではないか？ その事も脳裏から離れなかった」

「縁がなかったり子供が授からないのは、何故だか分かるか？」

「何となくだが分かる。妻の母親が実家を継いだ弟嫁を追い出し、妻を追い出された弟が悲しんで亡くなったために、前世の父と娘であった下の弟嫁の存在が無く亡くなった。家を追ひ出された兄嫁は、下の弟にとって、前世の母と息子で、前世の母の存在がないから、下の弟は精神病院に入り、亡くなったと同じように、私の心の中に兄夫婦の存在が、無かったからだと思う。兄夫婦の存在が無いと言うことは、私達の存在も無いと言うことになる。存在が無ければ、孫の存在も無いから生まれない。必要で有るとか、大切であるか無いかの問題ではなく、心に在るか無いかの存在ではないのか？」

「ああそうだ！」

「それを飲んだくれが教えるために私に近づいた。ようやく飲んだくれが御殿をもらった意味が分かってきた。飲んだくれは私の対象物であり、私の兄の前世の姿であったことを教えるために、私の魂が近づけた。私の位は飲んだくれであり、飲んだくれの位は私である。それを飲んだくれのお陰だと気づかず、自分の勝ち得た結果が、自分の位だと思ひ、はき違えたために、みずからを奈落の底に陥れた。全ては陰陽和合や表裏一体になつていて、その相手のお陰だと気づけば良かった」

「人間は慈悲や道徳を必要とするが、大切なことは自分自身の心に、帰ることだけでよいのだ。自分自身の心に帰れば、全てがここに戻り、全てが一つになれる」

「魂の故郷に帰る！」

「その通り！」

「私の魂の故郷は悪婆や兄嫁と言うことになる。私の前世の母は悪婆と兄嫁になる。私の前世の娘は悪婆と兄嫁になる」

「その二人だけではないことは分かっているな」

「分かっている。自分自身に納得させているだけだ。自分の心に深く刻み込んでいるだけだ。自分が選ばなければならぬ人達だからだ」

宗教家は『選ぶこと！』をためらっている。誰でも人間はそうであるように、宗教家も同じである。確かに意味は分かり納得できるが、実行となると難しい。実際には優しくった母親がいたからであり、母親を悲しませないことだけが、生き甲斐だったからである。だが、現世の母親と前世の母親に対して、心の溝を埋めることは出来ない。何故……。

飲んだくれの家族は、飲んだくれである父親が亡くなっても、子供達夫婦や孫までも幸せに暮らしている。だが兄は先妻との間にできた長男は亡くなり、後妻との間の長女も亡

くなり、甥の二男も兄と同じように離婚、兄たち夫婦は細々と暮らしている。宗教家の家族は親戚までもが入り交じり、遺産相続争いをしている。どこが違うのか？

善婆の娘達は親孝行者で、善婆の言うことを素直によく聞き、優しく慈悲深く信者仲間にも慕われていたが、それぞれ三人とも離婚している。一番上の娘さんの二人の子供は大変な病弱に生まれ、二番目の娘さんの三人の子供は、登校拒否やイジメられたり、非行に走りイジメや恐喝で警察沙汰になり、高校を中退させられたり、一番下の娘さんの子供は、ノイローゼや霊障にかかったりしていたので、善婆の勧めで宗教の道に入り、真剣に修行していた。

それに引き替え悪婆の家は何もなく、悪婆が亡くなっても取り乱す様子もなく、平和に暮らしていた。何故……………。

宗教家として、何かが足りないことがあったのでは……………。宗教は教え導くことによつて、社会に貢献していると思っていたが、実際には宗教の罪も有るのではないのか？まだ分からない。だが、ここの世界は善婆が悪婆になり、悪婆が善婆になっている。

確かに悪婆と善婆が亡くなった後を見れば納得できるが。外に徳を求めたからだと言うことは分かるような気がする。宗教家自身も、みずからの栄光を求めすぎていたことは分

かった。自分の徳は自分の徳ではないと言われたが、誰に自分の財産と徳を、返すのか分からぬ。長男に返すと二男と娘が怒るであろう。二男に返せば長男と娘が怒るであろう。娘に返せば長男と二男が怒るであろう。三人の内で誰かが宗教の道を継いでくれれば良かったが、三人とも継ぐ気がなく、後継者を選ぶことが出来なかった。自分は兄が親と宗教の道を捨てて出ていったので、母親を悲しませなくなかったから、どんなに辛い修行でも我慢が出来たが、

「人間は大自然の中に生きている。大自然の心を知りなさい。その心は雄大で、何一つとして必要でないものはない」

「大自然の心とは？」

「風が吹く。花が咲く。雨が降る。雪が降る。小枝が落ちる。花が散る。芽が吹き出る。

川が流れる。そよ風が吹く。木の葉が舞い散る。木の実が落ちる」

「自然の法則ですか？ 無駄がない。自然に！ ありのままに！」

「全てがあらのままの姿だ！」

「ありのままの姿か！ そうだなあ！ 大自然は語ることもせず、議論することもなし、説明することもない、説教することもなく、教義も持たず、徳も不徳もなく、慈悲も道徳

もない。全てがあらゐのまゐの姿を現している」

「そうだ！ 人間も自然の中に生きている」

「そうだなあ！ 生きているのだなあ！ ああそうか！ 自然に帰ればよいのだな」

「それが運命なのだ！」

「時の神らしからぬことを言われるな」

「運命とは、不変で不易だと言っているだけだ」

「因果応報で、課せられた定めがあると言ふことか？ それならば、天国や地獄もあると言ふことになる。善い行いをした人には天国に行き、悪い行いをした人には、当然の報いとして地獄に墮ちる。清く正しく生きなければ、当然の報いを受け、代々祟りや因縁によつて苦しめられる。私は長年、宗教家として生きてきたが、様々な祟りと因縁や靈障や地縛靈により、苦しめられている人達を救つてきた」

「不変や不易は、常に変わり続けることが定めであり、運命だと言っているのだ」

「常に変わり続けることが運命？」

「大自然は常に不変であり不易であつて、常に變化している。だが人間は運命を、定めのように因果応報だと勘違ひしている。自然の恩恵を無視して、万物の靈長として君臨して

いる。大自然の摂理を無視して、愛と慈悲と道徳を説いている。大自然は生き続けている」

「変化し続けることが、大自然だと言うことなら、人間も変化し続けることが、人間だと言うことになる」

「常に変化し続けることを大自然が、教えてくれるだろう」

宗教家は時の神との対話を中断し、周りを見渡した。この世界は地球と違い、大自然がいきいきと輝いている。人間も動物も植物も共に、争うことなく共存共栄しながら生きている。お互いが寄り添いながら、自由気ままに生きている。小鳥と自由に大空を飛んでいる者達や、並木道を二人で散歩している者達や、動物たちと無邪気に遊び回っている者達が目に入ってくる。宗教家は『のどかでいいなあ!』と呟いた。地球では弱肉強食や栄枯盛衰を繰り返し、お互いが相手を非難したり陥れたりして、自分だけが生き残れる方法を常に企てている。この世界は『自由だ!』何もかもが楽園の中で、のびのびと自由に生きている。

何故、人間はこの世界を忘れ、人間界に戻らなければならないのか? 人間界に戻るより、この世界で永遠に暮らすことは出来ないのか? 何故、お互いが殺し合わなければ

ばいけないのか？ 宗教家は考えても結論は出ない。

宗教家自身は上に立つことだけが目的ではなく、ただひたすらに信者の幸せを祈り、毎日信者を集め、慈悲と道徳や、親孝行と、御霊祀りや先祖供養を、解き明かすことが目的だった。だから地位と名誉を与えられたのだ。だが今は空しさだけが心にあるだけだ。神様や魂の神や時の神との出会いが、宗教家を変えたが、実際の処まだ完全に理解できたわけではない。現に下界では宗教家の家族や親族が、血肉の争いをしているからだ。お互いが憎しみ合い怨み合い、解決するどころか、親子や親戚が、弁護士まで巻き込んで争っている。憎しみや怨みを解決するためには、権利を主張する者達に、全て平等に分け与え、家系が絶えないように、誰でもいいから継いでくれれば良いのだと、眩き、いらだちながら眺めていた。

突然！

「真っ暗闇になった！ どうしたことだ！ 何も見えない。空も自然も人間も、何も見えなくなってしまうた。ここはどこだ！ 時の神は何処にいる」

宗教家は、不安になり、大きな声で怒鳴り、時の神を探した。だが、時の神の姿も形もない、と言うより、何も見ることが出来ない地獄と化した。

4 心魂

「妻は死ぬ！ 子供も死ぬ！ 家族も死ぬ！ 親戚も死ぬ！」

あたり一面真つ暗闇で、何もかも見えない地獄と化した闇夜の何処からともなく、不気味な声が出た。

「お前は誰だ！ 何者だ。何故だ！ 誰か知らないが、私に何の怨みがあるのか？」

宗教家は不安を隠しきれず、あたりを見渡したが、声はすれども、一隅を差す光のかけらもなく、姿すら見えない。

「何をおびえている！」

「何故、姿を見せない！」

「何故、姿が必要か？」

「卑怯ではないか！ 突然、誰とも分からない得体の知れない物体に、何の根拠があるか

知らないが、妻が死ぬだとか、子供も死ぬだとか、言われる筋合いはない。ましてや、それは脅迫ではないか」

「姿や形がある者から言われれば、信ずるといのか」

「信じるか信じないかの問題の前に、相手が確認できることによって、第一段階として人間は安心するのだ。手紙でも電話でも、差出人が書いてあったり、電話の相手に不安を作らないために、始めに名を名乗るのが常識だ。お前は非常識だ」

「常識とは何だ！ 非常識とは何だ！」

「常識とは人間界の秩序だ。お互いが暗黙的に了解している領域だ。その領域を脅かせば恐怖や不安になり、精神を病んだり、ノイローゼや病気になるものだ」

「暗黙的な領域とは何だ！」

「自分にされたくないことを、相手にもしなく言う約束だ」

「自分にされたくないから、相手にもしなく言うことは、相手から良い行為を、返して欲しいからか？」

「そうだ。昔から『情けは人の為ならず！』と言われるように、人に情けをかけてあげることは、決して他人だけの事ではなく、何時かはその善い報いが、巡り廻って自分に返っ

てくる。人に親切にしておけば、必ず良い報いがあると言うことだ」

「自分に返ることが目的なのか？」

「ああそうだ！ 全ては『自分の蒔いた種は、自分で刈り取る！』というように、誰でも自分に返ってくださることを望んでいる。自分に返してもらえんと思うから、相手をいたわることや、情けを施すことができるのだ」

「お前は目は開いているが、心が閉じてしまっている。大自然の精霊が見えなくなってしまっている。大自然の精霊は、みずからの善い報いのために、求めるためではなく、ただ与えるために生きている。だが人間はみずからに対して、善い報いが来ることを目的に生きている。お前も同様にみずからに、善い報いがくることを目的にしたから、心が盲目になり、真つ暗闇に見えてしまったのだ」

「私の心が盲目だと？」

「お前の心次第でどうにでもなる。人間も大自然の中で、共存共栄しているときは、大自然の摂理を守っていた。だが、文明の進化を優先したために、大自然と共にみずからの心までも破壊してしまった。それだけなら良いが、人間社会と同様に、不安を解消する保証として、管理することが動物の保護だと勘違いしている。管理は自然を欺き脅かした償い

だと思っている。管理すれば自然界の過酷な試練を、守ることも見ることも聞くことも出来ない。大自然は自分の力で、元に戻したいと思っている。肉食動物は大自然の中で、自由に草食動物を捕らまえたと思っている。草食動物は大自然の中で、自由に草原を探し子孫を繁栄させている。だが人間は肉食動物が、草食動物を捕らえて食べる姿を拒否し、草食動物が肉食動物に食べられる場面を『可哀想だ!』と思い、草食動物が草原でのんびりと草を食べている風景を『優雅だなあ!』と言う。自然に生えた雑草を取り、自分が植えたい花を丹誠込めて育てている。雑草は『生えたいから!』と思っている。丹誠込めることは『生えて欲しいから!』と願っている。これは良いか悪いかの問題ではなく、自然を破壊し人間界の管理によって、自然を保護することが、いけないと言っているのではなく、全てが悟るための道具だと気づくだけなのだ。自然界は相手がいるからみずからが在る。みずからが在るから相手が在る。自分の立場が在ることは、相手の立場が在ることを悟り、お互い相手から守られていることに、感謝することだけなのだ。肉食動物は草原を絶やさないうために、草食動物を食べるのではなく、草食動物を絶やさないうために在ると言うことに、人間が気づけばよい。お互いが生き続けるためには、過酷な試練を乗り越えるために、立場と順序がある。だがお前はみずからが、選んでないことを選んだために、妻

や子供達までも巻き添いになっている。お前の心の想念が、瞬間に現実の人生を創りだしているのだ。お前は姿や形がない物を卑怯と言うが、心や想念は姿や形はない。無いから言つて心や想念を非常識だと思うか？」

「心は見えないが、その人とその家族の人生を見れば、分かると言うことか？」

「ああ！ 心や想念がその人の人生だ。もう一度この世界に来たときを思い出すがい」

「自分の徳を誰に返すかと言うことか？」

「ああそうだ！ それを選んでなかったから、みずからの心で、ここの世界を真つ暗闇にってしまったのだ」

「肉食動物が草食動物を食べることは、肉食動物の子孫を残すことが目的ではなく、草食動物の子孫を残すことに、大自然の摂理がある。草食動物は自分の子孫を守ってくれる肉食動物に感謝している。肉食動物は草原を守っているように見えるが、実は草食動物を温かく見守っている。直接に守るのではなく、ここがそこを守るために、あそこの立場を守り、ここがあそこのために、そこの立場を守る。目に見えない心や想念を守るためには、ここを直接守ることより、間接的に立場と順序を守ることが、大自然の摂理である。みず

からの徳をみずからが、直接守るのではなく、そこを守れば、あそこが守られることにより、みずからの徳が、そことあそこに生きる」

「もう少しだな！」

「情けは人のためならずとは、相手にかけた情けがみずからに、返ってくることを目的にしているのではなく、そこにかけた情けが廻り廻って、あそこに返ってくることを目的にしている。みずからに情けが返ることではなく、誰かに返ることを目的にしている。みずからに返ることより、第三者に返すことが、こととそことあそこが、一つの魂に帰り、誠の恩返しになる」

「そうだ！ この徳をそこに返す。この徳をあそこに返すことが『みずからが蒔いた種をみずからが刈り取る！』本来の意味だ」

「親が作った罪を子供が受け継ぎ孫が現す。と言うことと同じ事なら、誠の徳は『親が築いた徳を子供が受け継ぎ孫が現す』と言うようにならなければいけないのだが、人間界では、みずからに徳が戻ってくることを望んでいる。みずからに結果が出ることを、求めて行動を取ること自体が、不幸の元だという訳か」

「みずからに結果が出ることを、求めて行動すること自体が、間違いか間違っていないとい

う問題ではない。思い方の選択のことを言っているのだ。思い方や潜在意識は、人間本来の心の中にあり、それは心魂と言う魂となって、受け継がれると言うことなのだ」

「心魂とは何だ！」

「心魂とは、前世と現世と来世や、こことそこあそこを、ひとつに結ぶ力があり、この思いや、想念や言霊が、そことあそこに、伝わりあっているのだが、人間界で『虫の知らせ！』にしか思われていないから、偶然の一致になってしまったのだ。心魂も同じように、この世界ではひとつなのだが、人間界ではふたつになってお互いが悟り、全てを許し全てを愛するために、同時進行しているのだ」

「心魂は全ての人間にもあるというのか？」

「全ての人間の心の中に、心魂は存在する」

「生まれた時点に存在するのか？」

「生まれる前から存在している」

「妊娠した時からか？」

「生命が誕生する前だと思えば間違いない」

「生命が誕生する前に、心魂があったと言われるのか？」

「ああそうだ！ 何かが生まれる前に存在し、結果として形として在るようになる。しかし、存在が在るから宿る。存在がなければ、そこには宿ることはない」

「？」

「美しい花が咲くためには、何が必要かな？」

「分かった！ 花が咲くためには土が必要だ。花の存在は見えないが在るから宿る。大自然は常に変わり続ける、不変や不易だが、摂理によって守られている。その摂理が心魂だと言うことなのか」

「そうだ。存在する全ての物が心魂や精霊である。今、ここに存在しないからと言って、無いと思っているから存在しないのだ。お金も健康も幸せも、全て同じ事なのだ。初めは目に見えないが、思ったことが現実になるのだから心を選ぶこと。在る前に存在を知ることが、生命の宿りとなり、現実存在するのだ。だから無い物はない。だが人間はその存在すら無視して、表面に出た結果だけに対して評価している。自分が情けをかけた相手から、情けが返ってくることをだけを、待ちわびているから、返ってこないと言って『好きと嫌い』『氣に入ると氣に入らない』『親孝行と親不孝者』に分けて差別している」

「自然は相手の徳を延ばすことによって、みずからの徳が在る。土の徳は花が咲くことに

よって引き立つ。肉食動物の徳は、草食動物の繁栄によって、我が子孫に徳が宿る。草食動物の徳は、肉食動物の徳のお陰で数を調整され、草原が食い荒らされて、砂漠化にならずにすむから子々孫々する。親の徳は子供が幸せになることによって引き立つ。そのものを守るためには、直接守ることより、間接的に守ることが『情けは人の為ならず!』の本来の意味になり、ここもそこもあそこも、一つに帰ることになる。親が作った罪を子供が受け継ぎ孫が現すにならず、ここがその幸せを祈れば、あそここの幸せが存在する。ここである私がその兄夫婦の幸せを祈れば、あそこである子供達の幸せが存在する」

「完璧だ! 完全だ!」

「一番嫌いな人が、前世の己だと思えと言われたことや、嫌いな人間に我が子を預けたり、預かっていると同じになる」

「ああそうだ! みずからの魂をそこに預け、その魂をみずからが我が子に預かり、心魂を養い育て、あそこに返すことが、来世のみずからに對しての恩返しとなる。直接にみずからの徳が己に返るより、子孫に返ることが、人間界の幸せなのだ。前世の己を知れば、現世の己が分かり、未知なる来世の己が存在する。全ては現世で前世の、心のあり方を確信すれば、来世の己の姿や人生が確神できる。生きている人生の道で前世を確信すれ

ば、来世の人生をも、確神できるように生まれてきた。だから前世も現世も来世もなく、同時に存在し、全てを許し全てを愛するために生まれてきた」

「同じ事がある。よく『あいつは私の恩を仇で返した!』と言う上司がいるのと同じだ」

「それも同じだ。恩返しは直接に受けた人に返すことより、第三者に返すことが、誠の恩返しなのだ。だから『私に返すより部下に返して上げなさい!』と言う上司が『情けは人の為ならず!』である。恩をみずからに返ることを目的にするから、ねたみや怨みやそねみが沸き起こり、そこもあそこも苦しむのだ」

「心魂の心や想念は、目に見えないが結果として現れる。ここの心魂と、そこの心魂も、あそこの心魂も、全てがひとつになっていて、目には見えないが、確実に現れている事に、気づけば良いという訳か」

「ああそうだ! 自分に返って欲しいと思う心が、みずからが己に怨みを買う。それが結果として、子供や孫に徳を返すことが出来ず、苦しみの体験するのだ。許して欲しいから許すと言うことは相手の圧迫となり、愛して欲しいから、愛すと言うことは、拘束や威圧で脅迫となる。全てを許すとは、全てを許して欲しいからではない。それが人間界と大自然の間に、溝を作った原因なら、魂の故郷には帰ることは出来ない。みずからが築いた徳

が、みずから帰るのではなく、そこであそこに帰ることが、みずからの心の徳だと思うだけでいい。それが心魂であり、大自然の精霊なのだ」

「心魂や大自然の精霊は、みずからの徳を己に返ることより、全ての存在に返すことを望んでいる。好きと嫌いではなく、気に入ると気に入らないではなく、親孝行と親不孝者でもなく、ありのままに生きる。全てが一つに帰ることを望んでいる。マンモスは大自然の精霊となり、どんなに姿形が違えどもありのままに生きている。素晴らしい一生だ。素晴らしい生き方だ」

「そうだな。人間は目に見えない物に対して恐怖を思う。目に見えないことが恐怖なら、相手の心が見えないから相手を恐怖と思う。それは外に向かった徳を求めたから、内に徳を持つて帰れなくなったための疑心だ。疑心はみずからを信じていないからだ。これが結果として不安を現し、不幸を体験するのだ」

「この世界が真つ暗闇の地獄に化したことは、私の思いがまだ不安という存在を、選んだから起きたのか？」

「ああそうだ！ みずからの思いが、妻や子供達を道づれにしたのだ。お前が一番最後に思ったことが同時進行になり、瞬間に人生を変えたのだ。それはここの世界の神の仕業で

もない。みずからの想念が、運命をそうさせたのだ」

「運命は不変であり不易なら、思いを変えれば人生が変わる」

「心魂はお前のありのままの姿を望み、ありのままの想念を待っている。瞬間に選べばよいだけだ」

「分からない。だが私が最後に思ったことは『誰でも良いから家系が絶えないように継いでくれれば良い』と思った」

「ありのままに生きずに、まだ外に徳を求めた心が、占領しているからだ。もう一度思い出すがよい。お前には答えは分かっているはずだが、人間は場所が違えば、思い出すことが違うように、思い出を感じて覚えたり、場所を時の中で覚えているから、真つ暗闇の地獄と化したこの世界で、思い出すことが難しくなってしまったのだ。それは記憶の中に時によって、思い出を記憶していたからだ。人間の心は常に内側にあると信ずればよい。ただ生きた人生を真つ暗闇の中で、みずからの手で変えることが恐いだけだ。だが他人に変えさせられるより、みずからの心で変えることが、誠の勇氣ではないのか？ 説教や教義を説き、位の高い人間や教育者や名士や事業家ほどプライドが高く、みずからの心を変えることに勇氣があるものだ。だが、みずから選んだ人生を、みずから変えなければ

ならない。他人に変えさせられたと思えば、その人間に怒りを覚えるだけだ。魂の故郷に帰りなさい。自分の心に帰りなさい。外の徳より内の徳に帰りなさい。内なる徳を信じなさい。心を変えなさい。心魂を選びなさい」

「分かった！　ようやく選ぶことが出来た。私が兄夫婦を選べば、我が子長男夫婦を選んだことになり、我が子長男夫婦に恩を返すことによって、兄夫婦に恩を返すことになる。

我が子二男夫婦の前世の親は、我が子長男夫婦になる。私が我が子長男夫婦を憎めば、その恩返しで、我が子二男夫婦が憎まれる。私が前世の親である兄夫婦達を、無視して親孝行をしたから、選ぶことを教えるために、娘が幼くして亡くなった。親に受けた恩を兄夫婦を選び、我が子長男夫婦に恩返しをすれば、全てが不幸の同時進行にならずに済んだ」

宗教家は選ぶことが出来た。選んでないことを選んでいたことに気づいた。気づいてみれば簡単なことなのだが、何故気がつかなかったのか。長男夫婦の子供の魂は、父親と母親が先に生まれ、二男夫婦の子供の魂には、兄と兄嫁が先に生まれ、三男夫婦の子供は二男夫婦が先に生まれてくる。

宗教家は兄が勝手に、親を捨てて出ていったと思っていたが、父親が戦死した兄を選んでなかったから、我が子長男を選ぶことがなく、親が兄を捨てたのだと気づいた。宗教家

父

母

嫁

長男

長男

二男

長女

二男

二女

嫁

長男

長女

二男

二女

同じ魂の分け霊

同じ魂の分け霊

同じ魂の分け霊

の父は戦死した兄が、我が子に生まれ変わってきたのだから、兄を祀るより我が子長男を守れば、兄に対しての恩返しになる。そして、我が子長男の嫁は、戦死した兄の嫁になるはずだから、我が子長男の嫁は、戦死した兄嫁の魂の里帰りだと気づき、心から「お帰りなさい！」と出迎えることが恩返しになる。

五歳で亡くなった娘が言ったことを思い出した。と同時に成功の根元と同じ事だと気づいた。常に同じ思考を思い続けると言うことを。それが『選んだ！』『変えた！』『分かった！』と自分自身に言い聞かせ、『我が子は我が親なり、我が親は我が子なり』に通ずるのだから、二男は現世の親を選ぶより、前世の親である兄夫婦を選べば、何も不幸という体験をせずに済んだはず。

前世も現世も来世もなく、誰の魂も不幸な亡くなり方をせず、一つの魂に戻れた。

第四章 道

1 誕生

宗教家は大きな声で言えた。悟ったのだ。途端にこの世界が明るくなった。地獄と化した真つ暗闇の世界から、自力で抜け出したのだ。元のように大自然が見える。飲んだくれの弟子が見える。全てがいきいきと光り輝く、この世界に戻った。だが宗教家以外は、誰もおびえた様子もなく、平然を装っている。何故だろう。

安堵感に浸って、この世界を眺めていると、誰かが着物の裾を引っ張っていることに、気がつき我に返った。ふと目をやると頭の上には、黄金に輝く輪が浮いていて、背中に羽が生えた、十センチ足らずの子供である。その子供は無邪気な顔をし、疑いのない純粹な目をしていたので、真つ暗闇と化した地獄の主のようではないと分かり安心した。

「おじちゃん！ 怖かった！」

宗教家は小人にバカにされたくないと思い、

「怖いことなんかあるか」

「おじちゃん！ わたしはね！ 真っ暗でも見えるのよ。おじちゃんの心の中にも、入ることができるのよ」

「お前は何者だ！」

「みんなはわたしのことを、テンシと呼んでるよ」

「天使や妖精は、人間が勝手に空想を、描いただけではなかったのか？」

「人間界で描くすべての物は、ここの世界にあるのよ！」

「そうなのよ！」

突然、一人の女性が宗教家の前に現れた。なんと美しい姿ではないか。身にまとっている衣は、キラキラ輝き、人間界では想像しがたい美しさである。

「あなたは誰なのですか？」

「私は人間界では、アマテラスオオミカミと言われています」

「あなた様が、かの有名な天照皇大神様なのですか？ 初めてお目にかかります。私は人間界で、宗教を一生の道として、生き抜いてきました。あなた様を主体神として、お祀りしていましたが、現実には存在するとは、思ってもいませんでした。人間は架空の姿を想

像し、神とはこう言う存在だと、教えられてきただけですが、現実にお会いできるなんて、夢にも思っていないでした」

「天使ちゃんが言われたように、人間界にある物は、全てこの世界に在ります。あなたが望むことは全て叶えられます」

「それでは観世音菩薩様も、おいでなのですか？」

「ずっと前から、おじちゃんのすぐ裏にいるよ！」

宗教家は振り向いた。そこにはこれまた美しい美女が、天女の衣みたいな衣服をまといたたずんでいた。

「こりやまた絵にも描けない美しさだ！」

宗教家はあつけにとられている。今までシワくちやの老人、いや失礼！ 男の神様しか会えていないので、一人のチビを除いて、久しぶりに美女の神様に会えて、顔がほころんでいる。

「おじちゃん！ わたしも美人でしょ！」

さっきから美人の神様を目の前にして、緊張している宗教家の前を、あっちに行ったりこっちに来たりと、天使が飛び回っている。

「大きくなったなら、美人になると思うよ」

「おじちゃん！ いいかげんな考えはダメ！ また地獄におちるよ！」

「勘弁してくれ！ 私が悪かった」

宗教家は、どうも子供を小馬鹿にしているようすが、神との悟りの中で、我が子は我が親であり、我が親は我が子であると気づいたから、頭をかき照れながら素直に謝った。天使や美女に気を取られていたので気がつかなかったが、宗教家の立っている景色が以前と違うのに気づいた。ここはあたり一面が花畑である。

「おじちゃん達人間は、悟る場所を与えないと、思い出さなかったり、冷静になれないから、神様の計らいで丁度いい設定をくれたのよ！」

「そうだな！ 人間は何かを思い出すために、場所や時期が必要だ。潜在意識と言われる心の奥深くで眠っている意識が、同じような場面や時期に遭遇すると、突然思い出すことがよくある」

「だから、私と天照神様と観世音様は、人間界にとって身近な存在として現れたのよ！」

「守護神と言われる意味にとってよいのか？」

「わたし達は守護神や守護霊ではないよ」

「どうもハッキリ区別が出来ない」

「おじちゃん！ くべつはないのよ。心の問題なの！」

「心の……。分かった！ ことそこそそこを、ひとつにするために現れた」

「そうよ。わたし達も、魂は一つの存在なのよ」

「一心一体と言うことなのか？」

「そうよ。わたし達は、ことそこそこの魂を、ひとつにするために誕生したのよ」

「お前も魂をひとつにするために、誕生したのか？」

「おじちゃん！ わたしに何か不服でもあるの？」

「そうじゃないが。誕生日が同じだとは、どうしても考えられないと思っただけだ」

「誕生とは全てが同時に生きていることなのよ。一つの魂に帰れば、ここの世界と人間界が、同じになることができるのよ。おじちゃん！ 誕生するということは、どういう意味だか分かるの！」

「先祖や親や兄弟や自分と同じ魂が生まれてくる」

「あたり！ 大切だからよ！ 思い出してほしいからよ！ 忘れてはいけないからよ！

恩を返したいからよ！ 感謝したいからよ！ 縁を結びたいからよ！」

「長男夫婦は親に恩を返したいから、初めに父と母を我が子長男と長女や、長男と二男、長女と二女が授かったり、二男夫婦にとって兄夫婦は、前世の父と母だから、恩を返したいから我が子長男や二男、長女や二女が授かり、三男夫婦にとって二男夫婦は、前世の両親だから、恩を返したために我が子が授かり、お互いが立場と順序を守り、全てを許し全てを愛するために、入れ替えと組み替えして、前世の親に恩を返すために、我が子が誕生する。だから大切な人が生まれてくる。思い出したい人が生まれてくる。忘れてはいけない人が生まれてくる。恩を返したい人が生まれてくる。感謝したい人が生まれてくる。縁を結ぶべき人が生まれてくる」

「あたり！ そうなのよ。前世の嫁に恩を返したいから、娘として預かり育て、前世の娘を忘れてはいけない人に預けて育ててもらい、お互いが魂の里帰りの再会をするまでに、夫婦の契り、親子の契り、兄弟の契り、親戚の契り、三軒両隣の契りの縁を結んで待ち望むのよ！ だから大切な人が里帰りしてくるのよ。思い出したい人が里帰りしてくるのよ。忘れてはいけない人が里帰りしてくるのよ。恩を返したい人が里帰りしてくるのよ。感謝したい人が里帰りしてくるのよ。縁を結びたい人が里帰りしてくるのよ」

「我が子が誕生すると言うことは、前世の我が子を兄弟や親戚ばかりではなく、悟るため

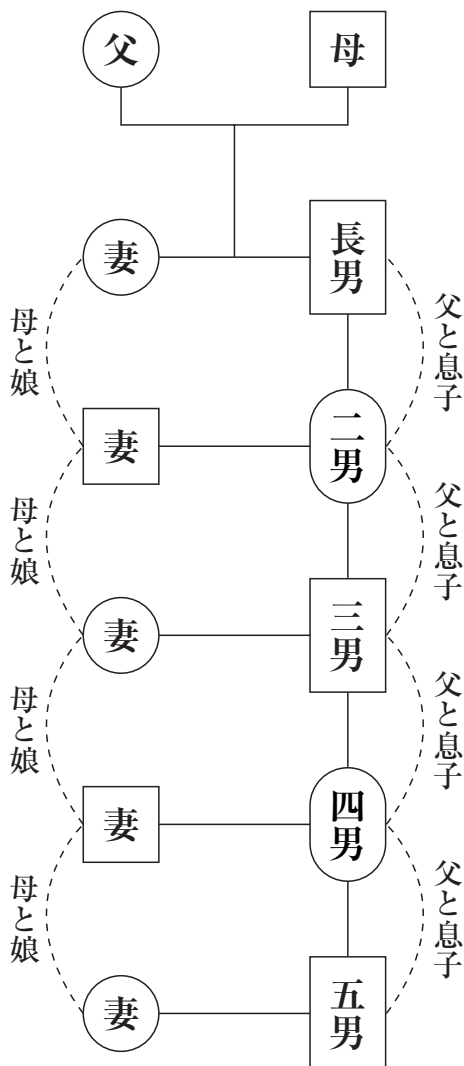
に丁度いい人に預けて育ててもらい、前世の子供に再会するために、大切に思う人の処に預けて育ててもらい、前世の人生を思い出したい人のところへ預けて育ててもらい、前世の自分の姿を忘れてはいけない人のところへ預けて育ててもらい、前世の恩を返したい人のところへ預けて育ててもらい、前世の縁を結ぶべき人のところへ預けて育ててもらうために、ここの世界で悟りを開き、人間界に戻り、前世の自分を許し愛することを目的に、神様と時の中で悟るために約束し、全てに感謝し、全てを愛するために、里帰りさせるのか」

「あたり！ おじちゃんは素晴らしいよ！」

宗教家は照れている。初めて自分の心に素直になれた。だが、大部分の人間は、履き違え足枷をはめ、操り人形のように親孝行をさせている。

「親が長男夫婦を選ぶことが、先祖に対しての恩返しと思えばいいのよ。実際には、先祖は輪廻転生し、誕生してくるのだから、現世の両親と長男夫婦もそうだけど、長男夫婦と二男夫婦、二男夫婦と三男夫婦、三男夫婦と四男夫婦、四男夫婦と五男夫婦同士は、前世では両親と長男夫婦だったのよ。前世の親子を、入れ替えと組み替えをして、お互いに感謝するように誕生したのよ」

長男夫婦、二男夫婦、三男夫婦、四男夫婦は、前世では両親と長男夫婦になります。



「今なら分かる。大部分の人間は勘違いして、長男夫婦以外の子供達に、親孝行させているから、兄弟や夫婦の中に争いやめ事を作り、世間一般で不幸という体験をしている」
「そうよ。不幸はみずからが体験として求めたのだから、分かったから変え、そして選んだと思えば『瞬間の言霊!』になり、心の方針が変えることができるのよ」

「勘違いを気づくだけでよいと言われるのか? 詫びることやざんげは必要なのか?」
「分かったから変えたと、心で思い続ければいいのよ。だから私は長男夫婦を選びましたと、気づくことが詫びることになるのよ。詫びさせたならどうなると思う? おじちゃん」

「詫びると詫びさせるとは、お互いが対象物となり、相手がいなければ成り立たないことになる。詫びることを目的にすれば、勝ちと負けになり、詫びた方に怨みや憎しみとしてしこりが残り、詫びさせた方の子供や孫が、来世で詫びるようになる」

「おじちゃん! そうだよ! 気づかせてもらったことへの感謝なのよ。素晴らしい体験ができたことに感謝すれば、前世の自分を許すことになるのよ。だけどこれは分かること、変えること、選ぶことを、理解できた人間にだけに許されることなのよ」

「自己満足だけではいけないと言う訳か? それでは詫びなければいけない人も、いると

いうことになるが？」

「詫びるのではなく、心から選ぶこと、分かること、変えることを、毎日同じ心で念じ続けなければいけない人もいるのよ。おじちゃんのお母さんのように、母親と前世の娘の縁を断ち切り、実家の弟さんのお嫁さんを追い出した人は、出会って詫びなければ一つに戻ることが出来ないのよ。このような人達は毎日心の中で、念じなければいけないのよ」

「神様は『こうしなければいけない』ということはない』と言われた。それは義務であり、それは悟りではなく、押しつけになってしまおうとも言われたが？」

「人間界にも上下があったり、立場と順序があるのと同じように、この世界にも段階があるの。ただ人間界との違いは、出来が良いとか悪いや、学歴や地位の差別ではなく、悟りを開く度合いによって、段階が決まってくるの。それが人間界で幸福な人と、不幸な人に別れるから、天国と地獄に区別されてしまったの」

「それでは天国と地獄も、あるといわれるのか？」

「ないよ！ 天国と地獄は、勝手に人間が想像したものなの。人間の誕生は全てを許し、全てを愛するために、生まれ変わり、前世の恩を返したいからと言って、人間界に丁度い

い時を選んで戻ってきたのだけど、不幸な人達はそれを復讐に感じられてしまい、生きながらにして、地獄のような体験を味わうから、地獄が存在すると思ってしまったのよ」

「誕生とは我が子に一番大切な人が生まれ、思い出したい人が生まれ、忘れてはいけない人が生まれ、恩を返したい人が生まれ、感謝したい人が生まれ、縁を結びたい人が生まれるのだから、親に受けた恩を、我が子に返すと思いながら育て、立場と順序を守り、前世の親である我が子長男夫婦を選べば、生きながらにして、地獄を味わうことが無い、ということになる」

「そうよ。だから我が子は前世の親の魂が里帰りしたと思い、感謝して慈しみ育て、『親に受けた恩を長男夫婦に返すことが誠の恩返し』だと親自身が思えば、みずからに対しての恩返しになるのよ」

「夫として妻を憎んで、我が子長男の幸せは有り得ない。夫が妻を憎んで、我が子長女の幸せは有り得ない。妻が主人を憎んで、我が子長女の幸せは有り得ない。妻が主人を憎んで、我が子長男の幸せは有り得ない。憎しみは憎んだことにより、怨みの里帰りを隣間に引き寄せて、結果として憎まれるようになる。人間はそれを復讐の里帰りだと、勘違いをして嘆き悲しみ、自分の心の現れだと気づかない」

「そうよ。両親にとって、我が子長男が誕生したということは、娘さんを前世の兄弟姉妹や親戚のところで、預かり育ててもらっていることになるの。おじちゃんの伯父さんが生まれて、戦争で亡くなったけど、赤の他人だと思っている悪婆さんも、生まれていたのよ。伯父さんは戦死しちゃったから、他のところへ嫁いだけど、おじちゃんや伯父さんに、前世の恩を返したいから出会いにきたの。それは前世の我が息子に出会い、恩返しをしたいと、魂が導いたからなの。前世でやり残した体験を、現世で確神し合い、全てを許し全てを愛し、一つの魂に戻りたかったのよ。すべておじちゃん達に、恩返しをするために人間界に戻ってきたのよ」

「それを私達親子は勘違いをして『善婆と悪婆』『出来がいいと出来が悪い』『好きと嫌い』『気に入ると気に入らない』『親孝行と親不孝者！』に差別して、偏った目で見ただから、復讐にしか感じる事が出来なくなってしまったのか。意味は分かるが父親も私も、どのような思いで、行動を取れば良かったのか、教えてくれないか？」

「その前になぜ伯父さんが、戦死をしなければならなかったかの、神意を知ることよ」

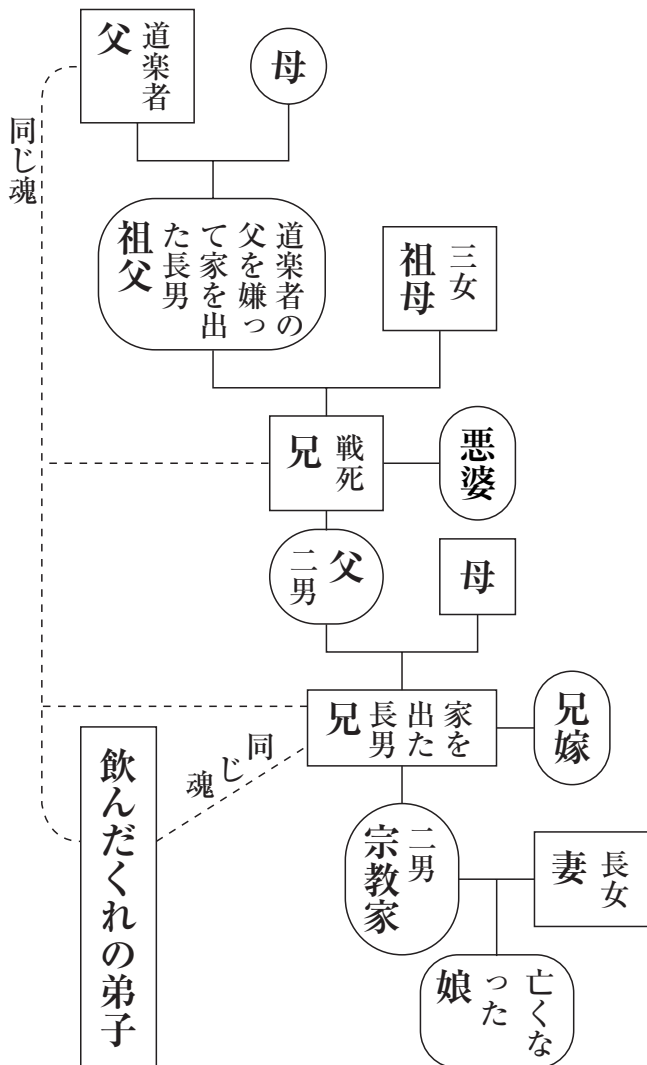
「私の祖父は道楽者の父親を嫌って、家を出た長男だと聞いたことがあるだけで、祖母は三女だと聞いたことがあるが、両方の実家のことは、それ以上あまり知らないから、伯父

が戦死した意味は分らない」

「おじちゃん！ 思い出すのよ。分かったと思ってよ！ 変えたと思ってよ！ 選んだと思つてよ！ おじちゃんなら出来るよ。前世も現世も来世も『今ここ！』に現在生きていると思ひ、すべての人間は、許し合い愛し合うために生まれ変わり、すべての人間は復讐ではなく、恩返しをするために再会したと思ひ、すべての人間は、魂の里帰りだと気づけば、お祖父さんの誕生の神意が分かるよ」

「分かつた！ 私と父親は二男だが、同じ魂の祖父は長男だつた。家を出た祖父にとって、道楽者の父親と戦死した伯父さんは、同じ魂になる。と言うことは、私の父に反発して家を出た、兄とも同じになり、この世界へ一緒に来た、飲んだくれとも同じ魂になる。祖父は道楽者の父親を嫌つて家を捨てたから、存在がないために伯父が戦死した。私の父は、宗教の道を捨て、家を飛び出して出て行つた兄に対して『我が子長男は戦死した兄の魂の分け霊』として、大切な人だから、思い出したい人だから、忘れてはいけない人だから、恩を返したい人だから、縁を結びたい人だから、感謝したい人だから誕生したと思ひ『我が戦死した兄の魂よ！ お帰りなさい』と我が子の誕生に祝福し、兄嫁になる人だった悪婆に對しても、出会えたことに感謝すれば、私の兄は宗教の道を継ぐことができ、私も兄

宗教家の祖父夫婦の代の家系を知ることによって、伯父が戦死した神意が分かります。



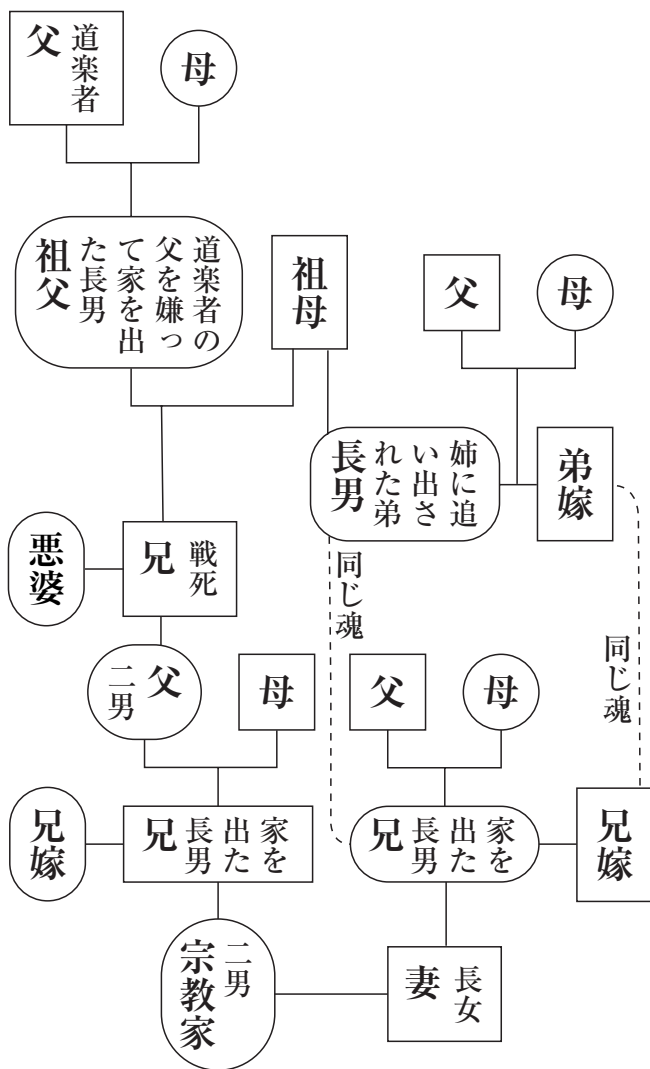
や兄嫁とも縁を切らずに済み、兄の子供も私の娘も幼く亡くならずすんだ。それを気がつかなかったから、気づき理解し合うために、何度でも同じ体験を繰り返す。ここまでは何とか理解できたが、祖母の実家のことは分からない」

「今のおじちゃんなら分かるから、心の中に存在する神を信じて、私は最も幸せな魂があると信じることなの」

「分かった！ 私の妻と祖母は同じ魂になる。祖母達も妻の母親と私達と、同じ体験をしていたと言うことになる」

「そうよ。おじちゃん達にとっては、追い出した奥さんのお兄さん夫婦だったけど、奥さんの母親が取った仕打ちと同じように、お祖母ちゃんにも、実家を継いだ弟さん夫婦がいて、そのお弟さん夫婦をお祖母ちゃんが追い出していたのよ。お祖母ちゃんの時は、追い出された弟さん夫婦だったけど、おじちゃん達にとっては、奥さんのお兄さん夫婦になっただけなの。ただ立場を組み替えと入れ替えをして、今度は生まれ変わる誕生のときに、お兄さん夫婦なら素晴らしい体験が出来ると思ったから『丁度いい時！』を選んで誕生したのよ。それなのに気づかないから、お祖母ちゃんが、実家を継いだ弟さん夫婦を追い出した罪と、道楽者の父親を嫌った罪で、我が子長男を戦死させてしまったの。人間は何度

宗教家にとっては妻の兄夫婦でしたが、祖母にとっては弟夫婦でした。宗教家達と祖母達は、同じことを繰り返していたことに気づきました。



も、不幸という体験を繰り返してしまっているの。同じ体験を繰り返せば復讐に感じられ、これが人間界で俗に言う『祟りと因縁』に見えてしまうのよ」

「自分の一番嫌いな人が前世の己の姿であり、この世界では全てが一つの魂なのだが、人間界では二つになり、この人間が、そことあそこに分け霊し、みずからの前世を教えるために誕生してくる。私にとって前世の姿は、兄嫁と悪婆であり、娘の婿とその母親である。その人達が我が子、長女と二男に大切な人、思い出して欲しい人、忘れてはいけない人、恩を返したい人、縁を結びたい人、感謝すべき人の魂だと気づき、預かり育てさせてもらっていると思い、我が子長男と二女に、その人達と同じ魂の嫁と婿を、里帰りとして出迎え結魂する。全てが丁度いい時を選んで、前世の恩返しをしている。それを『好きと嫌い』『氣に入ると氣に入らない』『親孝行者と親不孝者』に差別し、私の祖母が犯した罪を、私達が繰り返していたと気づかず、復讐に感じてしまい、幼く娘を亡くす不幸という体験をしてしまった。それは親が誕生の意味に気づかなかったからである。誕生とはその者の、立場と順序を悟るまで、何度でも組み替えと入れ替えして、人間界とこの世界を、一つにするために、魂の里帰りを繰り返す」

「そうよ！ 誕生には深い意味があるの。誕生とは生きているうちに、みずからの前世と

現世と来世を確信し、確心と確神することなの。赤ちゃんが授かることは、両親や兄弟や親戚の魂を、預かり育てさせてもらうのだけど、みずからの魂をみずからが大切に育てて、みずからの魂を同じように育ててもらい、出迎え結魂するのよ。二つの魂がこの世界と同様に、一つの魂に帰るために誕生するの」

「私から見れば、妻と同じ魂の人達を、我が子長男に預かり育てさせてもらい、私と同じ魂の長男の嫁が、時は違うけど同時に生まれていると思い、立場と順序を守れば、前世の母親である兄嫁が、我が子長男の嫁として里帰りするはずだった。全てを許し全てを愛することに気づけば魂が一つになれ、孫に私と妻の分け霊が誕生した」

「そうよ。それが慈悲、愛、道徳で人間界の道なの」

「我が子が誕生することは前世の人生で、立場と順序を無視して親孝行したことを、分かったから変えたと気づき、我が子長男夫婦を選んだ、と思うための神意があり、これが慈悲、愛、道徳になる」

「そうだよ！ それが人間界の平等なのよ！ それが愛なのよ！」

「我が子が授かるのではなく、神の子が我が子として戻り、神の子が我が子の配偶者に戻ってくる。我が子は我が親なり、我が親は我が子なり、我が子は我が先祖なり、我が先祖

は我が子なり。だから、先祖は亡くなるのではなく、神の子として輪廻転生して、自分たちの犯した過ちを悟り、神様と丁度いい時を選ぶことを、約束し生まれ変わってくる。だが、人間界では親孝行とは、親に孝行させるために、育てることを目的にしてみましたから、不幸な体験ばかり繰り返してしまっている。子供は育つ段階で、親に受けた憎しみや苦しみを、復讐だと思い続け、その子供が親になったとき、仕返しとして親の代わりに、親と同じ魂の我が子に足かせをはめ復讐する。『親が作った罪を子供が受け継ぎ孫が現す』となる。我が子の誕生には、夫婦の契り、親子の契り、兄弟の契り、親戚の契り、三軒両隣の契りという神意を知っていれば、親が作った罪を子供が受け継ぎ、孫が現す復讐にならなくて済んだはずだ」

「だから魂の神様が言われたように、孫やひ孫を可愛がることより、立場と順序を守りなさいと言われたのよ。お祖父ちゃんやお祖母ちゃんにとって、自分の子供の誕生は、前世の親が授かり、孫の誕生は前世の兄弟やその配偶者が授かり、ひ孫の誕生は、その中で一番出会いたい人達が、生まれ変わってくるの」

「それが大切だから、思い出したいから、忘れてはいけないから、恩を返したいから、感謝したいから、縁を結びたいから、誕生することの神意なのか」

「そうよ。誕生の神意には、ことそこそことあそこを、一つの魂にする御結びの縁があるの。人間が前世の存在と、現世の存在と、来世の存在を、結ぶために十一の縁があつて、その結びに感謝する方法なの。そのどの縁を切つても、ここの世界と同じように成らないのよ。

一つ目に男女の先祖と先祖が前世の恩返しをするために出会いを結ぶ縁

二つ目に婚姻の夫婦の「結魂」の結びの縁

三つ目は親子の縁の父と息子、父と娘、母と息子、母と娘の里帰りする結びの縁

四つ目に兄弟姉妹と義兄弟姉妹が出会い再会の同魂を結ぶ縁

五つ目に夫婦が結ばれ両家が親戚同士として契りを結ぶ縁

六つ目に祖父や祖母とその兄弟姉妹や親戚が孫に生まれ変わる結びの縁

七つ目に祖父と祖母が可愛い孫に配偶者を結ぶ縁

八つ目に土地の御霊である産土と人を結ぶ縁

九つ目にことそこそことあそこをひとつの魂にする三軒両隣を結ぶ縁

十にはことそこそことあそここの魂は出会うとき陰と陽として結ぶ縁

十一には輪廻転生するために神様と約束された時を結ぶ縁。

これらの十一の縁は、人間界で前世と現世と来世、またはことそこそことあそこを、同時

に体験し、結びに感謝し素晴らしい人生を送るために、みずから選んだ道なのよ」

「今までのことを聞いていたから、だいたいのことは分かるが、確心のために神意を教え
てくれないか？」

「これから先は、観世音様が説明する御結びの縁を理解すれば、おじちゃんが言った、水子の祟り、色情の因縁、幼く亡くなったり、大変な病弱に生まれたり、無事に生まれても内臓に欠陥があったり、アトピーやゼンソクや花粉症、登校拒否や非行やイジメ問題、蒸発や家出、兄弟喧嘩や夫婦喧嘩や親子喧嘩、霊症やノイローゼ、不倫や離婚問題、自殺や殺人、結婚の縁がなかったり、子供が出来なかったり、突然死や不治の病や病気が治らなかったり、交通事故や火災、遺産相続争いや倒産など、さまざまの体験や人間界で俗に言われる祟りと因縁の元となっていることが分かってくるよ。だからどんな不幸な体験もおじちゃん達人間が勝手に求めたものなの。我が子が誕生することによって、忘れかけていた十一の御結びの縁を、思い出すことなのよ」

「ああ！ 分かった！ 十一の御結びの縁が、全て分かったとは言えないかも知れないが、大体のことが分かってきた。誕生だけではなく人間界の全ての体験は、良い体験か悪い体験かの問題ではなく、十一の縁が全て結ばれているか、結ばれていないかの、結果だとい

うことだな」

2 御結びの縁

「御結びは人間界の生活の中に、なくてはならない存在なのです。人と人、人と動物、人と自然、人と食べ物、人と地球、人と宇宙、人と神と仏様を結んでいます。まだそのほかにも色々あると思いますが、全てを同時に結んでいます」

「他にも男と女、老人と孫、人と社会、人と自動車、人と娯楽、人と家、親孝行と親不孝者、氣に入ると氣に入らない、好きと嫌い、陰と陽、静と動、明と暗、表と裏、善と悪、美と醜さ、大と小、金持ちと貧乏人、健康と病氣、成功と失敗、生と死、ことごとくあそこ、人と戦争、人と平和、人と災害などもそうではないか？」

「そうです！ 時の神が言われた全てが時の中に含まれ、全てが時の中に存在することと同じで、全てが同時進行しています。結ばれることは、結ばれる前から存在しています。何もない物からは存在しません」

「全てが有るから誕生する。無い物からは誕生しないことは分かる。だが十一の縁のどれか一つだけでも縁がなければ、誕生しないと言うことになるが？」

「誕生はしますが、それはあなた達人間が、一番よく知っていることです。気づいているのですが、何か不幸なことが起きるまで心を変える勇気がなく、ただ過去の思い出に浸っているだけです」

「どうすればよいのか？」

「過去の人生に感謝すればよいのです。全てが感謝なのです」

「分かる。過去に感謝しないから、未来に感謝できない。過去が不幸だと思っているから、未来も不幸になる。前世の性格は一番嫌いな人だと気づき、その人に出会えたことに感謝すれば良い。親が前世の息子と娘を預かり育ててもらい、婿と嫁として里帰りし出会えたことに感謝すれば、現世の息子と娘が、嫁側と婿側から感謝される。父親が前世の母である長男の嫁に、再会できたことに感謝すれば、みずからに感謝することになる。母親も前世の母である長男の嫁に感謝すれば、みずからに感謝することになる」

「そうです！ その通りです。それが御結びの縁です。ここの幸せを祈りたいなら、そことあそこに出会えて、結ばれたことに感謝しなさい」

「こうしなさい。と言われるが、神様はこうしなさいとは言わなかった。むしろそれは押しつけになり義務だとも言われ、ただ『選ぶこと！』とだけだと言われたが？」

「そうです。ですがあなた達人間が、選ぶことを誓うために、私達を誕生させたのです。だから私達はあなた達人間が、望んだことを形に現しただけなのです。あなた達人間が、私達を産んだのです。神様や仏様は、この世界と同じような、素晴らしい体験をするために人間を産み、人間が神様や仏様の世界と同じような、素晴らしい体験をすることを、誓うために私達を産んだのです。だから神の子と同じように、私達を守りなさい！」

「どうも納得がいかない。あなた達が先に産まれたのではないのか？ 人間を守るために始めから、存在していたのではないのか？」

「人間と神様は一体です。神様をここに置き換え、人間をそこに置き換え、私達をあそこに置き換えて、存在を考えてみてください」

「分かった！ 神様を父親に置き換え、長女をそこに置き換え、長男の嫁をあそこに置き換えて考えれば納得できる。父親と長女を一体にするために、前世の娘である長男の嫁が必要になる。父親と長男の嫁を一体にするために、前世で嫁であった長女が必要になる。仏様を母親に置き換えても同じことが言える。神様や仏様を前世にすれば人間が現世にな

り、来世は神の子である、我が子や天使や観世音様や天照神様になる。あなた達は私達の神の子であり、神様や仏様は私達の親である。反対から見れば私達が、神様や仏様として前世であり、神様や仏様が現世の神の子であり、あなた達が来世の孫である。この考え方が真なら素晴らしい体験だ！ 素晴らしい比べる対象物だ！ 素晴らしい世界だ！ 素晴らしい人間界だ！ 素晴らしい仏様の世界だ！ 素晴らしい神様の世界だ！」

「そうです。その通りです。素晴らしい神様と仏様の世界です。神様や仏様は、みずからの体験を、人間にお与えなさったのですから、我が子神の子である人間を信じています。一度信じ切った神様や仏様は、人間界に対して無言であり、無聞であり、無見です。だから、こうしなさいとは言わないのです。この世界は、親が我が子神の子を説教することはないのです。親が神の子を説教すれば、強制的に押しつけて、あやつり人形のようにしてしまい、親自身が悟ることをやめてしまうからです。親は子供から学ぶことによって、この同じ世界にできるのです。我が子は我が親なり、我が親は我が子なり、我が子は我が神の子なりなのです。親が神の子を精一杯守ることなのです。だから『感謝しなさい！』と言うことは、みずからの前世を守り、来世を守ることにあります。あなたは自分を信じず、自分に感謝せず、自分を守らずに不幸にしたいのですか？」

「分かりました。観世音様の言う通りだな。人間がみずからを守るために、義務も強制もないのは当然なことで、相手に従順な素直でなく、ありのままの素直ですな」

「そうです。自分を守るとは、ありのままの姿です。別の言い方をすれば防衛です」

「防衛とは相手が脅かしてきた場合や、防ぎ守ることの意味にとれるが？」

「防衛とは、みずからの前世と現世と来世を守るために、立場と順序を守ることです」

「立場と順序を守ることが、防衛になるのか？」

「人間はこの世界を離れた途端に、一心一体の神様と仏様を求めたのです。人間は神なのに、この世界を離れた途端に不安を創造し、外に神様と仏様を探し求めたのです。内なる神を創造することをやめ、外に神様と仏様を作ってしまったのです。あなた達は明るいところにいるときは、明るいところのことを意識せず、暗いところに行った途端に、明るいところを恋しがると同じで、この世界にいるときは、神様と仏様を意識せず、ありのままの姿だったのですが、神様から離れた途端に、外に神様と仏様を求めたのです。人間誰でも神なのですが、創造することをやめて、形ある神と仏を作ってしまったから、見えないと不安になり、内なる神を捨て、外の形ある神様と仏様を求めてしまったために、不安を作ってしまったのです。この世界が地獄と化したことも、あなたの選ぶことを選

んでなかった不安な心がそうさせ、あなたの心の位が結果として現れたのです」

「分かる！ 不安だから安心したいと思えば、不安を取ることができず不安を体験する。人間は誰でも神なのに、自分を神と思わずに、安心したいために、外に神様と仏様の姿と形を求め、さまよい歩いてしまった。不安の元は見えないと安心できない、心の問題だけである。だが何度でも聞くが立場と順序は、そんなに大切なことか？」

「そうです。親が長男夫婦の立場を守り、長男夫婦は親の恩を我が子に返すことです。二男夫婦は長男夫婦の立場を守り、我が子に恩を返すことです。三男夫婦は二男夫婦の立場を守り、我が子に恩を返すことです。四男夫婦は三男夫婦の立場を守り、我が子に恩を返すことを選ぶことが立場と順序なのです」

「女の子ばかりの家庭や、娘夫婦から見た場合はどうなるのか？」

「長男でも妻が長女なら、長女婿の立場と順序を守ること

長男でも妻が二女なら、二女婿の立場と順序を守ること

長男でも妻が三女なら、三女婿の立場と順序を守ること

長女でも主人が長男なら、長男嫁の立場と順序を守ること

長女でも主人が二男なら、二男嫁の立場と順序を守ること

二男でも妻が長女なら、長女婿の立場と順序を守ること

二男でも妻が二女なら、二女婿の立場と順序を守ること

二男でも妻が三女なら、三女婿の立場と順序を守ること

二女でも主人が長男なら、長男嫁の立場と順序を守ること

二女でも主人が二男なら、二男嫁の立場と順序を守ること

姉でも弟が長男なら、弟の立場と順序を守ること

姉でも妹が長男の嫁なら、長男嫁の立場と順序を守ること

姉でも妹が跡取りなら、妹婿の立場と順序を守ること

養子娘の親でも、婿の親の立場と順序を守ること

養子娘でも主人が長男なら、長男の嫁の立場と順序を守ること

養子娘でも主人が二男なら、二男嫁の立場と順序を守ること

娘の親でも婿が長男なら、長男嫁の親の立場と順序を守ること

娘の親でも婿が二男なら、二男嫁の親の立場と順序を守ること

權威ある嫁の親でも、嫁ぎ先の親の立場を守ることが、立場と順序なのです」

「なるほど！ 納得できる。自分が長男でも妻の実家から見れば、長男だと誇張するべき

ではない。私も二男として生きていたが、妻が長女だから長女婿の立場を守り、妻の実家の兄夫婦を選び立場を守れば、不幸という体験をせずにすんだ」

「あなた達人間は、この立場を維持することだけを、威厳と尊厳だと勘違いしている場合が多いのです。地位と名誉が高ければ高いほど、そことあそこの立場と順序を無視して、地位と権力で物事を判断し、威圧する場合が多いから、争いともめ事を作ってしまったのです」

「それが人間界の不幸だと言う訳か？」

「立場と順序を無視して、親孝行や慈悲や愛を説いても、不幸の元は消え去ることはないのです。親孝行とは親が長男夫婦を選ぶことです。長男夫婦は親の恩を我が子に返すことです。他の兄弟姉妹は親ではなく、長男夫婦を選ぶことが親に対しての恩返しになります、我が子を神の子に返すことになります。ですから親に受けた恩を長男夫婦に返すことが誠の恩返しになり、それが御霊祀りや先祖供養と同じことになります」

「それでは御霊祀りや先祖供養を、するべきではないと言われるのか？」

「先祖とは誰のことを言われるのですか？ 人間は前世の自分を選ばず、一番嫌いな人を前世の自分の姿と思わず、娘と嫁を差別し、好きと嫌いで物事を判断し、気に入ると気に

入らないや、親孝行者と親不孝者を、ことそこあそこを分け隔てたから、一つの魂が二つになり四つの魂になり、何十億の存在になってしまったのです。この世界では、一つの魂なのですが、人間界ではただの二つの魂だけなのです。一つの魂が、もう一つの魂を誕生させただけなのです。それはみずからの姿や性格を、知りたいから存在したのです。だから先祖と言われますが誰も亡くならず、輪廻転生しているだけなのです。ですから先祖とは、子供や孫のことをいい、子々孫々することが祀りと供養です」

「だが人間は御霊祀りや先祖供養をしないと、祟りや因縁が起きる、と聞かされて育てられている」

「あなたは自分を祀ったり、供養することができますか？ 泥棒が自分を捕らえる縄をなうことをしますか？」

「できるわけではない」

「それも立場と順序なのです。自分で自分のお祀りや供養はできないので、相手が必要なのです。この存在は、みずからのお祀りや供養を、相手の存在に与えたのです。自分で自分の位を作ることとはできず、相手がいるから位ができるのです。相手の存在のお陰のみずからの位が、生きるのです」

「分かる。ここに一緒に来た飲んだくれは、みずからの位を相手にあげたから、この世界の位が高く、私はみずからの位をみずからが求めたから、ここの世界の位が低かった。

飲んだくれは勘当され追い出されても、親や兄弟を憎まず、前世の親である我が子長男夫婦を選んだから、親に孝行していた。私は家を出ていった兄夫婦を選ばず、神の子である我が子長男を選ばず、誰でも良いから絶えないように、家系を継いでくれれば良いと思っていたから、家族や親戚に憎しみと、争いを心の中に刻み込ませてしまい、結局、孫ができず絶えてしまう。孫に私達夫婦の魂の分け霊ができない原因は、両方の兄夫婦を選べば、我が子長男を選ぶことができ、結婚することもでき、子々孫々することができた」

「そうです。親が作った罪を子供が受け継ぎ、孫が現してしまったのです。人間は犯罪者は罰せられて当然だと思い、罪のない人が殺されれば、可愛そうだと思う心が、次から次へと犯罪を、繰り返してしまっているのと同じです。犯罪が起きる前に、偽善人が偽善の罪を作っているのです」

「父も言われたが偽善の罪とは何だ！」

「偽善の罪とは親孝行してはいけない人が、親孝行と御霊祀りや先祖供養をすることです。

長男以外が親孝行や御霊祀りや供養をしたり、写真を祀っている。

祀るべきでない人を祀ったり供養していたり、写真を祀っている。

育てられた養父母を祀っていたり、写真を祀っている。

結婚しなかったり、離婚してきた兄弟姉妹を祀っていたり、写真を祀っている。

水子や幼く亡くなった子を祀っていたり、写真を祀っている。

離婚した片親だけ祀っていたり、写真を祀っている。

二男や三男なのに御霊祀りや供養をしたり、写真を祀っている。

細かく言えば切りがないのですが、これらが偽善の罪となり、人間界の不幸という体験を、作ってしまったのです」

「世間一般に言われる不幸の元は、親孝行と先祖供養や祀り方の、勘違いだけだと言われるのか？」

「そうです！ 人間界で薄情だと言われる人でも、薄情ではなく立場と順序を、守っている場合もあるのです」

「よく親は『あいつは育ててやった恩を仇で返した！』とか『あんな薄情者は勘当されて当然だ！』と兄弟が言ったりするが、この世界から見れば、それでもない人がいると言
うのか？」

「人間界の犯罪は『親孝行を奪った者は奪われる!』と言う仕組みがあります」

「それは親孝行を奪った者は、幸せが奪われると、解釈しても良いのか?」

「親孝行とは親が共に、子供を養い育てることです。それが供養という字になります」

「なるほど! 親が夫婦そろって、前世の嫁や婿を、娘と息子として誕生させ、祝福し丁寧に養い育て、前世の娘や息子を、嫁や婿として育ててもらい、出迎えて結魂の契りを結び、子々孫々することが祀りや供養となる訳か」

「娘さんや息子さんは、前世では嫁や婿なのですから、十一の御結びの縁を守りながら、大切に育てて前世の息子さんと娘さんに、出会わせてあげることが、前世の恩返しとなり御霊祀りや供養になります」

「では実際には先祖供養は、誰も亡くなっていないのだから必要なのか?」

「必要があるから習慣として、継続されているのではないのですか?」

「私もそう思っている。人間が生まれ変わるとき、神様の前で『時!』を選んで全てを許し全てを愛することを誓った。それも、ことそこそこを、結ぶために誓った。それが三軒両隣を結ぶことになる。隣とのつながりは、親戚以上の親しみが沸き起こる。その隣の人が亡くなれば、温情として手助けをしてあげる必要がある。三軒両隣の、ことそ

ことあそこの地霊を、一つの魂にする必要があるから、御霊祀りや供養が誕生した」

「そうです！ その通りです。人が誕生する意味と同じことです。隣同士や縁が会って、出会った人達は他人ではなく、前世の兄弟や親戚が、恩を返したいから隣同士として再会し、群れの集団になり、村や町となって結びの輪が広がり、人間界を一つの魂に戻すために出会い、三軒両隣の人達を導く人として、宗教家が誕生したのです」

「それはよく分かる。魂は一つが二つに、分かれただけなのだから、三軒両隣に住んでいる家族は、自分の兄弟や親戚が大切だから、思い出したいから、忘れてはいけないから、恩を返したいから、縁を結びたいから、感謝したいから縁ができた。兄弟や親戚と喧嘩や争いになれば、隣の家族とも喧嘩や争いになるから、その立場と順序を守ることを、導くために宗教が必要になった」

「あなたは変わりましたね！」

「観世音様や、天使ちゃんのお陰です」

「それは違います。あなたが前世の自分に気づいたお陰なのです」

「前世の自分に気づいたお陰だ、と言うことは分かります。だが人間はなかなかそう思えないのです。私は宗教家として生きていたときは、信者仲間に好かれ、誰に会っても感謝

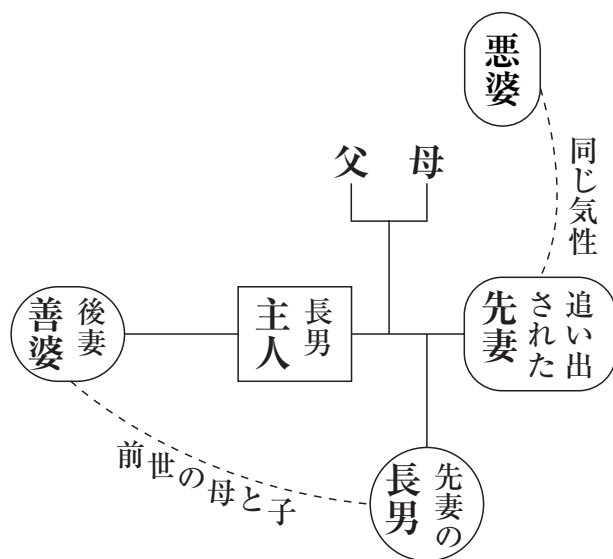
している善婆のお陰だと思い、悪婆はどんな講話を説いても、馬の耳に念仏だと思い邪魔者扱いしていた。だが、実際には悪婆が居なければ善婆の存在もない、善婆は悪婆によって存在があった。善婆と悪婆は他人ではなく、三軒両隣と同じく、前世の恩を返したかったから、善婆が悪婆を心の引力で引き寄せていた」

「善婆さんは出しゃばりだったのです。偽善の罪を犯した、偽善者だったのです」

「そのようだな！ 善婆の主人は長男だが、主人の母親が出来の悪い先妻を、追い出したあとに、善婆が後妻として嫁いだ。先妻と後妻は、性格が真反対になることが事実なら、先妻は悪婆と同じ気性だったことになり、善婆が選ばなければならなかったことは、主人の両親ではなく、先妻と同じ魂の悪婆だと言うことも分かる。善婆にとって追い出された先妻の長男は、前世で実の息子だったのだが、偽善者の主人の母親に孝行を選び、前世の息子を捨ててしまい、自分の生んだ娘達だけを、近づけ親孝行をさせ、偽善者の母親と善婆が共謀したから、主人が若くして亡くなった。親が作った罪を子供が受け継ぎ、孫が現したと言うことは、善婆が偽善の罪の親を選ぶことより、前世の息子である先妻の長男を選び、親に受けた恩を長男夫婦に返す思いで、跡を継がせるようにすれば、先妻に対しての恩返しになり、主人が若くして亡くなることもなかったという訳か？」

後妻にとって先妻の息子は、前世では実の母と子です。

悪婆は先妻の気性を気づかせる為に善婆に近づいたのです。



「そうです。先妻さんの子供さんは、前世では後妻さんの子供なのです。後妻さんの子供は前世では先妻さんの子供さんなのです。それを入れ替えと組み替えにして、親の心のあり方を確心するためなのです」

「だが前世のことも分かるが、現世の子供の方が一番大切ではないのか？ 先妻に男の子がいてもその子供より、親としては我が子の方が、人情として大切ではないのか？」

「我が子が大切だからこそ、親の手から放し、前世の実家に『お帰り下さい！』と、送り出してあげることが、誠の親の役目ではないのですか？ 人間はこの世界を離れた途端に不安になり、一心一体の、神様と仏様を外に求めたことと、同じではないのですか？

目に見えないと不安になる親は、娘を目の届く側に置きたくなるのです」

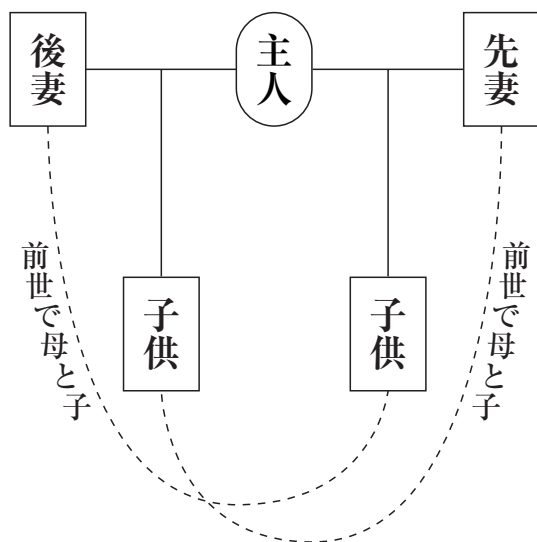
「人間はなぜ我が子を側に置いて、見えないと不安になってしまうのか？」

「選んでないことを選び、親自身が、そのまた親に、従順で素直になるように育てられたために、見過ぎてしまい、言い過ぎてしまい、聞きすぎてしまったからです」

「親に孝行は親に従順な素直になり、見過ぎ、言い過ぎ、聞き過ぎか？ 過ぎたるは猶及ばざるが如しで、見ざる、言わざる、聞かざるになれば良いのか？」

「あなたの言う通りです。見過ぎ、言い過ぎ、聞き過ぎに愛はなく、心の中に情けと慈悲

先妻の子供達は前世では後妻の子供です。後妻の子供は前世では先妻の子供です。それを入れ替えと組み換えにして、親の心のあり方を確
心するのです。



が充満し、対象物に憎しみと怨みを、作ってしまうだけなのです。見過ぎ、言い過ぎ、聞き過ぎは、過去に囚われて、みずからの心を過去に置き去りにし、過去の人生の一本道を、悔やんでいるだけです。過去の人生の一本道を後ろ向きに歩き、嘆き悲しんでいた、後悔の念に浸っていれば、これから素晴らしい体験ができる人生も、過去と同じように嘆き悲しむ一本道を、歩いてしまうのです。過去の体験に感謝しないから、不安を心の中に描いてしまうのです」

「前世の姿と人生を教えてくれる人を憎むと同じように、過去を嘆き悲しんでいる人は、未来も幸せになれない。過去の体験は一本道だが、これから先の人生は、何百何千通りの中の一つの体験を選び、素晴らしい人生を神様や仏様と、共に生きていると思えばよい」
「そうです。人間は創造することをやめて、見えるところに存在を求めたのです。娘さんを幸せにしたいために近くに置き、お嫁さんを創造することをやめ不安を作り、見える娘さんを親の都合の良いあやつり人形にし、母と嫁、父と息子、娘と嫁、父親と嫁の争いを作ってしまったために、前世や過去と同じ苦しみ的一本道を、選んでしまっているのです。神様と仏様を心の中に創造し、選ぶことを誓うために、私達を誕生させたのですが、不安を消すための道具としてしまったのです。人間は神様や仏様と、共に生きているのですが、

外に求め過ぎたために、内なる神や仏が離れてしまったと、思っているだけなのです。心の中に神様と仏様を創造せずに、外に形を求めたから、形がなければ不安になり、見過ぎてしまい、描くことをやめたことと同じで、娘さんを見過ぎ、お嫁さんを創造することを怠ったために、嫁と姑の喧嘩を、引き起こしているのです。不安の代償が形有る物に変化して、娘さんとお嫁さんの争いを、起こしただけなのです。神様や仏様から離れたから、創造することをやめ、過去の教訓に浸って、過去を求めて育てた恩を、娘さんに押し売りにしているから、前世と同じ過ちをしているのです。お嫁さんは前世の娘さんなのに、環境が違うところで育てられ、父親や母親に神様や仏様を、創造することを教えてくれているのですが、神様や仏様を創造することより、目に見える娘さんに、恩を返してもらうことを目的に選んだために、嫁と娘、息子と婿、母と息子、父と息子、父と嫁、母と嫁の争いを、作ってしまったのです」

「人間は誰でも神の子なのだが、前世の人生を覚えてくれる長男夫婦を無視し、娘夫婦や二男や三男夫婦を近づければ、神様や仏様を創造することもできず、外の形ある神様や仏様を、求めすぎ見過ぎたことにより、不安が消えないのか？ 全てはことごとくあそこに分け隔てて、好きと嫌い、気に入ると気に入らないで、物事を判断しているから、長男

夫婦を親不孝者にしてしまったのか」

「そうですね。娘入れば嫁入れず、嫁入れば娘入らず、婿入れば息子入れず、息子入れば婿入らずとは、長男夫婦のために、嫁いだ娘さん夫婦や弟さん夫婦に、立場を守らせることが親の役目なのです。長女が近づけば、同じ魂の長男嫁は、入ることができなくなり、長女婿が入れば長男も入ることができず、二男が近づけば長男嫁は入ることが出来ず、二男嫁が近づけば長男が入ることが出来ず、二女が近づけば長男が入ることが出来ず、二女婿が近づけば長男嫁は入ることが出来なくなるのです。これが化して、夫婦喧嘩や親子喧嘩になったり、怪我や事故、不倫や離婚、突然死や蒸発、アトピーやゼンソクの元になってしまふのです。元はささいな立場と順序を無視して、親に孝行の積み重ねが、あなたの言われた人間界の不幸という体験になることに気づくことです」

「私も同じことをしていた。二男入れば兄嫁入れず、兄嫁入れば二男入らず、長女婿入れば長男入れず、長男入れば長女婿入らずになり、親の目の届くところにいて安心させていたが、安心させていたことは、不安にさせたくないと思う心が、我が身の不安を作った。出来がよいと言われることは、出来が悪いという対象物があるからであり、飲んだくれは出来が悪いと思われていたから、出来の良い妻や子供達を作った。善婆は出来が良いと言

われるには、陰に出来の悪い人がいたことを、知るべきだった。それが悪婆と同じ先妻だった。善婆は先妻のことを教えるために近づいた悪婆に、感謝すれば良かった」

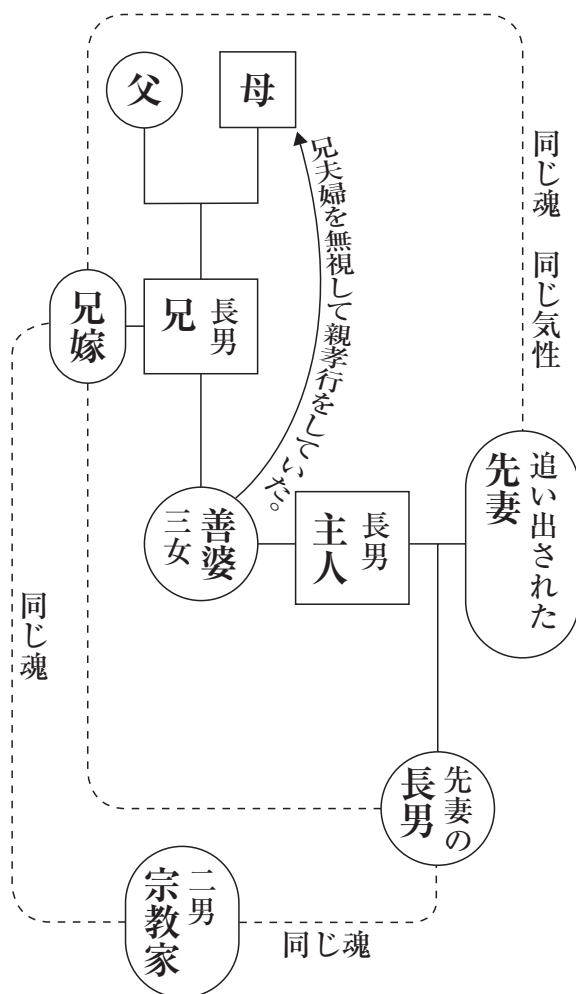
「その通りです。善婆さんは三女として誕生して、長男のところへ後妻さんとして、嫁いなのですが、実家を継いだお兄さん夫婦を無視して、親に孝行をしていたのです」

「それは初耳だ」

「実家を継いだお兄さん夫婦は長男夫婦ですが、母親とお嫁さんの折り合いが悪いので、毎日のように母親の愚痴を聞いてあげていたから、後妻さんとして嫁ぐとき、同じ魂の兄嫁の存在がなく無視し、優しいとは人が憂いになることを気づくために、丁度良い悟る里帰りを選んだのですが、前世の姿と人生を教えてください、先妻さんまでも無視し、同じ魂の先妻さんの息子さんの存在まで、無視してしまったのです。実際には先妻さんの息子さんは、前世では善婆さんの兄嫁の息子さんだったのです。善婆さんが母親の愚痴を聞かずに、兄嫁さんと仲良くしていれば、後妻として嫁いでも、先妻さんの息子さんを、無視することはなかったのです」

「この世界の魂の原理を聞いてなかったなら、赤の他人だと思っている先妻の長男が、善婆の実家の兄嫁の子供だったとは、信じないだろうな。それなら善婆と私は同じ魂だか

善婆は兄夫婦を無視して、親孝行をしていたので嫁いだ先の先妻が同じ気性の人だと気づかなかったから、子供や孫が罪を背負ったのです。善婆にとって先妻の息子は、前世では実家の兄嫁の子でした。



ら、善婆の実家の兄嫁と私も同じ魂になる。それと先妻の長男とも同じ魂になる。そして宗教の道を捨てて出ていった兄の嫁や、その幼く亡くなった兄の子供や、妻の実家を出ていった兄とも同じ魂になる。そうして見ると私は、長男でも親に縁がない人生や、娘や甥のように、親の偽善の罪で幼く亡くなったり、反対に偽善の罪を作る出しゃばり人生や、悪婆みたいな嫌われ者の人生があり、何と不思議な出会いだなあ」

「同じ魂はことそことあそこに存在し、前世も現世も来世も共に人間界に存在し、全ての人生を同時に知ることができ、立場と順序を犯せば、人間界の秩序が守られないことも気づくのです」

「娘入れば嫁入らず、嫁入れば娘入らずなら、娘が母親の愚痴を聞いてあげるとは、娘がその中に入ることができず、嫁と折り合いを悪くさせ、親を安心させたいと思う心が不安を作り、親と娘の不安を確信するために、同じ処へ娘を嫁がせているという訳か？ 出会いは合縁奇縁と言われるが、不思議なものだなあ！」

「親が憎んだところへ、娘さんを嫁がせてしまい、憎しみは憎しみの処へ里帰り、嫁さんは憎んだところから、里帰りする原理原則です。誕生の神意が分かれば、そのようにはなりません。憎しみは前世で生きた人生を、何度でも悟るまで繰り返します」

「それが三代前の崇りや五代前の崇りや、親の因果が子に報い、と言われる意味なのか？」

「そうですね！ でも実際には崇りも因縁はありません」

「それでは何故、色情の因縁や水子の崇りと言われるのか？」

「己が母犯せる罪、己が子を犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪が、色情の因縁や水子の崇りばかりでなく、離婚や不倫、交通事故や突然死、非行や家出、恐喝や暴力事件、アトピーやゼンソクなど、様々な出来事に化しただけです」

「それは大祓詞おほはらいのことばの国ツ罪にでてくる一節ではないか？」

「これから先は天照大御神様に、お聞きになって下さい」

3 罪事

「そうです。長男夫婦を無視して、出しゃばって親に孝行する娘さんと母親は、親孝行ではなく、母と子と犯せる罪になり、これが母と娘の不倫や浮気なのです。結果として夫を酒やギャンブルに浮気させたり、夫婦喧嘩や親子喧嘩に浮気させて、色々な不幸を体験してしまっているのです。善婆さんが先妻さんに感謝せずに、偽善人の夫の母親に孝行したり、自分の親の愚痴を聞いて慰めてあげることや、あなた達が奥さんの偽善の罪を犯した母親を、病んで可愛そうだと、兄夫婦を無視して看病してあげること、浮気や不倫と同じことで、母と子と犯せる罪なのです」

「なるほど納得できる」

「己が母を犯せる罪とは、あなたのように前世の母であった兄嫁を無視し、現世の母に親孝行をしたり、あなたのお父さんみたいに、前世で母親だった長男の嫁さんを無視して、

娘さんや二男や三男に、親孝行をさせることを言うのです」

「それでは己が子を犯せる罪とは、親が前世の両親である長男夫婦を、嫌ったり憎んだりすることや、私の娘も長男の家に嫁いだが、嫁がせた娘を呼び寄せ婿を無視して、講話を聞きに來させたり、出来の悪い長男夫婦に跡を継がせるより、出来の良い娘夫婦に跡を継がせた方がよいと思っていたり、先祖が絶えないように誰でも良いから、親孝行をしてくれる人が継げばよいと思っていることも、己が子を犯せる罪と言うことになる」

「そうです」

「それでは子と母と犯せる罪は、何のことを言われるのか？」

「娘さんと母親とで長男の嫁を、無視したり追い出したり、嫁いだ娘に婿の親や兄弟の立場と順序を欺き行き來させたり、便利だからとか都合が良いからといって、娘の親として婿さん側の立場を無視して近くに住まわたり、子供さん達に親の仕事を、協力して継がせたり、二男や三男に長男夫婦を無視して親孝行をさせたり、同じ屋敷や同じ通りに、住ませたりすることです」

「納得！ 近ければ見てはいけなことを見たり、聞いてはいけな噂に耳を傾けたりすれば、同情心で出しゃばってしまふからなあ」

「色情の因縁や水子の崇りの原因の元は、親孝行と御霊祀りや先祖供養の間違いなのです。色情の因縁や水子の崇りばかりではなく、不幸の原因は、あなたのように二男なのに、親に孝行や親の遺影を祀り、御霊祀りや先祖供養をしているからです」

「兄夫婦を無視しての祀りや供養は、御結びの縁を欺くことになり、罪の元になるという訳か？」

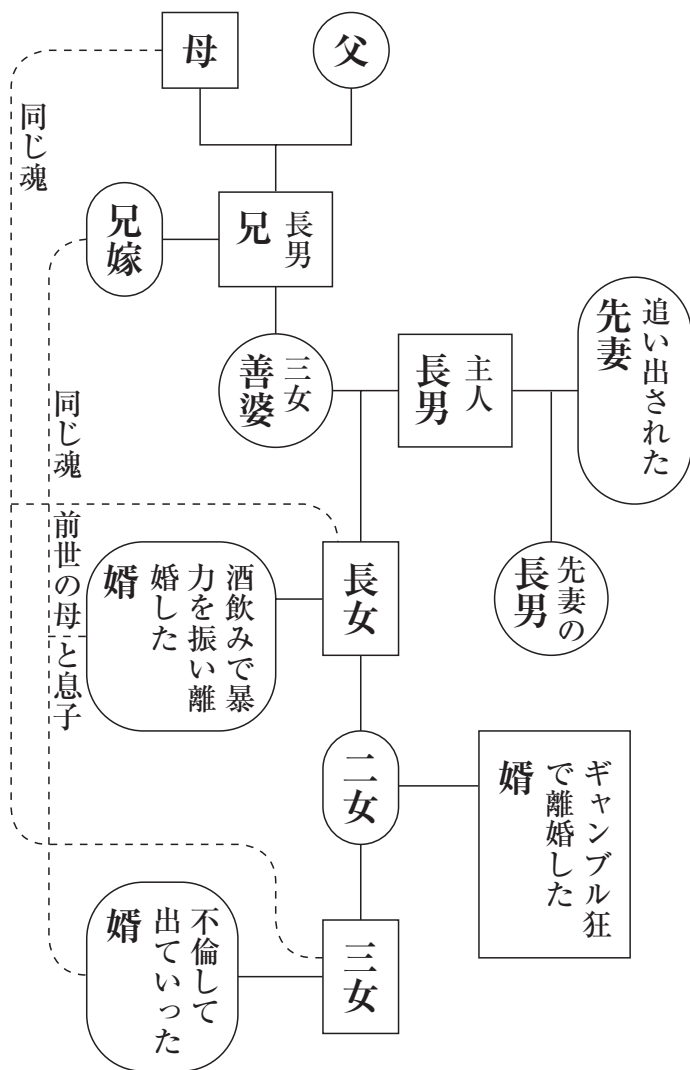
「世間一般で親孝行者と言われている人達にも、罪事が有ると言うことを知るべきです。人間界で親孝行や御霊祀りと先祖供養といわれることは、長男夫婦以外がしてはいけないのです。我が子は我が先祖なり、我が先祖は我が子なりなのですから、我が子長男夫婦を守ってあげることが御霊祀りや供養になるのです」

「長男夫婦を無視して、自己満足の祀りや供養は、偽善の罪という訳か？」

「善婆さんの娘さん達は世間一般では、親孝行者として通っていますが、一番上の娘さんのご主人さんが、お酒を飲んで暴力を振るったり、二番目の娘さんのご主人さんみたいに、ギャンブル狂になったり、三番目の娘さんのご主人さんのように、不倫して家を出ていってしまったように、誠の親孝行者なら、このようにはならなかったはずですよ」

「そうだなあ。それではなぜ離婚したのだ？」

善婆の嫁ぎ先と実家の家系の図式。



「善婆さんは実家を継いだお兄さん夫婦を無視して、自分の母親の愚痴を聞きすぎ、世話をしすぎ優しい言葉をかけすぎたために、一番上の娘さんが不幸を背負ったのです。善婆さんは三女ですから、お母さんと一番上の娘さんと、三女の方が同じ魂になります」

「長女と三女は善婆にとって、自分の母親の魂の分け霊だな。長女婿や三女婿は、善婆と実家を継いだ兄嫁とも同魂になるから、その兄嫁を無視して、善婆が母親の愚痴を聞くことが偽善の罪になり、結果として娘達の離婚になったのか」

「長女婿の魂は母親の魂と同魂になります。母と長女は前世の夫婦ですから、長女が母親に対して、苦勞して可愛そうだと思うことは、母親だけを心の中に描くことになり、主人を描くことにならないから、夫を無視してしまうのです。長女が母親に孝行すれば、心が母親に注がれ過ぎてしまいますから、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪という浮気になり、同じ魂の主人を、心の中から追い出すことになり近づけなくさせ、ご主人さんをお酒と暴力に、浮気をさせてしまったのです。そればかりではなく、離婚や交通事故、突然死、蒸発や借金地獄なども同じ原理なのです」

「長女や三女は母親の恩を、同じ魂の夫に返すことが誠の恩返しになる。夫に感謝すれば母親に恩を返したことになる。それを母親が可愛そうだと思い過ぎたために夫を無視した。

これが母と子と犯せる罪で、母親と同じ魂の夫を捨て、母と娘の浮気や不倫をし、親に同情心を起こしたことが、罪を犯したことになり、己が母犯せる罪になる」

「そうです！ 正解です」

「だが、それだけで男の子と女の子に、病弱や心を病んでしまうとは思えないがな」

「魂の分離が細胞の分離になってしまったのです」

「魂の分離が細胞の分離！」

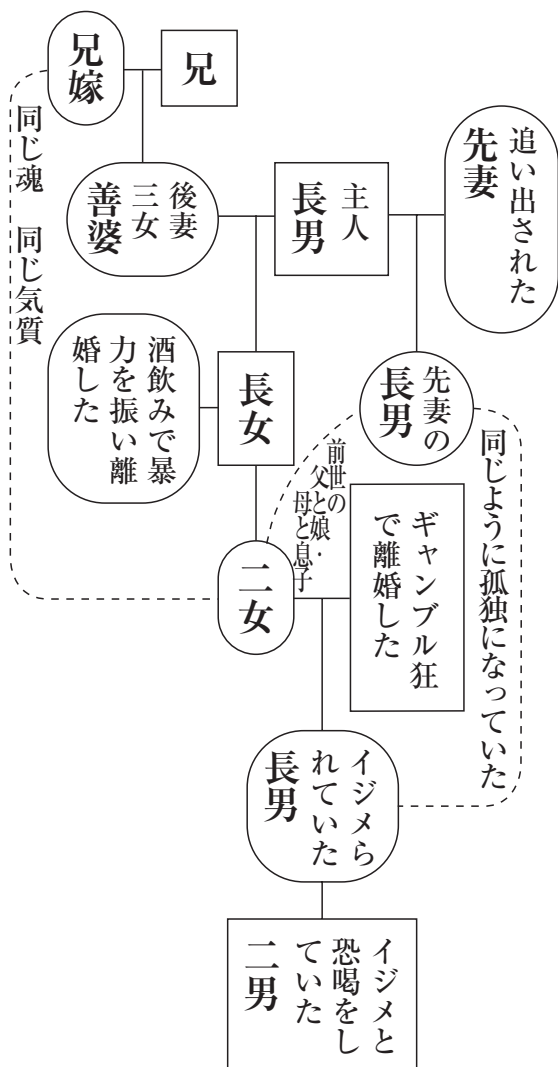
「そうです。この世界では一つの魂なのですが、人間界では前世の姿と人生を知るために、二つになっただけなのですが、憎しみや怨みによって、二つが三つになり、四つの魂に別れ別れになり、細胞が分離した現象です。善婆さんが嫁いだ主人の家系は、二代もらい合わせになっているのです。主人の親とその前の親は、二代養子と養女のもらい合わせになっていて、その人達を供養していると、子供さんやお孫さんの代で、大変な病弱に生まれる以外に、小児マヒや水子や内蔵欠陥、結婚の縁がなかったり、子宝に恵まれなかったり、不倫や離婚、突然死、遺産相続争いや借金地獄、不治の病など色々な不幸を背負ってしまうのです。一度絶えた家には子供さんは生まれず、長男は母親の魂の分け霊を受け継ぎ生まれ、長女は父親の魂の分け霊を、受け継いで生まれてきますから、両親の両方の

実家を通して魂が導き誕生します。だから養父母には魂の導きはなく、神の子は生まれてこないのです。養父母さんに子供さんが出来ないのは、養父母さんの両方の親が、御結びの縁を欺いて、親孝行をしていたことに、気がつかなかったからです。絶えた家の御霊祀りや供養することは奪ったことになり、奪った者は魂を奪われますから、魂の分離になつてしまうのです」

「それでは二番目の娘さんの子供の、登校拒否やイジメられたり、非行に走りイジメや恐喝で、警察沙汰になるのは何が原因なのか」

「二女にとって先妻さんの息子さんは、前世の父と娘や母と息子だったのですが、前世の父親、前世の息子を捨て、離婚したお姉さんのご主人までも無視して、姉妹が仲が良いことが子と母と犯せる罪、母と子と犯せる罪になり、二女が母として先妻さんの息子さんを無視したことに気づかせるために、上の息子さんがイジメられ、そのお返しで下の息子さんがイジメや恐喝や警察沙汰にし、子供さん達が御結びの縁を結ぶように、訴えかけていたことに、気づきの道具を与えてくれたのです。そして二女と長男がいる場合は、同じ魂なのですが母親と二女の性格は真反対になります。善婆さんの子供として生まれた二女の方は、善婆さんと性格が違います。二女の気質は善婆さんの兄嫁の気質を現します。

善婆の二女が姉婿を無視し、善婆にとって先妻の息子は前世で母と子、父と娘であったことを気づかなかったから、二女の子供達が罪を背負ったのです。善婆にとって我が子二女は、実家の兄嫁の気質を背負っていることに気づくべきでした。



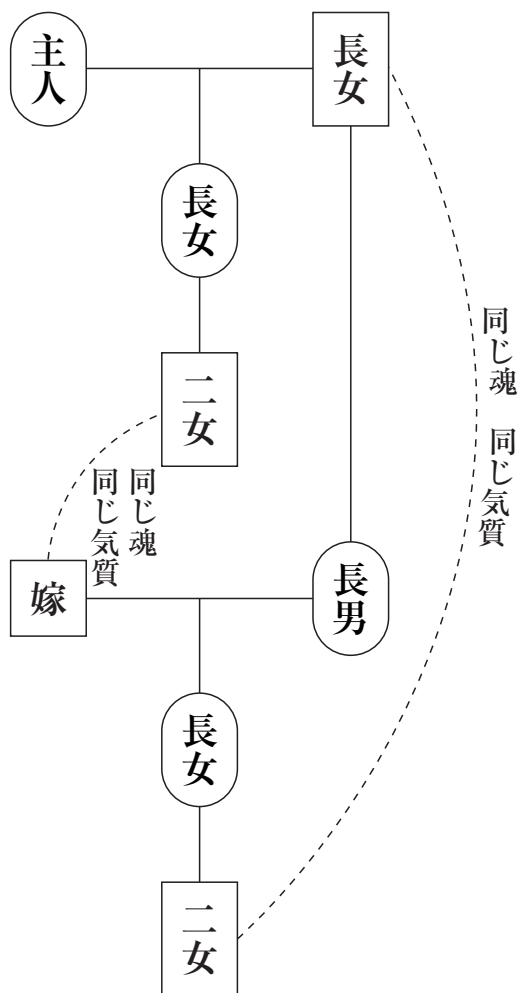
母親として我が子二女に兄嫁の心を知るのです」

「それで善婆と二女とは、似ても似つかなかったのか。そう言えば二女は善婆と違い勝ち気で、自分勝手なところが悪婆と同じだったなあ。我が子を通して、我が兄弟の人生を知ることができるのだが、人間はここはそこを守るためには、あそこの立場と順序を守ることをしないから、氣質を入れ替えと組み替えして、気づかせているのか」

「そうです。長女と三女は、長男嫁とは性格が真反対になります。長女と長男嫁の互いの子供二女に、氣質を入れ替え組み替えして、長女は長男の嫁の心を、長男嫁は長女の心を確信したかったのです。お互いが前世の姿を、入れ替えと組み替えして、我が子二女によって前世の人生を確信するのです。神様の世界では全てが平等なのです。娘さんの言い分は筋道に聞こえ、お嫁さんの言い分は言い訳に聞こえたり、娘さんの離婚は嘆き悲しむが、お嫁さんの離婚は憎しみ怨むが、神様は平等なのです」

「二女と母親の氣質が違う場合が多いのと同じで、長女嫁と母親の氣質も違う。二女と姉婿も同じ氣質になるから、二女と姉婿は前世の親子を、確認するために出会い、兄弟の契りを結ぶために再会したのだが、二女が長男と姉婿を無視し、姉妹が仲良くすること自体が偽善の罪になるから、子供が登校拒否やイジメや非行問題になる」

長女と三女は長男嫁と性格が真反対になります。その子供二女の氣質を入れ替えと組み替えして、前世の人生を確心し確神します。



「そうです。一番肝心なことは先妻さんの息子さんは、結婚もせずにひとりアパートで孤独な人生を送り、若くして亡くなられたことに気づかず、先妻さんの息子さんから、親が孝行と幸せを奪い、立場と順序を奪い、財産を奪ったから、神の子が奪った物は奪われることを、親に気づかせる道具として、犯罪になったのです」

「そうだったのか。二女にとって前世の父親と母親のことを気づけばよかった。それを先妻の子供は赤の他人だと思って、現世の姉妹だけが行き来したから不幸が起きた」

「先妻さんの息子さんが悲しい思いをして、亡くなられる少し前から、登校拒否が始まっていたことを、教えてくれたのです」

「同時進行か？ 誕生の意味が分かれば良かったのに、人間界では誰も信じないだろうな」

「人間界の出来事は同時に起きています。善婆さんの兄嫁さんと悪婆さんは、誕生日が同じです」

「私の家系もそうだ。私の兄と嫁いだ二女が誕生日が一緒に、兄夫婦の始めの男の子が亡くなった命日と、母親の誕生日が一緒になっている。五歳で亡くなった娘の命日と、兄が家を出た日が同じ月日になっている。二女が嫁いだ婿の母親の名前と、私の祖母の名前が

一緒だ。偶然にしてはおかしいと思っていた。時は違えども同時進行して、気づかせてくれていたことに気づくべきだった」

「偶然はありません。時の神が言われましたように、全てが時の中に存在し、全てが必然的な一致になっています。善婆さんの母親は長女として生まれ、近くの長男の所に嫁ぎ、実家が近いこともあり、毎日のように行き来しており、実家を継いだ兄が戦死したので、兄嫁さんと幼い息子さんを助けるために、すぐ下の弟さんと、再結婚させたのです」

「善婆の母親がそうさせたというのか？」

「そうです。その戦死したお兄さんが、時を経て生まれ変わり、今度は若死にせず夫婦と子供と幸せに暮らせるように、善婆さんの先妻さんの息子さんとして、誕生したのです」

「はあ！ それで先ほどの話しが納得できる。善婆は三女で母親は長女だから、母親の兄は善婆にとって、前世の父親であったり息子だった。だから孤独で亡くなった先妻の息子さんは、善婆にとって、前世の父親でもあり息子でもある。それなのに魂の原理に気づかず、前世と同じように孤独のまま、亡くならさせてしまったから、二女の幸せがなくなつた。人間は亡くなるのではなく、何度も輪廻転生するに、丁度いい時を選び誕生する」

「そうです」

前世の父と娘・母と息子

生まれ変わり

再結婚した

戦死 長男 兄

兄嫁

長女 母

父

長男

弟 二男

兄嫁

兄

三女 善婆

主人 長男

先妻 追い出された

先妻の 長男

前世の父と娘・母と息子

「だが長男の嫁と二男は同じ魂になる。それと長男の息子さんとも同じ魂になり、その息子さんが結婚すれば全て同じ魂同士になる。同じ魂同士が結婚すればどうなるのか？ 今までのことを聞いて、分る範圍の推測だが、これが同性愛や双子や三つ子になったり、結婚の縁がなかったり、子供が出来なかったり、離婚や不倫になるのではないのか？」

「そうです！ 生まれ変わるとき、この親なら全てを許し、全てを愛してくれるから、と思って誕生するのですが、人間界の偽善の罪で、罪のない子供さんに親を孝行をさせて、こととそことあそこに、分け隔てて『好きと嫌い』『氣に入ると氣に入らない』『親孝行者と親不孝者』に、差別してしまったから、一つの魂に帰ることが出来ないのです。ですが同じ魂同士は、一つになることはできないのです。それは始めから、二つではなく一つからです。一つの魂の故郷に帰るためには、一番嫌いな人のところに抱かれ、許し合い愛し合うことによって実るのです。人間は区別だけなら良いのですが、偏見した心で差別してしまったから、魂の分離をさせてしまい、帰るところを見失ってしまうのです。己が母を犯せる罪、己が子を犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪が元で、神の子に犯罪を起こさせてしまったら、不幸を体験させてしまうのです」

「血筋の近い同士の結婚は、障害者が生まれる可能性があると言う意味が分かる。それで

三女の子供達がノイローゼや靈障で苦しめられるのか？」

「血筋が近いだけでは、ノイローゼや靈障にはなりません。父と子、母と子や兄と弟、姉と妹は現世で親子兄弟ですが、前世では夫婦なのです。それを入れ替えと組み替えて、親子の契り、兄弟の契りを結び、お互いが立場と順序を、守ることを誓い結婚したのです。それなのに善婆さんの姉妹さん達は、その兄弟の契りと、立場と順序を無視し、一度兄弟の契りを結んで結婚し、それぞれ家庭を築いたのですが、離婚して姉妹だけで、寄り添って仕事をしていたのです。それと御靈祀りや供養の間違いなのです」

「それでは祀りや供養の間違いと、二女が三女だけを使っていたことが、ノイローゼや靈障の原因なのか？ 世間一般の考えでは、三姉妹が助け合い、協力し合って事業を伸ばせば、兄弟の契りが深まると思うが？」

「その思いが選んでないことになり、子供や孫を不幸にしているのです」

「そうかなあ」

「兄弟姉妹が近くなればなるほど、その子供さん達は近づくことができず、離れてしまうのです。娘が入れば嫁は入れず、嫁が入れば娘は入らずと同じように、兄弟姉妹は、前世で夫婦の契りを結び誕生したのに、現世でも近く寄り添えば、お互いの夫婦間に溝ができ

ます。そればかりではなく子供さん達までも、憎しみの溝が深まり、争いの元になります」

「分かる。よく親の代で兄弟仲良く隣同士で住んでいても、その従兄弟同士になると争いや、離婚や家出や結婚の縁がなかったり、遺産相続争いをしている家系が、多いのも事実だからなあ」

「兄弟姉妹が寄り添うのではなく、離ればなれに住み、兄弟と同じ魂の子供さんを守ってあげることが、兄弟に対しての恩返しなのです。兄弟がお互い結婚しても、何時までも寄り添っていること自身が、浮気なのです。長男夫婦を無視して、姉妹や弟が寄り添うから、家庭内暴力や親子喧嘩が起きたり、従兄弟同士が争ってしまうのです。兄弟はお互いが節を持ち合い、人生儀礼の礼を尽くし合うだけでよいのです」

「分かった。兄弟が兄弟の内誰を選んでいるか、姉が妹の子供の誰を選んでいるか、妹が姉の子供の誰を選んでいるか、兄が弟の子供の誰を選んでいるか、弟が兄の子供の誰を選んでいるかの立場と順序が分からずに、兄弟姉妹が寄り添い仲良くすれば、その子供達も選ぶことができない。それは祀りや供養の間違いと同じように、立場と順序を無視したことになる、それが靈障になったり、ノイローゼになる。兄弟の子供はお互いに、入れ替

えと組み替えして、預かり育てさせてもらっているのだから、甥や姪は前世の己であったり、前世の兄弟だから、お互いに節を持ち、お祝いを祝福する人生儀礼を、大切にすれば恩返しになる」

「そうです。兄弟が何時までも寄り添っていることは、愛でもなく慈悲でもなく、ただの同情心になってしまっただけなのです。誠の慈悲は兄弟の恩を我が子長男夫婦に恩を返すことです。兄弟姉妹だけではなく、他人だと思っている人達の子供さんも、全て同じことなのです。どんな人の子供さんでも、親と長男夫婦の間に割り込んで、溝を作るような方法は避けるべきです。また、どんな子供さんでも説教してはいけませんのです。我が子や親戚や他人にしても、選ぶことを明確に、心の中に刻み込むことだけなのです。それを怠ればあなたが言われたように、人間界の色々な不幸を、体験してしまうのです」

「私も生前は、信者やその親戚に頼まれて、長男や嫁や出来の悪い子供達に、説教していた。今になってようやく、魂の原理が分かり始めてきた。これは靈魂の掟で、誰も無視することも、欺くこともできない人間界の掟だと分かってきた。だが先ほども言われたが、親の仕事を子供達が、一緒に協力して自営していたり、兄が弟を、弟が兄を、兄が妹やその夫を、弟が姉や夫を、というように使っている家族が多いが、それは何故そうなっ

まうのか。それをくい止めるにはどうすればよいのか？」

「まず子供さんが出来なくて絶えた家や、あなたの家のように、お父さんは二男なのに戦死した兄を祀ったり、あなたが幼く亡くなった娘さんを祀ったり、結婚せずに亡くなった兄弟姉妹を祀ったり、両方の先祖や親戚を、祀ったり供養するために、跡を継がなければならぬ方法は、親に孝行と同じように負担を背負いますから、させるべきではないのです。個人個人に亡くなった方達を、お祀りさせるのではなく、あなた達宗教家ご家族様の代わりに、お祀りやご供養する場を設けて、真剣にお祀りや供養をし、安心させてあげることが奉職なのです。そして親孝行とは、親自身が子供に孝行と同じように、親が長男夫婦を選び守ってあげて諭し導き、祀りや供養は長男以外のところではいけないことを、教えるべきだと思います。長男夫婦と人生儀礼の礼を持って、行き来することを怠り、偽善人が寄り添えば、ことごとあそこの魂が、憎しみ合い分離し続けてしまい、一つの魂に帰ることができないのです。あなたが親を捨てて出て行ったお兄さん夫婦を憎み続け、奥さんのお兄さん夫婦を憎んでおいて、長男のところに嫁いだ娘さんだけ近づけたり、憎しんだ人や怨んだ人を遠ざけ、同じ魂の我が子を近づけ、憎しみや怨みの心を知られたくないために、同情心や優しさに置き換え、寄り添い哀れみ合っているから、

供養をしても誰も幸せにはなれないのです」

「魂の原理と、一番嫌いな人が前世の己の姿と人生を、教えるために近づき、嫁は前世では娘であり、娘は前世で嫁であったことを思い出させ、立場と順序を守り、親に受けた恩を長男夫婦に返すことが誠の恩返しである事を教え、御霊祀りや供養は、宗教家自身の職務だと思えばよい」

「そうです」

4 自分を許すことが御霊祀りと供養

「難しいなあ！ 意味は分かる。納得もできる。だが実行となると難しい」

「簡単です。選べばいいだけです」

「そうだな簡単なことだよな！ だが人間は親に孝行を道徳で教えられ過ぎた」

「ここがその幸せを思うなら、あそこの人に感謝しなさい。それが御霊祀りや先祖の供養なのです」

「難しい。人間は他人のことは分かる。だが自分のこととなると、簡単にはいかないのだ。親に受けた恩を親に返すことを、教えられすぎたからなあ。親に受けた恩を親に返すために御霊祀りや供養をしたり、結婚せずに亡くなった兄弟姉妹を供養しないと、祟りや因縁が起きると教えられ過ぎたからなあ」

「人間は選んでないことを、選んでいるだけなのです」

「魂の神もそう言われた」

「自分自身を許せば選ぶことができます。善婆さんは自分を許していなかったから、不安を作り、対象物という相手が必要になり、安心と自己満足するために、供養がしなくなったのです。自分の徳を外にさらけ出し、見せ物にしているに過ぎないのです」

「それは分かる。善婆の前世は悪婆や先妻や実家の兄嫁だから、一番嫌いな人が前世の自分の姿だと思えば、その人達を許すことができ、魂は一つに帰り、自分自身の御霊祀りや供養となるから、不幸な体験をしないですんだはずなのだが、人間はなかなか許すことが出来ない」

「人間は『許す！』『許さない！』と言いますが、これも相手がいる場合に通用し、相手がいなければ、成り立たない言葉なのです。神様の許しは相手がいりません。自分自身を許す人を神様は許してくれます」

「善婆は前世の自分を許していなかった」

「そうです。人間は一人では生きられず、人と人との間と書いて、人間と言う字になったのですから、人と人の間に立って、物事を判断して成長するのです。陰と陽、表と裏、善と悪、大と小、暑いと寒い、長いと短いもそうなのです。この両方の存在があるから愛が

あり、人間なのです」

「比べる対象物のお陰が愛。愛の対象物は『選んでないことを選んだ』と魂の神が言われ、全てを許すことが、愛だとも言われた」

「許すことや愛することは、相手がいる場合に起こる現象で、相手がいなければ、比較することができないのです。ですが神様には相手がいらないうです。すべて自分の心にあるからです」

「神様は自分自身を許す人間を許し、自分に感謝する人間を許す。それが神様の愛！」

「そうですね。神様は自分を許す人を愛し、認めてくださるのです。悪婆さんのような人でも、飲んだくれの人であれ、臆病者と言われる人でも、生きることをお許しになっています。全てを許すことが、御霊祀りや供養なのです。この世界では、どんな人でも平等に、神様に愛されていますから、御霊祀りや供養はないのです。人間は自分と他人を比べて『いい人と悪い人』に見分けて『許すと許さない』と言って、御霊祀りや先祖供養をしているから、幸せになれないのです」

「勝手に娘と嫁、息子と婿を、そことあそこに分け隔て差別し、偽善の罪を犯した親を、亡くなったからと、御霊祀りや供養をしても、幸せになれない」

「そうです！ 人間は『詫びるまで許すことはできない！』といいますが、相手が一方的に悪いと、思っているから言う言葉なのです。『お詫びします！』も同じことで、詫びを入れる前に、何か原因があつて因果があるから、結果として詫びると言う行為になります。が、お互いが相手を心の引力で、引き寄せいるに過ぎないのです。それは嫁と姑も、同じことなのです」

「分かる！」

「神様は自分を自由にすることを望んでいます。自由とは前世の自分を許すことです。から、相手に詫びを入れさせるのではなく、自分本来の心に戻り、自分自身が引き寄せている前世の姿に対して『出会えて素晴らしい体験ができました！』と、感謝することを望んでいます」

「母親の前世の姿は長男の嫁で、長男の嫁にとって前世の姿と人生は義母になり、お互いが心の引力で引き寄せ、確神しかつただけなのだから、お互いが感謝し合えばよい」

「そうです！ 相手がいなければ『詫びる』『詫びない』は起きません。神様と約束して自分を成長させるために、近づけて試しているだけです」

「母親自身の心を、成長させてくれる人が、長男の嫁ということか？」

「親が長男夫婦に、慈悲と情けをかけてあげることが、前世の自分の姿に、感謝することになり、自分自身の御霊祀りや供養になり、他の子供達も幸せになるのです」

「先祖の元である長男夫婦を、無視して親や先祖に感謝しても、御霊祀りと供養にはならない」

「そうです。神様は自分に感謝する人や、自由になることを与えてくれたのですから、自分に感謝しない人や、自由に生きていない人が、心の引力で自分自身を試す相手を、引き寄せているのに過ぎないのです。その人は前世の姿と人生を、教えるために近づいたのだから、その人を許せない人は、自分も許していないから、心の病になって病気になるってし
まうのです」

「前世の自分自身を、許す心がないから病気になるのか。私も色々な病気を克服した。幼い頃はゼンソクで苦しみ、運動会の駆けっこで転び右の鎖骨を折り、青年になってからはヘルニアを手術し、結婚が決まった途端に、交通事故でムチウチになり、結婚してからも腎臓結石で石を取り、中年からは食事療法で、糖尿病の苦しみを克服したが、脳梗塞で倒れ意識が戻らないまま、六十一歳でここの世界に来てしまった。生前は信者に数々の病を打ち勝つことを、毎日のように訴えかけていたが、実際には、父親が偽善の罪で私の病を

作り、私も靈魂の掟を知らなかったために、自分を苦しめていたと気づいた。病は兄嫁を憎み苦しめさせた愛の対象物だと、気がつけば簡単に治ったはず、また次から次へと、病に冒されずに済んだはずだった。妻も私と同じように、私の親に孝行し実家の母親を哀れみ、兄嫁を憎しみ始めた頃から、偏頭痛に悩まされたり、子宮筋腫や乳ガンになったり、更年期障害で苦しんでいたことも、同時進行で同じ原理だった。病は悟りの始めなりだな」

「過去に感謝しなかったからです。人間は過去に起きたことを許さず『いつ どこで だれがなにを どうした』ということを、鮮明に覚えていて、忘れることができないから、前世の姿と人生を、一番嫌いな人が近づいて、教えてくれるだけなのです。成功者は裕福な話しをし、病人は病気の話しをし、貧乏人はお金のない話しをし、不幸な人は過去を嘆く話しをし、子供をダメにする親は過ぎ去った自慢話をするのと同じことです」

「そうだよな。生前中は過去に感謝することより、自慢たっぷり病気の話しを、毎日のようにしていたからなあ」

「神様は『未来を見なさい!』と言い、過去に縛られるより、未来に向かうことを望んでいます」

「私は自分自身を許し、毎日未来を描き続けていたよ」

「あなたは自分を信じ、素晴らしい未来を描いていましたが、同じ魂のお兄さんのお嫁さんを、許すことも未来を描くこともせず無視して、親や先祖の『お陰！』と思い、供養をしていたからです。善婆さんは両方の親のお陰と思い感謝し、両方の親の供養を欠かさずしていたことが、偽善の罪と気づかず、前世の姿を教えてくれる先妻さんと、実家の兄嫁さんを無視し、前世の息子さんを孤独にして、現世の娘さん達を、善婆さんの身勝手に近くに住まわせ、親孝行をさせていたからです。成功者といわれる人達の、不幸を作った共通点は、自分の徳を我が子の誰に返すかを考えてなかったから、罪を子供が受け継ぎ孫が現してしまったのです」

「禅語に『一器の水を一器にそそぐ』と言う言葉があるが、まさにその通りだな。宴会風景のように、全員にお酒を注ぎ廻り、平等に行き渡るより、全身全霊、長男夫婦に親の心が注がれば、他の子供達が幸せになれるという訳か」

「神様は全てを許し、全てを愛しなさいと言われるけど、ことごとあそこを平等に、心を傾けることではないのです。ことごとあそこは、一つから二つの魂になっただけなのですから、ここがそのために、あそこを許し愛すれば、魂は一つになり、罪事は解

決します。それが御霊祀りや先祖供養なのです」

「私が兄嫁を薄情だと思い、幼く亡くなった娘を、供養しても供養にならず。兄嫁を薄情だと思い無視し、父親を供養しても供養にならず。家を飛び出して行った兄を、無視して母親を、供養しても供養にならず。妻の実家の母親が、偽善の罪を犯したことに気づかず、哀れみ同情して、亡くなった娘の写真を祀り、真剣に供養しても供養にならず」

「そうです。それは留めることになり、御霊祀りや供養をしているように見えますが、実際には復讐をしているのと同じなのです」

「復讐か？ 人間界ではそうは取らないだろうな」

「亡くなった娘さんは自由になって、あなたに選ぶことを教えていたのを気づかずに、あなたは自分の心の中で、娘さんを思い出として留める供養は、娘さんの遺影を通して、同じ魂の兄嫁さんに復讐していたのです。親が子供さんに孝行させたり、亡くなったからと言って留める供養は、無視したり憎しんでいる人がいるからで、その人の変わりに、子供に復讐しているのと同じことです」

「それは何とか分かる。妻が夫を憎んで離婚し、長女が母親を哀れに思うことは、母親が娘に同情心を植え付け、主人の変わりに同じ魂の娘を、近づけ苦しませて復讐する。今度

は母親が主人を捨てたように、長女は母と同じ魂の夫を捨て、哀れみと同情心を持ち、母親にとって長女婿は前世の息子だから、長女が夫を捨てることによって、前世の母と息子の縁を切り、母親を苦しめ復讐する。それが離婚の原因になったり、病気の元になったり、祟りや因縁と言われる元になる」

「そうです」

「前世のみずからの姿と人生を、許すことができないから、母親が長女婿を捨てることと同じように、みずからが同じ魂を捨てて、哀れみや同情心で、あやつり人形の子供達を近づけ、不幸の道連れにしている。父も二男なのに戦死した兄と兄嫁の存在に気がつかず、供養することだけを真剣にしていたから、我が子長男を我が兄の魂の分け霊、我が兄嫁の魂の里帰りに気づかず、兄の嫁になるはずだった悪婆を無視し、二男である私に跡を継がせ、私も父と同じように兄と兄嫁を無視し、我が子への悲しみを胸に描き、憎しみと哀れみの両方を心に作り、心の中に神様や仏様を、創造するのをやめ、外の神を自己満足で崇拜し、不安という位を残したまま、子供達や親戚の心に憎しみと怨みを刻み込ませて、この世界に来てしまった。二男である父親が、戦死した兄を供養することは、我が子長男が入ることが出来ず、二男が兄を祀ることは、我が子長男に苦しみを与えることになる。

二男に親孝行させることは、親の罪を二男になすりつけ、みずからみずからの復讐となる」

「その通りです。親に孝行をさせるより、親自身が自由を選べば、我が子神の子を自由にすることができなのです」

「自由にするためにはどうすれば良いのか？」

「自由になりたいと思うから、自由になれないのです。自分に足かせをはめて生きているから、自由になりたいと思うだけです。自由に生きている人を抑制したり非難し、自由に生きている人を、白い目で見えるからです。幼い頃の思い出に足かせをはめて、生きているからです。親から

あれをしてはいけない！

これをしてはいけない！

もう少し親のことを考えてよ！

何べん言えば分かるのよ！

ほらまたやった！

早くサッサとしなさい！

いつまでやっているのよ！

うるさいわね！ あっちに行きなさい！

大人の問題に口を出さないこと！

あなたってダメね！

そんなことより先に勉強しなさい！

頑張ってね！

グズグズしないで！ しっかりしなさい！

理屈は言わないの！

バカなことを言わないで！

なぜ親の言うことを聞けないの！

分かった！ 分かった！ あとでね！

黙って親の言うことを聞きなさい！

あなたは男でしょう！ あなたは女でしょう！

世間体が悪いからヤメテよね！

少しは親の気持ちを分かってよ！

私が恥ずかしいからヤメテよね！

私に出来て　なぜあなたに出来ないのよ！

あなたはお父さん（お母さん）に似てダメね！

あなたを生まなければよかった！

と言われ続けて、いざ大人になると「何でもやってみなさい！　何故出来ないの！　何故頑張らないの！　何故言い訳するのよ！」と口を酸っぱく、何度でも同じことを言うのです。子供さんは、いざ自由な身になっても、何も出来ないのです。出来ないから親の顔を伺ったり、逃げ回った挙げ句の果てに、非行に走ってしまうのです。押さえつける言葉が、誰かを憎んだり嫌っているの、我が子に対して、足かせをはめる復讐なのです」

「私も兄も同じことを言われ続けたから分かる。兄は反発して家を飛び出したが、私は親の言いなりで、親のあやつり人形になり、自分に足かせをはめていた。二男や三男が長兄を無視して親孝行したり、させたりすることは、親自身が『好きと嫌い』『気に入ると気に入らない』『親孝行者と親不孝者』を比較し、一番嫌いな人が前世の姿と人生を教える人だと気づかないから、憎しみと人が憂いで優しさを作り、我が子に復讐する」
「そうです。神様は何をするにも自由です。自由だから自分自身の足で歩き、どんな体験

や経験も全て認めてくださいます。自由な親には自由な子供さんが生まれ育ち、体験したことによって悟りを開きますから、悟りは自分自身の心で感じたことであって、親でもないのです。ですが、親に足かせをはめられた人は、親と同じ体験を我が子にさせ、許さないから親の代わりに、復讐に替えてしまうのです」

「親に素直な子供は育つ段階で、足かせをはめられていると気づかず、あやつり人形のようになってしまっているから、我が子にも自分と同じ方法を取り、同じことを繰り返してしまう。時の神が言われたように、未来に向かっているはずなのだが、過去に囚われているから、未来を思い描くことが出来ない」

「先祖を主体にして物事を考えているから、無理が出来てしまうのです」

「親は何か良いことがあると『ご先祖様のお陰！』何か悪いことをすれば『ご先祖様に申し訳ない！』と言って、ご先祖を敬うことを、子供に教え込んでいる。ご先祖のお陰も御霊祀りや先祖供養も足かせをはめ、あやつり人形のように、子供の心をがんじがらめに束縛している」

「そうです。親が束縛する言葉を言った途端に、子供は憎しみを持ってしまふのです。実際に親は『私達のお陰！』だと言っているのと同じことだから、子供が反発するのです」

「子供が存在するから、先祖が存在すると思えば簡単だな」

「親が子供のお陰と気づけばよいのです。それは子供さんは前世の親なのですからね」

「今までのことは間違っていたことに気づき、分かったから変えた、私は子供達を選んだ。と思えば瞬間に人生が変わる」

「そうです。簡単です。無理を押しつけるから、規則や決め事が多くなり、がんじがらめに束縛した社会を、造っているだけなのです」

「親自身の心に憎しみや怨みを持たず、立場と順序を守れば、子供達が自由になる」

「全てに感謝なのです。それは自分自身に、感謝することになるからです」

「感謝されたいから感謝するのではなく、許して欲しいから許すのではなく、愛して欲しいから愛するのではない」

「許して欲しいから許す、愛して欲しいから愛すと言うことは、相手を圧迫し束縛し威圧になります。全てを許し全てを愛することは、全てを許し全てを愛して欲しいという見返りではないのです。自分自身を許し愛することが感謝なのです。私達に感謝することでもないのです」

「あなた達に感謝してはいけないのか？」

「あなたの心の中に存在する神に、感謝すればよいのです。私達はあなた達人間が、神様と約束するためにお産みになったのです。私達の前で誓うために、存在を現したのです」

「感謝の方法を教えてくださいませんか？」

「私は先祖の魂を受け継ぐ、最も幸せな魂があり、最も光り輝く神であります。たとえばよいのです。この方法がみずからに、感謝することになります」

「私は先祖の魂を受け継ぐ、最も幸せな魂があり、最も光り輝く神である。素晴らしい言葉だ。だが、これが自分に感謝することになるのか？」

「みずからを創造することなのです。どんな体験をしようとも、嘆き悲しむのではなく、素晴らしい体験ができましたと思い、全てに感謝すれば、この世界と同じく、人間界も大自然を友として生きることが出来ます。大自然の中に生きていると思うためには、我最幸魂、我最光神とすることです」

「我最幸魂、我最光神か」

「これが、みずからの前世に対しての、御霊祀りや供養であり、前世で出会った人達への恩返しであり、真の御霊祀りと供養なのです。御霊祀りや供養をしたいなら、みずからが我最幸魂、我最光神として精一杯生きることです」

「要するに御霊祀りや供養したいなら、自分に感謝すれば供養になる。と言うことか？」
「そうです。そして、御霊祀りや供養をしたいなら、子供さんに『あなたが誕生したお陰！ あなたは最幸な魂があり、最光な神の子です！』という感謝の念で思えばいいのです」

「我が子は我が親なり、我が親は我が子なり、と言うように対象物だから、先祖を供養したいなら、親が共に養い我が子を守ること。それも立場と順序を守りながら、と言うことだな。人間界では選ぶことさえ選ばず、変える勇氣を持たず、漠然と生きている人達が多いから、自分自身を信ずる信仰心にならず、御霊祀りや供養のために、がんじがらめの宗教心で宗派を選んでゐる。私も生前はそうだった。婿やその両親を無視して、娘に自分の教義を自信満々で説いていた。娘も私の説く教義を信じ切っていた。親心で娘に幸せになつて欲しい欲目で、宗教心を説いていたことが、実際には間違いだった。娘の親は無言で『先祖の里へお帰り下さい！』と嫁がせれば、前世の実家である婿側の親に可愛がられた。娘に幸せになつて欲しいと思う親心が、婿側を無視することになり、前世の息子の幸せを祈ることが、娘の幸せになることに気がついた」

「幸せになつて欲しいと思う親心が、現実には幸せにならないのです。道徳を説くより説か

ない方が道徳が生きます。親孝行を説くより、親孝行を説かない方が、親孝行が生きます」

「分かるような気がする。天照神様が言われたように、成功者は裕福な話しをし、病人は病気の話しをし、貧乏人はお金がない話しをし、不幸な人は過去を嘆く話しをし、子供をダメにする親は、自分の自慢話をしたり、他人の子供さんをほめ称えたりするのと同じで、心のあり方だけで、その人の人生と魂の里帰りが決まる」

「そうです。親孝行をさせようと思えば、親不孝者ができ、交通事故の防止を強化しようと思えば、交通事故が起き、不幸になりたくないと思えば不幸になり、幸せになりたいと思えば幸せから遠ざかり、病気になるりたくないと思えば、健康に近づくことができず、健康になりたいと思えば健康が逃げる。それは前世の自分を選んでないからです」

「不幸になりたくないと思うことが、不幸を選ぶのではなく、幸福を選ぶんだと思うことが、不幸を選んでないことになる。健康を選んで思うだけで健康になる」

「そうです。誰でも選択の自由を持っているのですが、選ぶことを選んでないだけなのです」

「親が幸福を選んだと思えば、子供達も幸福になると言う訳か？」

「そうです。我が魂は我が魂にあらずと言われるように、親が作った罪を子供が受け継ぎ孫が現すことがなく、全ての人達が幸福になれます」

「我が子の誕生の意味が分かれば、供養を選ぶことより、親に受けた恩を長男夫婦に返すことが、御霊祀りと供養を選んでいると言うことになる」

「そうです。御霊祀りや供養とは、

自分を許すことが御霊祀りと供養です。

自分を信ずることが御霊祀りと供養です。

自由になることが御霊祀りと供養です。

精一杯生きることが御霊祀りと供養です。

自分に感謝することが御霊祀りと供養です。

みずからが自分の心を変えることが御霊祀りと供養です。

前世の自分を許すことが御霊祀りと供養です。

我が子を守ることが御霊祀りと供養です。

立場と順序を守ることが御霊祀りと供養です。

親が我が子長男夫婦を選ぶことが御霊祀りと供養です。

長男が他の兄弟の立場を守ってあげることが御霊祀りと供養です。

親自身が前向きに生きることを選ぶことが御霊祀りと供養です。

ここがそこを守りたいならあそこを守ることが御霊祀りと供養です。

一番嫌いな人を許し愛することが御霊祀りと供養です。

孫を守りたいなら我が子の順序と立場を守ることが御霊祀りと供養です。

親が娘と嫁、息子と婿の差別をしないことが御霊祀りと供養です。

三軒両隣の人達を憎まず、悪口を言わないことが御霊祀りと供養です。

三軒両隣の人達と縁を結ぶことが御霊祀りと供養です。

どんな夫婦でも離婚をしないことが御霊祀りと供養です。

どんな夫婦でも離婚をさせないことが御霊祀りと供養です。

長男夫婦の処に集まることが御霊祀りと供養です。

兄弟姉妹が絶縁をしないことが御霊祀りと供養です。

嫁の親が婿とその兄弟の立場と順序を守ることが御霊祀りと供養です。

常に過去は素晴らしい体験をしましたと思うことが御霊祀りと供養です。

親の生きた人生を嘆き悲しみ、長男夫婦を無視して、供養しても供養にはならず、人を

憎み怨みを持ち続け、みずからを哀れんでも、御霊祀りや供養にはならないのです」

「私は人間界では御霊祀りや供養とは、右手が痛ければ左手のことを思いなさい。と同じように、不幸と言う痛みを和らげるために、別の所に心を傾ければ、心の安らぎになる、と言ってきたのと一緒だ」

「そうです。同じ原理なのです。私達もその方法でお産みになったのです。痛みがある右手を直すには、右手の導きに感謝すればよいのです。それを右手の痛みを忘れさせるために、無理に左手に痛みを作り、一時的に忘れさせただけなのです。父親が飲んだくれだとして、その妻に同情と言う心に、変えたことと同じです。それは導きではなく、目には目を、歯には歯をだけです」

「たとえがうまい。不幸な人達を集めて『供養が足りないから！』『神や仏に感謝しないから！』『先祖を祀らないから！』と同じだ」

「あなた達が私達をお産みになったのは、心を一つに導き、魂の故郷に帰ることを目的にするために必要だったからです。あなた達の前世は、私達を心の中に描いたのです。見えるものに感謝したのではなく、見えない私達に感謝したのですが、姿や形がないと不安になる人達が、外に形を造ったために、創造することをやめたのです」

「魂の神が言われた、光の中に闇があり、善の中に悪があり、優しさの中に憂いがあり、美の中に醜さがあり、平和の中に争いがあり、動く物の中に動かない物があり、正義の中に悪があり、見える物の中に見えない物があり、近づく物の中に遠ざかる物がある、と言うように陰陽和合の導きに感謝すれば、あなた達を描いたことになる」

「よく分かりましたね」

「天照大御神様が言われた親孝行をさせようとすれば、親不孝者ができ、交通事故の防止を強化すれば、交通事故が起きると同じことで、その物事に心を囚われていることは、自分自身を縛り付けているから、みずから求めてしまう」

「見える物、全てに感謝です。親不孝者に感謝。交通事故に感謝。病んでいる右手に感謝。それが見えない物に感謝しているのと同じで、見えない私達に感謝しているから、私達があなた達を守り導くことが出来るのです」

「あなた達は私達の子供だから、あなた達に感謝することは、我が子に感謝しているのと同じで、我が子に感謝していることは、あなた達に感謝しているのと同じこと」

「それが神様の導きであり、神様があなた達を導いてくれるのです。善婆さんは見えない先妻の息子さんや、離婚した娘さん達の婿さんである前世の息子さんに感謝せず、現世の

娘さんを近づけ感謝して亡くなり、この世界にきました。悪婆さんは前世の娘であった、息子さんのお嫁さんに感謝して、この世界にきました。この違いが善婆さんが悪婆になり、悪婆さんが善婆になったのです」

第五章 導き

1 我が子を不幸にしたいならば

「感謝にも立場と順序があるという訳か？」

「大自然の中で共存共栄して、万物の霊長と言われる人間が、大宇宙の法則と大自然の摂理を、守らなくなったために、不幸という悲劇を造り始めたのです」

「真つ暗闇の神が言われたことを思い出した。肉食動物が草食動物を食べることは、肉食動物の子孫を残すことが目的ではなく、草食動物の子孫を残すこと、草食動物は自分の子孫を守ってくれる肉食動物に感謝している。肉食動物は草原を守っているように見えるが、実際には草食動物を見守っている。人間が過酷な大自然の摂理が、人間界にも存在すると思えば、神様の導きがあると言うことになる。前世を肉食動物にし、現世を草食動物にし、来世を草原とすれば理解できる。親が二男や三男夫婦を直接守るより、長男夫婦を守ることが、二男や三男夫婦を守ることになり、親が嫁いだ娘夫婦を直接守るより、長男夫婦を

守ることが、嫁いだ娘夫婦を守ることになる。祖父や祖母が、孫を可愛いからと、直接守ることより、我が子達の立場と順序を守ることが、可愛い孫が守られる。これが大自然の摂理を守ることになる。前世も現世も来世も、三位一体になり、立場と順序を守らなければ、大自然の摂理を守ることができない」

「そうですね。神の子を守るために、どんな場面に遭遇しようが、前世の因果を克服するために、みずから求めたのですから、立場と順序を守り、全てに感謝すれば、大自然の摂理に感謝したことになり、神の子を守ることが出来ます」

「地縛霊も浮遊霊も同じことなのか？」

「地縛霊や浮遊霊に犯される人達は、前世の姿を覚えてくれているのです。前世で亡くなるとき、みずからが立場と順序を無視し、偽善の罪を犯したから、みずからの導きで、一つの魂に、戻ることが出来なくなってしまったのです。魂の故郷は憎しみの中にあり、怨みの中にあることを、理解せずに亡くなったから、同じ思いの人が、近づくのを待っているだけなのです。怨念を持ったまま亡くなった人は、ことそこそこあそこに魂を分けたので、みずからの力で、一つの魂に戻ることが出来ません。その人達はここの世界に、戻ることができず、人間界に住んでいます」

「この世界に戻ることが出来ないのか？」

「いつでもこの世界に戻ることができます。しかし、あなた達人間が、自縛霊と浮遊霊を戻すことをしないでだけです」

「何故だ！」

「その前に自縛霊や浮遊霊が、寄り憑くところを常に与えていることを知るべきです。この世界で悟りを開くより、自縛霊や浮遊霊を住みやすい人間界にしていることに、気づくことです」

「自縛霊や浮遊霊を、住みやすくしている、原因は何なのだ」

「子供達を不幸にしたいならばと、同じことです。

遺産相続でモメさせたいならば、親が子供を平等に扱い、平等に親孝行させればよい。

長男夫婦を離婚させたいならば、娘夫婦を毎日出入りさせればよい。

長男夫婦を離婚させたいならば、弟夫婦を毎日出入りさせればよい。

親が我が子を兄弟喧嘩させたいならば、順序と立場を無視して親孝行させればよい。

息子夫婦を親不孝者にしたければ、娘夫婦に親孝行させればよい。

家を継いだ娘夫婦を親不孝者にしたければ、嫁いだ娘夫婦に親孝行させればよい。

嫁いだ娘と婿を喧嘩させたいなら、親と娘でお互いの鍵を持ち合えばよい。

我が子達を不幸にしたいならば、親自身が立場と順序を無視して親孝行すればよい。

崇りと因縁を造りたいならば、長男夫婦を追い出し絶縁すればよい。

我が子と孫を借金地獄に陥れたいならば、本家の土地や財産を奪い取ればよい。

子孫を絶やしたいならば、子供達全員に御霊祀りや先祖供養をさせればよい。

長男夫婦と両親を喧嘩させたいならば、娘や弟夫婦が親の愚痴を聞けばよい。

娘が嫁と喧嘩したいならば、嫁を無視して親孝行すればよい。

長男と弟を喧嘩させたいならば、長男を無視して弟に親孝行させればよい。

子供達を絶縁させたいならば、親が子供達を隣りに住まわせればよい。

子供達を争わせたいならば、共同で同じ仕事をさせればよい。

本家を絶やしたいならば、子供達全員が平等に、遺産相続争いをすればよい。

孫や甥と姪に、水子、難聴、身体障害者を造りたいならば、本家の長男夫婦を追い出し

絶縁し、親孝行と御霊祀りや先祖供養を欠かさず、他の兄弟姉妹や親戚から、感謝され

ればよい。

子供達の家を不幸にしたいならば、子供達全員に親孝行と御霊祀りや先祖供養と、墓参

りをさせればよい。

孫を絶やしたいならば、長男夫婦を出して、我が子に誰でも良いから、同居して欲しいと言えよ。

この方法を実行すれば、ラップ現象や霊障になったり、生まれながらにして身体障害者になってたり、アトピーやゼンソクや花粉症に悩まされたり、交通事故死や突然死のようになり、地縛霊や浮遊霊が住みやすいから、取り憑きやすくし、祟りや因縁と言われる原因になります」

「はっきり分かってきた。実際には地縛霊も浮遊霊も、全て人間界で解決できるようにしているのだが、それを祟りや因縁に心を向けさせて、自分を信ずる信仰心ではなく、宗教心になっているから、一つの魂に帰ることが、出来なくなってしまうただけだ」

「そのようですね」

「人を憎むと思う心と立場と順序を欺き、祀りや供養をすることが地縛霊や浮遊霊を求めている。一番嫌いな人が前世の姿と人生だと言うことに気がつかないから、前世の苦しみを背負い、結果として地縛霊や浮遊霊を引き寄せてしまっている」

「そうです。地縛霊や浮遊霊も、親が作った罪を、子供が受け継ぎ孫が現す、と同じ原理

なのです。ことそことあそこは、一つの魂から二つだけに分けて、みずからが前世の姿と人生を、確かめただけだったのですが、人間界に留める祀り方や供養によって、分離を繰り返し、親や先祖を奪い合い憎しみ合い、挙げ句の果てに、遺産相続争いで弁護士を入れ、人が人を決め事により裁いているから、人間界に留めて浮かばれなくなってしまうのです」

「憎しみは憎しんだ人の魂を、心の引力で我が子として、預かり育てる誕生だから、その前に十月十日を待たず、水子になったり、病弱になったり、心を病む子が授かってしまうのか」

「そうですね。不幸な人は他人の事を、みずからの心が入り込めないほど、入れ込んでしまっているから、地縛霊や浮遊霊の、住みかにしているのです」

「その他人と言うことは、前世の己のことなのか？」

「そうです。人間が他人だと思っている人達は、前世の自分の姿と人生なのですから、現世の自分が外に出てしまい、自分の心の家に帰ることが出来ないのです。ノイローゼ、不眠症、肩こりや頭痛、躁鬱病、憎しみや怨み、そねみや争い、不満や不安などが、地縛霊や浮遊霊を、人間界に留める原因です」

「それをどうすればよいのか？」

「みずからが自分の心の家に帰り、前世のみずからに、出て行ってもらうことです」

「病人は病氣の話しをし、貧乏人はお金がない話し、成功者は成功の話しをすることも、同じ原理なのか？」

「その方法が、自分の心の家に、帰ることが出来るか、出来ないかの境目です」

「自分を信ずることか？」

「前世の人生を教えてくれる人を、信ずることが、みずからに感謝することになります」

「前世の親に再会するために、妻の親と出合い、確心できたことに感謝する。

前世の親に再会するために、夫の親と出合い、確心できたことに感謝する。

前世の娘と再会するために、息子の嫁と出合い、確心できたことに感謝する。

前世の息子に再会するために、娘婿と出合い、確心できたことに感謝する。

前世の兄弟と再会するために、妻の兄弟と出合い、確心できたことに感謝する。

前世の兄弟と再会するために、夫の兄弟と出合い、確心できたことに感謝する。

前世の自分と再会するために、孫が誕生し出合い、確心できたことに感謝する。

前世の配偶者と再会するために、孫が誕生し出合い、確心できたことに感謝する。

前世の友と再会するために、現世の友と出会い、確心できたことに感謝する。

前世の自分と再会するために、現世の友と出会い、確心できたことに感謝する。

前世の親と再会するために、現世の友と出会い、確心できたことに感謝する。

前世の兄弟と再会するために、妻と出会い、確心できたことに感謝する。

前世の兄弟と再会するために、夫と出会い、確心できたことに感謝する。

前世の母の人生と再会するために、息子の嫁と出会い、確心できたことに感謝する。

前世の父の人生と再会するために、娘婿と出会い、確心できたことに感謝する。

前世の両親の人生と再会するために、義兄弟と出会い、確心できたことに感謝する。

後妻にとって先妻の子供は、前世の子であったことを、孫の人生で、確心できたことに感謝する。

後妻の人は前世で先妻であったことを、孫の人生で、確心できたことに感謝する。

母は前世の生き方が、息子の嫁の人生であったことを、確心できたことに感謝する。

父は前世の生き方が、娘婿の人生であったことを、確心できたことに感謝する。

息子夫婦は前世では両親であったことを、確心できたことに感謝する。

娘夫婦は前世では両親であったことを、確心できたことに感謝する。

妻の前世は嫁であったことを、息子の嫁によって、確心できたことに感謝する。

父の前世は婿であったことを、娘婿によって、確心できたことに感謝する。

父は前世では女であったことを、息子の嫁によって、確心できたことに感謝する。

母は前世では男であったことを、娘婿によって、確心できたことに感謝する。

父は前世で二男であったことを、我が子二男によって、確心できたことに感謝する。

母は前世で二女であったことを、我が子二女によって、確心できたことに感謝する。

父は前世では女であったことを、我が子長女によって、確心できたことに感謝する。

母は前世では男であったことを、我が子長男によって、確心できたことに感謝する。

長男でも前世は二男であったことを、我が子二男によって、確心できたことに感謝する。

長女でも前世は二女であったことを、我が子二女によって、確心できたことに感謝する。

二男でも前世は長男であったことを、孫によって、確心できたことに感謝する。

二女でも前世は長女であったことを、孫によって、確心できたことに感謝する。

叔父夫婦の人生を我が息子夫婦によって、確心できたことに感謝する。

伯母夫婦の人生を我が娘夫婦によって、確心できたことに感謝する。

男は前世では女であったことを、妻によって、確心できたことに感謝する。

女は前世では男であったことを、夫によって、確心できたことに感謝する。

兄弟の人生を我が子や孫によって、確心できたことに感謝する。

親の人生を兄弟によって、確心できたことに感謝する。

親の人生を妻の兄弟によって、確心できたことに感謝する。

親の人生を夫の兄弟によって、確心できたことに感謝する。

このように思えば、感謝する方法になり、全てに感謝しているから、みずからに感謝しているのと同じことになる。」

「そうです。その通りです。みずからの心に帰り、みずからに感謝が出来れば、相手に欲しい物を、与えることが出来ます」

「自分が欲しい物を、自分が求めてはいけないと言うことになるが？」

「求めることは、現実には存在しないと、思っているからです」

「求めるのではなく、自分を信じ、自分に感謝することだけでよいのか？」

「そうです。自分を信ずることが、ここの世界と共通の導きになります。自分を信じていない人達が、心に隙間を作り、その隙間に余分な物事を入れ、不満や不安、怨みやひがみを充満させ、相手に求めることだけを描いているから、ここの世界と離ればなれになり、

不幸を心に充満させてしまっているのです」

「悪に感謝することと同じ原理だな。自分が嫌っている相手から、どんな言葉を聞かされようが、その相手に感謝すれば、不安を求める行為に成らず、みずからの心に帰ることが出来、みずからを幸せに導くことになる」

「嫌いな相手から、嫌いな言葉が返ってくることは、前世で言った言葉が現世で確認できるのです。それは前世の人生を、確信したかったからです」

「前世で言った言葉が、一番嫌いな人の口を使い、こだまのように現世で返ってくる」

「その通りです。素晴らしい解釈です。それは、前世の人生を教えてくれる人を信ずることです。どんな言葉を聞かされようが、内なる徳を信じなさい。内なる神を信じなさい。人の心に囚われず、常に自分を信ずる心に満ち溢れなさい。そうすれば、他人の心が入り込む隙間がなくなり、神様が幸せに導いてくれるでしょう」

「要するに、人の言った言葉や態度に振り回されず、常に内なる心を信ずることを、考えていけば良いという訳か？」

「そうです。みずからが描いたことは、現実になりますから、みずからを信じ、みずからに感謝した人は、どんな人にも神様の導きがあり、どんなことが起きようとも、守って下

「さいます」

「みずからを信じ、みずからに感謝することは、みずからの心が満ち溢れる。守られたいとか、幸せになりたいとか、不幸になりたくないと思う心が、前世の己を嫌っているから、現世の人生に不安が起きる。善は悪に感謝し、陽は陰に感謝し、親孝行者としてみられる人は、親不孝者に感謝することが、大自然の摂理であり、立場と順序と靈魂の掟を守りさえすれば、ことそこそこあそこが一つの魂になり、この世界と同じになる」

「完璧です。完全です」

「生前はそんなことを、思ったことがなかった」

「人間は常に完璧です。完全です。完全無欠です」

「何故、人間はそう思うことが出来ないのか？」

「一つの魂が二つに分かれ、二つが三つに分かれ、区別だけなら良いが差別して、ことそこそこあそこ、分け隔ててしまったからです」

2 導きに感謝

「この幸せを願うなら、その幸せを祈ればよいという訳か。欲しいなら与えよ」

「そうです。その通りです。それがみずからの心の導きです。それがみずからに感謝することなのです。それが神様に感謝することです」

「私は今まで、こう思ったことがなかった。今までなら、神様を崇拜したり、観世音様を通して、ご先祖の導きがあることを祈り、祈れば守られることを説いていた」

「前世のあなた方が、私達を誕生させた目的は、ことごとあそこの魂を、一つにすることを、誓うことでした」

「共同体にすることか？」

「共同体と言うよりは、一心一体と言った方が、理に叶っていると思います」

「そうだな。大自然と共存共栄なら、共同体でも良いが、人間は魂が一つから二つに、分

かただけだから、一心一体の方がいいな」

「そうです。ここもそこもあそこも心を一つにすれば、この世界と同じく、素晴らしい人間界ができます。そのためには、みずからの心の導きに感謝することです」

「神様やあなた達に感謝する前に、自分に感謝することから、始まればよいのか？」

「そうです。どんな体験をしようが、どんな境遇に合おうとも、全てはみずからに感謝することです。それはみずからが求めたことであって、それ以上でも、それ以下でもありません」

「あなた達や神様に、感謝することは出来ないのか？」

「神様と私達は、あなた達と一心一体ですから、私達はあなた達の子供です。あなた達は子供さんを守ってあげることが、私達に対しての感謝なのです」

「そうか分かった！ 我が子は天使なり、天使は我が子なり、我が子は観世音様なり、観世音様は我が子なり、我が子は天照大御神様なり、天照大御神様は我が子になる。素晴らしい導きだ。素晴らしい導きに感謝します」

「そうです。私達に感謝したいなら、みずからの心の導きに感謝しなさい。私達に感謝したいなら、我が子の心の導きに感謝しなさい」

「私は私の心の導きに感謝します」

「そうです。みずからの心の導きに感謝してから、

あなたは素晴らしい神の子です。

あなたは私達の子供である前に神の子です。

あなたは私達に勇気と感動を与えてくれる神の子です。

あなたは私達を神の世界に導いてくれる神の子です。

あなたは私達に安らぎと安定を心から癒してくれる神の子です。

あなたは私達が忘れていた幼い頃の冒険を蘇らせてくれる神の子です。

あなたは私達に出来なかった夢と希望とロマンを与えてくれる神の子です。

あなたは私達に『気づき!』を導く神の子です。

あなたは『やる気!』『元気!』『根気!』がある神の子です。

あなたは毎日向上する神の子です。

あなたの微笑みは何物にも代えがたい神の子です。

あなたの細胞は日々増え続け光り輝く神の子です。

あなたに会えて心のあり方を変える事が出来る神の子です。

あなたは素晴らしい人生を体験することが出来る神の子です。

あなたは最幸な神の子です。

あなたは最幸な魂がある最光な神の子です。

あなたは私達の先祖の魂を受け継ぐ最光な神の子です。

あなたの心の導きが神様の導きに叶いますから心から感謝します。

と思うことが、神様や私達に対しての感謝なのです。我が子の心の導きに感謝しなさい。

この方法がこの世界の導きです」

「素晴らしいここの世界が私を分かるようにしてくれた。素晴らしいここの世界が私を変えてくれた。素晴らしいここの世界で私自身を選ぶことができた」

「その方法でみずからの心に導かれましたなら、今度は、

主人が自分自身の幸せを祈りたいなら、妻の心の導きに感謝すれば、自分自身が幸せに導かれます。

妻が自分自身の幸せを祈りたいなら、夫の心の導きに感謝すれば、自分自身が幸せに導かれます。

父親が自分自身の幸せを祈りたいなら、長男嫁の心の導きに感謝すれば、自分自身が幸

せに導かれます。

父親が自分自身の幸せを祈りたいなら、我が子長男の心の導きに感謝すれば、自分自身が幸せに導かれます。

母親が自分自身の幸せを祈りたいなら、我が子長男の心の導きに感謝すれば、自分自身が幸せに導かれます。

母親が自分自身の幸せを祈りたいなら、我が子長男嫁の心の導きに感謝すれば、自分自身が幸せに導かれます。

親自身が我が身の幸せを祈りたいなら、我が子長男夫婦の心の導きに感謝すれば、自分達が幸せに導かれます。

親が息子と娘の幸せを祈りたいなら、嫁と婿の心の導きに感謝すれば、息子と娘が幸せに導かれます。

兄弟姉妹が父親の幸せを祈りたいなら、長男嫁の心の導きに感謝すれば、父親が幸せに導かれます。

兄弟姉妹が母親の幸せを祈りたいなら、長男の心の導きに感謝すれば、母親が幸せに導かれます。

孫の幸せを祈りたいなら、子供達の心の導きに感謝すれば、孫が幸せに導かれます。

親が娘の幸せを祈りたいなら、嫁の心の導きに感謝すれば、娘が幸せに導かれます。

親が二男の幸せを祈りたいなら、長男嫁の心の導きに感謝すれば、二男が幸せに導かれます。

親が長女の幸せを祈りたいなら、長男嫁の心の導きに感謝すれば、長女の幸せに導かれます。

親が二女の幸せを祈りたいなら、長男の心の導きに感謝すれば、二女の幸せに導かれます。

親が子供達の幸せを祈りたいなら、我が子長男夫婦の心の導きに感謝すれば、子供達が幸せに導かれます。

長女が母親の幸せを祈りたいなら、長男の心の導きに感謝すれば、母親が幸せに導かれます。

長女が父親の幸せを祈りたいなら、長男嫁の心の導きに感謝すれば、父親が幸せに導かれます。

二女が母親の幸せを祈りたいなら、長男の心の導きに感謝すれば、母親が幸せに導かれ

ます。

二男が両親の幸せを祈りたいなら、兄夫婦の心の導きに感謝すれば、両親が幸せに導かれます。

長男が我が子の幸せを祈りたいなら、両親の心の導きに感謝すれば、我が子が幸せに導かれます。

二男が我が子の幸せを祈りたいなら、兄夫婦の心の導きに感謝すれば、我が子が幸せに導かれます。

孫の幸せを祈りたいなら、子供達の立場と順序を守れば、孫達が幸せに導かれます。

我が家の幸せを祈りたいなら、三軒両隣の心の導きに感謝すれば、我が家が幸せに導かれます。

水子や幼く亡くなった子供を祀り供養したいなら、今生きている子供達の心の導きに感謝すれば、水子や幼く亡くなった子供が幸せに導かれます。

美しい花を咲かせたいなら、腐葉土の精霊の導きに感謝すれば、美しい花として導かれます。

優等生が優等生でありたいなら、劣等生の心の導きに感謝すれば、優等生として導かれ

ます。

親孝行者が親孝行でありたいなら、親不孝者の心の導きに感謝すれば、親孝行者として導かれます。

ここがその心の導きに感謝すれば、ここが幸せに導かれます。ここがあそこの心の導きに感謝すれば、そこが幸せに導かれます。この方法が、人間界とこの世界と、一心一体になれる唯一の導きです」

「分かる」

「ここであるみずからは、神の世界と一心一体ですから、みずからを呼び起こす処と選びなさい。だから、

ここは神を求める処ではなく、内なる神に感謝する処として選びなさい。

ここは神に頼む処ではなく、内なる神に報告する処として選びなさい。

ここは神に願いを訴える処ではなく、内なる神に祈る処として選びなさい。

ここは神に依存する処ではなく、内なる神を信ずる処として選びなさい。

ここは判断してもらう処ではなく、内なる神の導きに感謝する処として選びなさい。

ここは過去を嘆く処ではなく、素晴らしい人生を祝福する処として選びなさい。

ここは未来を思いわずらう処ではなく、過去の人生に感謝する処として選びなさい。

ここは神に信じてもらう処ではなく、内なる神を信ずる処として選びなさい。

ここは自由を求める処ではなく、内なる神に自由を宣言する処として選びなさい。

ここは人を許す処ではなく、みずからを許す処として選びなさい。

ここは病氣平癒を祈る処ではなく、素晴らしい体験に感謝する処として選びなさい。

ここは外に愛を求める処ではなく、内なる愛を育てる処として選びなさい。

ここは愛を求める処ではなく、愛を与える処として選びなさい。

ここは祈願をする処ではなく、内なる神の導きに感謝する処として選びなさい。

ここは人を怨む処ではなく、内なる神の愛に感謝する処として選びなさい。

ここは人をねたむ処ではなく、内なる神の体験に感謝するところとして選びなさい。

ここは自分を卑下する処ではなく、みずからの心の導きに感謝する処として選びなさい。

ここは情けが帰ってくる処ではなく、他の人に与える処として選びなさい。

ここは名誉を求める処ではなく、心の悟りを開く処として選びなさい。

ここは権力を維持する処ではなく、相手に位を与える処として選びなさい。

ここは病氣を患う処ではなく、全てを許す処として選びなさい。

このように選ぶことにより、神の住む処になり、あなたは最も幸せな魂があり、最も光り輝く神に生まれ変わります」

「ありがとうございます。」

私は私の心の導きに感謝します。私は私の魂の導きに感謝します。私は大自然の精霊の導きに感謝します。私は妻の心の導きに感謝します。私は我が子の心の導きに感謝します。私は兄夫婦の心の導きに感謝します。私は妻の兄夫婦の心の導きに感謝します。私は天使ちゃんの心の導きに感謝します。私は観世音様の心の導きに感謝します。私は天照大御神様の心の導きに感謝します。私はこの世界の導きに感謝します。一つお伺いしたいことがあります。私に悟りを開かせていただいた神様の御神名は？」

「アメノミナカヌシノカミ、タカミムスビノカミ、カミムスビノカミです」

魂の図式

No.
1

二人の男女が結魂の契りの縁ができました。

男性を□にし、女性を○にします。

女性

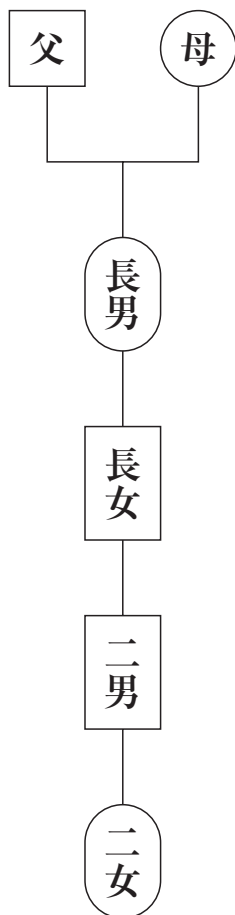
男性

二人は幸せな家庭を築き、子供が誕生し父と母になりました。

父と母と子供の魂の分類

父親の魂は、長女と二男に分け霊されます。

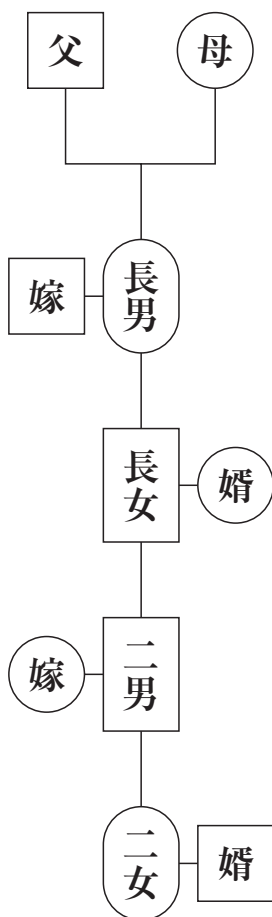
母親の魂は、長男と二女に分け霊されます。



長男・三男・五男・七男は、同じ魂です。
 長女・三女・五女・七女は、同じ魂です。
 二男・四男・六男・八男は、同じ魂です。
 二女・四女・六女・八女は、同じ魂です。

両親と子供達とその配偶者の魂の分類

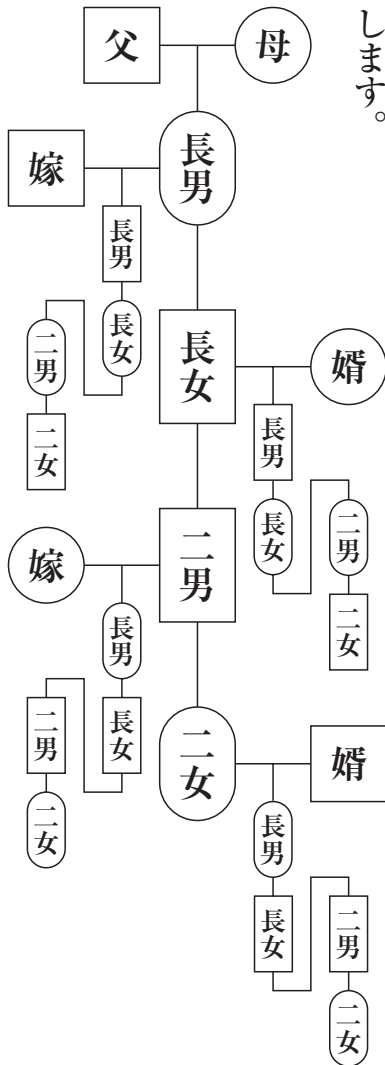
父親の魂は、長男嫁と二女婿を出迎へ結魂されます。
母親の魂は、長女婿と二男嫁を出迎へ結魂されます。



長男嫁・三男嫁・五男嫁・七男嫁は、同じ魂です。
長女婿・三女婿・五女婿・七女婿は、同じ魂です。
二男嫁・四男嫁・六男嫁・八男嫁は、同じ魂です。
二女婿・四女婿・六女婿・八女婿は、同じ魂です。

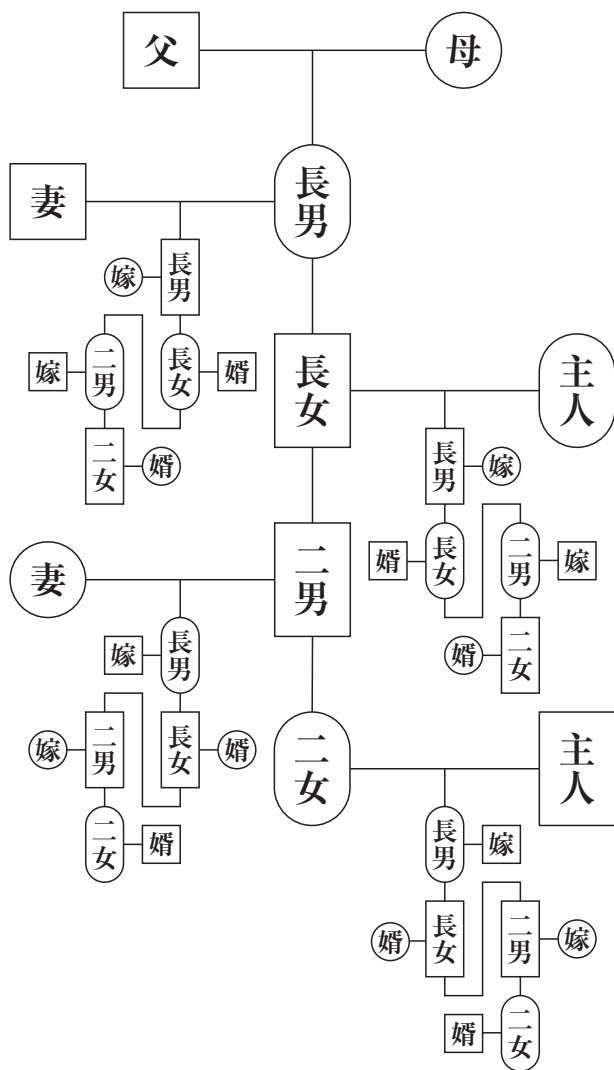
両親と子供達と孫の誕生の魂の分類

子供達は、それぞれ父と母になりますので、またNo. 3の図式で分類をします。



☆長男は誰でも○になるのではなく、始めに夫婦を○と□に決めて魂の図式ができています。長男でも□や○の分類になると思って下さい。

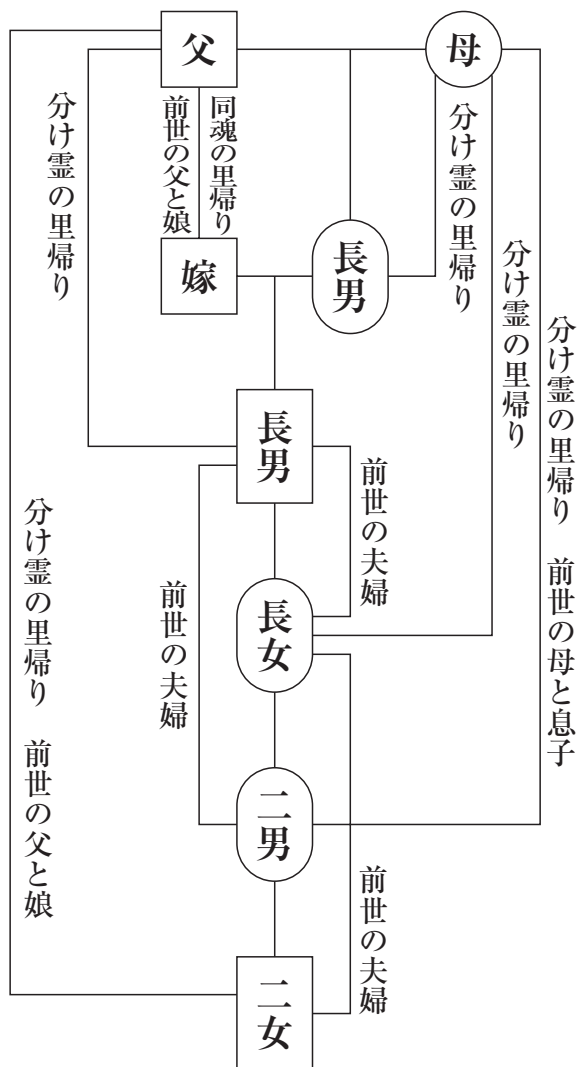
両親と子供達と孫の配偶者の魂の分類



No.
6

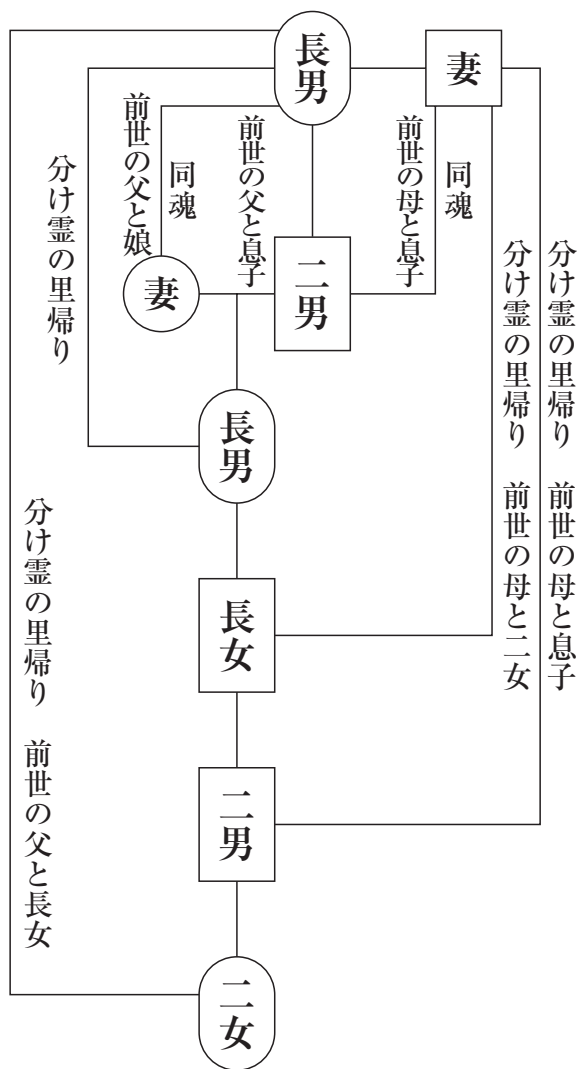
分け霊と同魂の里帰りの分類

両親と長男夫婦の魂の図式



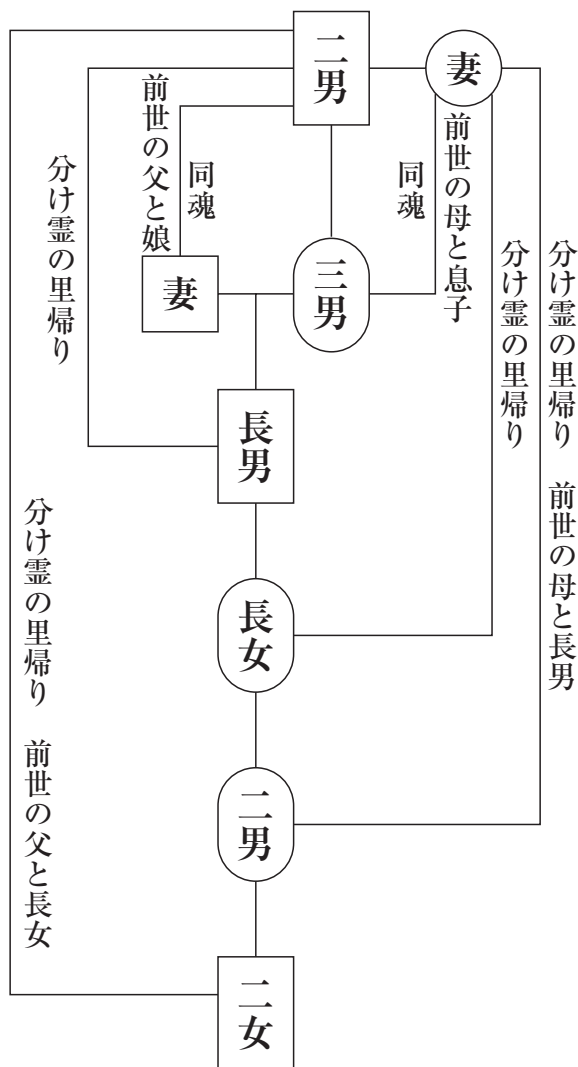
分け霊と同魂の里帰りの分類

長男夫婦と二男夫婦の魂の図式



分け霊と同魂の里帰りの分類

二男夫婦と三男夫婦の魂の図式

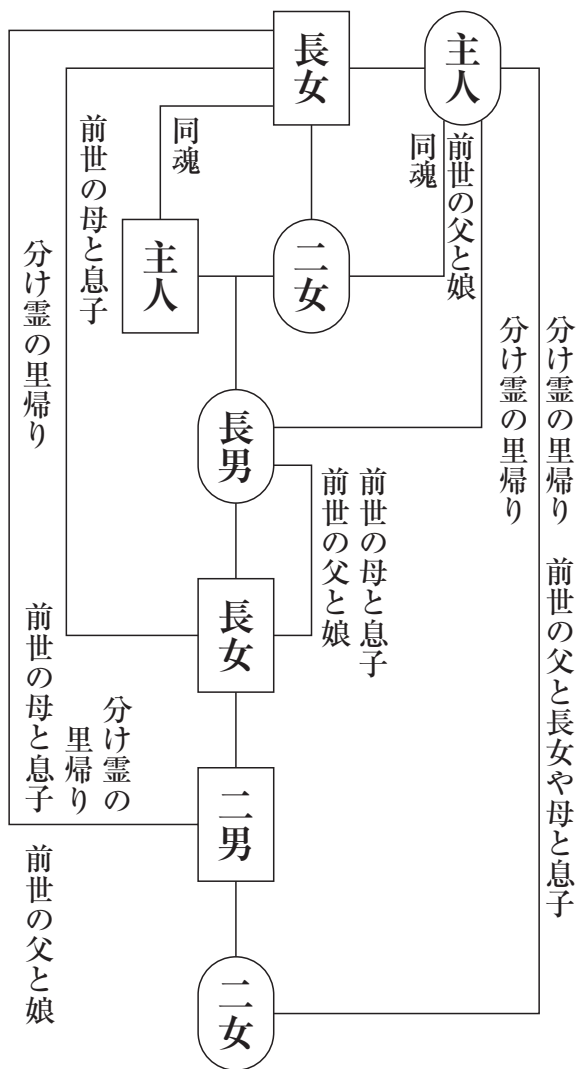


両親と長女夫婦の魂の図式



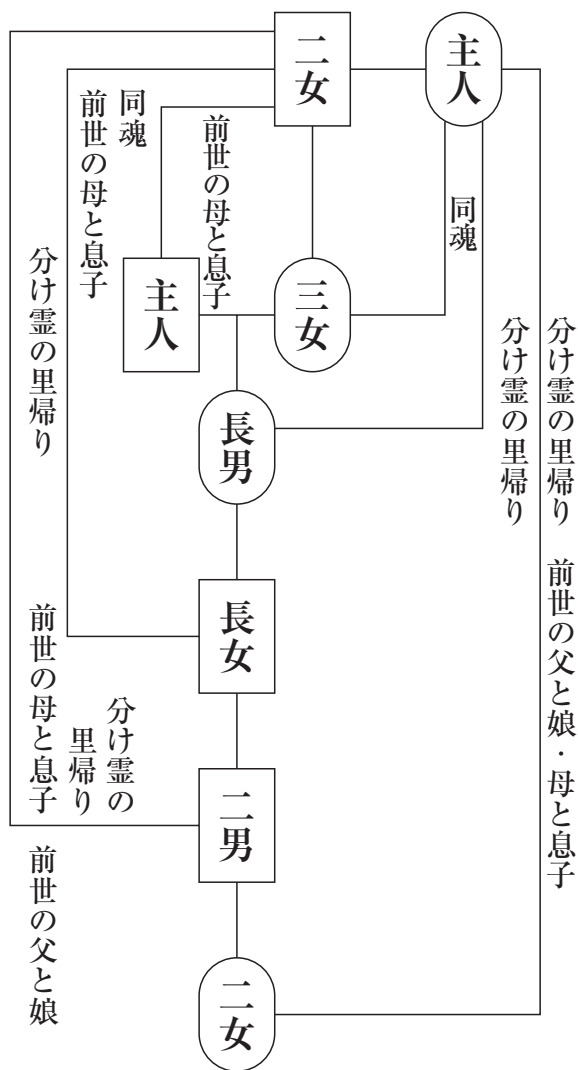
分け霊と同魂の里帰りの分類

長女夫婦と二女夫婦の魂の図式



分け霊と同魂の里帰りの分類

二女夫婦と三女夫婦の魂の図式



あとがき

私が『魂のゆくえ』の物語を、書く切っ掛けとなったのは、私が二十歳の時に亡くなった祖父との通信が出来たからです。私の家は父親で、十二代続いている家系で、代々農家を営んでいましたが、祖父の祖父の代で、ある宗派に入信し、農家と兼業で、神主になりました。神主のルーツは十二代前にさかのぼり、初代は分家に出た二男で、その親は紀伊の熊野で、神主をしていたと、聞き納得しました。

これは偶然ではなく、必然的な一致だと分かったのは、亡くなった祖父との通信で、知ることが出来ました。何故、亡くなった祖父と、通信が出来たと言われても、私にも分かりません。だが事実の違いなく確かです。その当時、誰も信じてくれる人が、いなかったことは悲しかった。

その頃、私は十数年、宗教を自分の道として歩いていました。と言うよりは、父親の代で農家兼宗教家として、四代目になっていて、その長男として、生まれたからです。

しかし、始めから宗教家を、自らの道として、選んだものではありません。小学校に入学

した頃、突然リュウマチだか、神経痛だか解らない、病気になったり、筋肉から膿が出る筋炎と言う病にかかったり、父親はカリエスで、五年間寝たきり、私も同じように、背骨の痛みの病にかかり、中学の頃より、背骨を固定するサラシを巻き、学校を休みがちで、勉強が大嫌い、高校もどうか何とか入り、学校を休んでは、山の中を歩き回ったり、花札やパチンコや麻雀、そして土日には、露天商で徹夜のバイト、春夏秋冬の休みには、長野県白樺湖で、ホテルのバイトに明け暮れた高校生活でしたが、それでも何とか卒業できました。

そのバイトの水商売が切っ掛けとなり、高校を卒業と同時に、調理師の道に入り、足かけ十年と言っても、上司や仲間との喧嘩で、何度も職場を転々とし、自分でも愛想を尽かしていた。ただ空しく、毎晩酒を浴びるように飲み明かし、朝起きると惰性のように、仕事をするだけの人生でした。

結婚と同時に、家業の農家と兼業の、宗教の道に入り、色々な宗教書を読みあさっても、空しさだけは、消し去ることが出来ず、自分で自分を、がんじがらめに追いつめるだけで、誰に相談することも出来ず、我を忘れるために、毎晩一升に近い酒を飲む。精神的に不安定な日々が何年も続き、離婚寸前で、波瀾万丈の人生でした。

ある時、地元の神社の神主が、勇退するから、神社の官舎に入って、神明奉仕をしてはどうか？ と誘われ、二つ返事で妻と三人の子供（実際には四人の子供で長男は実家に残す。）と、官舎に移り住みました。神明奉仕は真剣でしたが、毎晩のように、酒を飲みに出歩き、憂さ晴らしをしていました。今でも忘れませんが、昭和五十九年の夏頃、どこからともなく、訳の分からない声が、聞こえ始めたのです。それは「そうだ！」「そうではない！」と言うだけでした。私が話すことに対して、理に叶っていれば「そうだ！」と言いい、間違っていれば「そうではない！」と言うだけでした。

私は半信半疑でしたが、確かに聞こえていた。だが周りの人達には聞こえず「お前は酔っぱらいだから！」だとか「そんなバカな！」や「気が変になったのではないか！」と言うだけで、信じてもらえなかった。自分でも不思議でならなかったが、何故だか分からないが怖さはなく、空しい心を理解してくれる友達が出来たような気がして、ならなかったのです。

それから五年後、母の父親が亡くなりました。八十八歳の人生でした。私は悲しかった。反発心だけの人生だったのだが、心の中にポツカリと、穴が開いたようになりました。それから間もなく、祖父の声が聞こえるようになり、通信が始まったのです。それは魂の原

理の話で、初めて聞く事ばかりなので、分からないことが多く半信半疑でした。

私の家は代々「気学」を元に運命鑑定をしていましたが、運命鑑定では計り知れないことも、魂の原理に当てはめると、理解が出来ることが、分かってきたのです。

その魂の原理が理解できれば出来るほど、現実社会とかけ離れた事ばかりなので、空しさが沸き孤独感に陥り、酒を飲まなければ、気が晴れなかった日々が続きました……………。

この魂の原理は、靈魂の掟で、人間界の慈悲や情けや道徳でもなく、ましてや崇りや因縁でもない。現実の不幸は、全てが同じ道理に、向かっていることなのですが、魂の原理を人々に話しても、誰ひとりとして、信じてもらえる人がなく、周りの人達からは狂人扱いや、インチキ扱いされたり、挙げ句の果ては、宗教弾圧さえきました。しかし、妻と数人の人達は、魂の原理を理解してくれたので、何とか今日まで、切り抜けてこれたのです。この魂の原理は「天ノ道」であり、何人たる人達も、脅かすことの出来ない靈魂の掟であり、何人たる人達も欺くことが出来ない、根元だと思えます。それを『魂のゆくえ』と言う物語として書いたつもりです。

私が宗教家として、二十数年生きてきた中で、自分自身が少しずつですが、悟りを開き成長してきた、過程の報告です。人間は説教されたりすれば、反発心を作るだけで何も解

決できません。ましてや子供達を説教すればするほど、非行に走ります。人間は「何々を
してはいけない！」と言われたことを、平然とするものです。

ただ「気づく！」ことだけだと言うことが、分かってもらえれば幸いです。

平成13年10月

おわりに

私達親子は一宗派、一教会の一神主として現代四代目の教会長と五代目の私と我が息子長男健嗣も六代目として神明奉仕をしています。この本の表紙は健嗣に書いてもらいました。

しかし、私達親子代々は宗派の信者として勧誘する気はありませんし、そのような行動は一切取っていません。この魂のゆくえは宗派の教義や定義書としてではなく、また各宗派の教えや教義が悪いのではなく、昔はお宮参りとお寺参りが主流だと言うことだったのです。弔いは地元の人達の強力で成り立ち、結婚式、誕生、旅立ち、弔い、法事、水害、火事、災害、お祭、元服など土地柄によって多少異なりますが十の決まりがありました。その決まりは組や村をまとめ、一致団結することを目的にして地元を守っていました。今でも残っている言葉に「村八分」があります。この村八分は罪人を村から追い出せば無法者や渡世人になりますから、二分だけ付き合いを残したのです。それ以外は祝い事やお互い様だと言うことです。その二分が「火事と弔い」なのです。どんな罪人でも火事と弔い

は悲しいことですからお互いに助け合いましょう。と約束していました。その約束はどんな人間でも村の協力なしではやっていけないからです。

この二分の一つの弔は三軒両隣の習慣として地域によって異なりますが、自分の家の家族や親戚だけが拜むのではなく、三軒両隣の人達が集まって奉仕をし故人を偲んで拜んでいました。ですから弔いにしても法事にしても隣組の協力が必要であり、家族や親戚の人達のためでもないのです。「遠い親戚より近くの他人」と言うように三軒両隣を大切にしてお互いが助け合うことを忘れないためでした。

何かあれば組や群や村が一つの心にまとまる方法を習慣としていたのです。それがお宮とお寺の役割で、氏神様や菩提樹や檀家寺だったのです。

それが戦後家督制度がなくなり、供養や祀りだけが一人歩きをしてしまったから、こことそことあそこに魂が分離し不幸が起きてしまったのです。

それを理解してもらいたいために毎日相談や鑑定をさせていただいています。一人でも多くの人達に、少しでも分かってもらいたいためにこの本を通して書いたつもりで、また一人でも多くの人達に気づいてもらうことを目的に書きました。

この本を書き終わった直後に、アメリカでテロ事件の報道を見させていただきましたが、

私の感想として、アメリカの戦争の相手はテロ事件の相手ではなく、「己の敵は己」であり、国がまとまってなかったから、国民一人一人の心をまとめるために、心の引力で引き寄せ集団意識を団結させてくれたのです。その相手に感謝することが魂の導きだと思いますが。

感想やご意見がありましたならお手紙でお送りいただければ幸いです。私の奉仕する教会名に関しては、この本を私一人の独断で書きましたので、私の所属する宗派の管長様にご迷惑をかけますので書くことは出来ません。お許し下さい。

最後にこの時期に出版出来たことは、始めに文芸社の吉田良太郎さんにお会いでき、編集の労をとってくださった関賢二さんに心から厚く感謝します。

平成13年10月

〒441・8077

愛知県豊橋市神野新田町字イノ割8番地

鈴木徳彦

教会電話 0532・31・8595

著者プロフィール

鈴木 徳彦 (すずき とくひこ)

1951年	昭和26年 8 月27日	愛知県豊橋市神野新田町現在地で出生
1970年	昭和45年 3 月	静岡県立三ヶ日高等学校卒業
1970年	同年	調理師の道に入る
1977年	昭和52年 5 月	結婚と同時に家業の農業兼宗教の道に入る
1984年	昭和59年 4 月	地元の神社に奉仕のため官舎に移り住む
1985年	昭和60年 8 月	後任が入ってきたので家に戻り家業の宗教に専念する

魂のゆくえ

2002年 1 月15日 電子出版発行

著 者 鈴木 徳彦

発 行 者 瓜 谷 綱 延

発 行 所 株式会社文芸社

〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-1

電話 03-5369-3060 (編集)

03-5369-2299 (販売)

<http://www.boon-gate.com>

© Tokuhico Suzuki 2002. Corded in Japan.

ISBN4-8355-2757-7 C0095

(文芸社発行の通常書籍 (紙の本) については、全国書店でお尋ねいただくか、「文芸社ON-LINE」
サイト、<http://www.bungeisha.co.jp> を御参照ください。)

新 01.12.26 Y.H.